



きまぐれレビュー

赤羽 真

なかなか他のことが進んでいないような状態なので、なにか他に書くものはないかと思い、読んだ本やゲームに関する紹介でも書いてみようかと思ったのがきっかけです。（逆に、こういうの書いてて、さらに遅れてしまうんじゃないかというツッコミも浮かんでくるのですが）

とはいえ、いざ考えてみると、どのようなことに重点を置いて書けばいいのか、なかなか難しいです。読んで面白いレビューとは……、と考えるときりがないというか。

それでやっぱりやめとこうかとも思ったりもしたのですが、何も書かなければ始まりもしないかと思いなおし、こうして始めてみることにしました。とりあえず気が向いたらの、考えなしの発進なのですが、お付き合いいただければ幸いです。

レビューの内容については、ゲームとか本がメインになると思います。映画もよく観るのですが、いまのところはあまり書こうと思っていません。ネタバレもあるかもしれないので、そういうのがお嫌いな方は見ないようにしていただければと思います。

少しでも珍しいものを、と思って、海外ものも扱う予定なのですが、なにぶん、この筆者、英語力に関してはいまだに不確かな部分も多いので、ゲームや作品中で使われる単語やその内容について、誤解が生じている可能性もあります。過去の作品をうろおぼえの記憶だけで扱う時もあるので、レビューを読んだ後に遊んだ方が、「あれ、なんか違うんだけど」ということもあるかもしれないのですが、どうかそのへんは生温かい目で見てください。

また、海外ゲームの話などを読んで遊んでみたくなった方は、そういうことについて詳しく書いてあるサイトもあるので、そちらで色々と調べていただければと思います。その上でご自分の判断をお願いします。（本当に機種によって色々と違うので……。私も一度、失敗したことがあります）

あとレビューで取り扱う時に、その対象となる作品の著作権を侵害することになってしまうかどうかかわからず、ちょっと困っているのですが（それも書くのを躊躇した理由の一つだったりします）、そういうものを侵害する意図はまったくありませんので、関係者の方が目にして、「これは困るんだけど……」という場合には、ご一報いただければ対処します。

ちょっとでも読んでいただけたなら幸いです。それではよろしくお願いします。

前作と違って、今作では主人公は設定が決まっているし、しゃべります。なので、いかに主人公に感情移入して同調できるかが鍵となっています。

スリルを求めてダイビングやクライミングをしてきたけれど、心の中ではどこか物足りない気持ちを持っている。そんな主人公が危機的状況に追いやられて命の危険を感じながら戦っていくうちに、そこに自分の求めていたものを感じ始める。草や影の中に身を潜めて敵の動きを窺い、動物たちの息づかいに耳を澄まし、狩っていく。島を支配する人間の狂気に近づいていき、自分も次第にその狂気に染まっていくような不安を抱く。その感覚を身近なものに感じられるなら、とても忘れがたい作品となるでしょう。

スキルはタタウ（タトゥーの現地訛り）を彫ることでその力を体に宿らせるという設定になっています。主人公のジェイソンはもともとかなり運動神経がいい設定なので、儀式によるトランスによって本来眠っていた力に目覚めていく、ということなのでしょう（主人公が狂気に染まっていったら、ということを示唆しているという見方もできますが）。最初は制限がありますが、ストーリーを進めていくうちに解除され、半分ぐらい進めると完全に解除されます。ただ一部のスキルには解除条件があるので注意。スキル全取得も実績のひとつなので、実績を集めている方は特に。

プレイはステルスプレイの方が何かと有利です。テイクダウン（ステルススキル）の方が経験値が多くなるし、後半になると重装備の敵も一撃で倒せるようになるので。ただミッションでは激しい撃ちあいなども用意されているので、銃撃戦も楽しめるかと思います。ときどきイベントでQ T Eが登場しますが、ここは好みが分かれるところかもしれません。

システムは遊びやすくなっています。電波塔を再起動することで全体マップの詳細がわかるようになり、クエストが発生したり、銃器も自由に使えるようになります。地図を買うと収集物が全体マップに表示されます（実績の対象になる収集物は「遺物」「メモリーカード」「日本兵の手紙」です）。敵の拠点を解放すればファストトラベルもできるので、移動が面倒くさいという方もストレスはそれほどたまらないでしょう。乗り物はちょっと使いにくいような気がします。私はほとんど走って移動したり、後半はウィングスーツで高いところから滑空していました。

実績は「爆発物を使って敵四人以上を同時に倒す」やハリウッドスターを探すもの以外はとりやすいです。ハリウッドスターの実績は海外版の表紙にもなっている「埋められた人」を探してチェックすることによって解除されます。動画サイトですでに場所を紹介する動画がアップされてるので、それを参考すると楽です。C o o pモードはオフラインでも取得できますが、二人でプレイしなければなりません。一人でコントローラーを二つ操作してクリアするのもできないかもしれませんが、ちょっと難しいかも。

今作は「狂気」がテーマであるためか、チャプターの初めに「不思議の国のアリス」の文章の一部が登場します。また他にも、過去のエピソードを見ることができる薬にも「Eat me!」と書かれていたり。「不思議の国のアリス」の原作をちゃんと読んでいないので関連性をいまいち把握できていないのですが、読んでおくとさらにストーリーの含みを楽しめるかもしれません（お約

束はできませんが）。プレイされる前に一読してみてはいかがでしょうか。

[豆知識]

ポーカーで1500ドル勝つ実績の簡単な(?)取り方について。

真面目にポーカー勝負しようとするより、最初にとにかくオールインをしてしまうこと。運がいいと四人のうち二人が文無しになって、サシの勝負になります。それからは相手の様子を見つつレイズをかけてプレッシャーを与え、勝負から降りさせる。これで最後の一人を削り倒すと短い時間で勝利できます。

普通にポーカー勝負を挑むのはもちろんですが、ストーリークエスト（ストーリーのあるクエスト、であって、メインと関係あるミッションではありません）でレートの高い勝負をする機会もあるので、そこもチャンスかもしれません（ただ、その勝負で実績が解除されるかは確認していないので、あしからず）。

Prototype

最初に買った海外版のソフトです。ゲームの内容が気になる感じだったということもあったのですが、それよりも、主人公のアレックス・マーサーの声をバリー・ペッパーが担当しているという情報に惹かれて購入しました。（バリー・ペッパーは映画「プライベート・ライアン」で狙撃兵の役を演じていました。映画の後半で敵に気づかれて戦車砲でふっとばされてしまった、あの人です。最近だと「トゥルー・グリット」にも出演してましたね）

最初ということもあってストーリーのかなりの部分が理解できていなかったのですが、スピーディーかつゴア要素の強いアクション部分とステルス要素がうまく取り入れられていて、すぐにハマってしまいました。ゴア要素が強いこともあって日本語版は発売されていませんが、とても斬新で面白いゲームでした。遊んだのがこのゲームじゃなかったら今も海外ゲームをやっていたかどうかかわからない、と言っても過言ではないです。ちなみにこのゲーム、配役もちょっと豪華で、脇役の声で「CSI：ラスベガス」でおなじみ、ブラス刑事役のポール・ギルフォイルさんも出演しています（たぶん、見間違いではないはず）。

いちばん目新しいと感じたのは、敵兵士を「Consume（日本語にすると「喰らい尽くす」みたいな感じでしょうか）」すると、その兵士の姿に変身できるだけでなく、その記憶を自分の中に取り入れたり、能力を得ることができる点です。主人公はこの能力で、真実に近づくための記憶を集めたり、軍事基地に侵入したりします。

人によっては少し難易度が高いと感じるかもしれませんが、いま遊んでもけっこう楽しめるのではないのでしょうか。すでに三回ほどクリアしましたが、英語がもっと理解できるようになったらまたやろうかなと思ってますし。

それから、「Prototype2」が少し前に発売されたのですが、こちらは少し残念な感じでした。アレックス・マーサーの声がバリー・ペッパーじゃなくなっていたので。

[豆知識]

「プライベート・ライアン」には、ベネディクト・カンバーバッチ主演「Sherlock」でモリアーティを演じていたアンドリュー・スコットが小さな役で出演しているそうです（「アンドリュー・スコット」の海外wiki情報より）。いつか確認してみたいなと思いつつ、まだしていないのですが。

ハンサム、変人、孤高、最低な人。コンサルタント探偵から飲食店の店主、ひきこもり、未亡人。もう新しい形なんてないんじゃないだろうかと思ってしまうくらい、今までに様々な探偵役が登場しているし、（それにもかかわらず）これからも生まれていくのでしょうか、よれよれのレインコートに葉巻を吸うロサンゼルス市警の刑事も、魅力的な探偵役のひとりだと言って間違いないでしょう。

この本ではコロンボが活躍する 12 本の短編を読むことができます。もしかすると、映像で見たあなたのお気に入りの作品に比べると、展開や逮捕に至るまでのロジックに少し物足りなさを感じる部分もあるかもしれません。

ですが、ここで描かれているコロンボの魅力は短編であってもいささかも衰えていません。いまやコロンボも携帯電話を使っていますし、煙草の煙が嫌われるようになっているので、葉巻を吸ってもいいですかと聞いてもほとんど断られてしまい、そのたびに残念そうに葉巻を見つめたりしています。コロンボのそんな姿を描く一行を読むだけで微笑ましい気分になります。愛犬がすでに亡くなってしまった話や、高校時代にバイオリンを少しかじっていたらしいという話もちろっと出てきて、事件の話よりもそっちの方に気を取られてしまうこともしばしばでした。

また前書きでは、「最初はコロンボを誰に演じてもらいたいと思っていたか?」「実はあのレインコートはスタジオにある衣装ではなかった」などの裏話も読めますし、ピーター・フォークが書いたコロンボのスケッチも掲載されています（これがかなり上手なのです）。表紙のデフォルメされたコロンボの絵（実はこの絵でジャケ買いしてしまいました）や、裏面には作者とコロンボが同じ格好で撮った写真もあり、コロンボやピーター・フォークのファンにはおすすめの一冊だと思います。

日本人の読者にとって難点があるとすれば、事件のひとつに日系人らしき人物が出てくる話があって、いくつかお約束な感じの部分があるのですが、まあ、そこには目をつぶっていただければと思います。

ジョン・ケアードって誰？ という方も少なくないかと思います。演劇好きでないと、なかなか知る機会のない人かもしれませんね。

どんな人かという、最近、ヒュー・ジャックマン主演で映画化されて再び話題にもなっている「レ・ミゼラブル」のミュージカル舞台でトニー賞を受賞し、日本でも「夏の夜の夢」や、松たか子主演の「ジェイン・エア」、最近では坂本真綾主演の「ダディ・ロング・レッグズ」で脚本・演出を務めた演出家です。

これはそんな彼が演劇にかかわる様々なことについてユーモアを交えつつ、わかりやすく書いた本なのです。

ペーパーバック版の表紙には演劇関係者の推薦コメントが書かれているのですが、誰もがイギリスではかなり有名な人たちのようです（ほとんどwikiチェックですが）。そのなかでもジュディ・デンチさんは、日本でも多くの方が名前を知っている名優ではないでしょうか。そんな彼女が「この本を常にそばに置いておきたい」とコメントしているほどなのですから、それだけでもその内容が窺い知れるというものでしょう。

「代理人（Agents）」に関する部分などは日本とは形式が少し違っているのですが、そのほかの部分は日本の演劇でも参考になることがとても多いと思います。こんな基礎的なことも書いているの？ と驚かされる部分もありますが、つまりは英語が読める人であれば、演劇を知らない人であっても一通りの演劇知識を得ることができるようになっている本なのです。筆者は英語がまだおぼつかないのでちょっと難しいんですが、それでもとても興味深い本です。一度読めば、演劇に関する見方が変わると思います。

いちばん驚かされたのは俳優との接し方に関する部分でしょうか。

日本だと、俳優を怒鳴りつけたりひたすら厳しくする演出家が脚光を浴びたり、良い演出家だと言われる傾向にあるように思うのですが、彼は「俳優の能力や状態を正確に見抜き、相手に応じたコミュニケーションをとり、良い関係を築いていく大切さ」を語っています。

怒って萎縮させたり、相手のやる気を失わせるような物言いは決してしてはならず、俳優同士の間には何かの問題があるようならすぐに察してその問題を解消し、自分の意図と俳優の意図がかみ合っていない場合は冷静にとことん話し合いをして意思疎通を行う。このような考えが随所に見られます。

海外と日本では人付き合いの仕方が違うと言われてしまえばそれまでなのでしょうが、赤の他人が集まって一つのものを作り上げるような場所をまとめるのは、暗黙の了解や頭ごなしの罵倒などではなく、相手を自分と同等の存在として扱い、関係を深めていく能力なのではないかと考えられました。

なんでもビジネス書のように読むのは良くないことだと誰かが書いていましたが、ある意味、この本は上司としてのあり方を学ぶ本として読むこともできるのではないのでしょうか。少なくとも、人間的に成熟した人でなければ優れた演出家にはなれないことだけは確実だと思います。

ただイギリスの演劇界全体がそういう理想郷のような場所かというと、そうではないようで、

項目の中には「Bully」、つまり「いじめ」や「虐待」を意味する欄があり、そこでは裏方や俳優や演出家などが行う可能性がある行為と、それが創作の現場にとっていかに危険なものであるか、そしてその対処法について書かれています。

どこにでもそういうことはあるんだなとちょっと残念な気持ちになってしまいました。当たり前と言えは当たり前なんですけどね。

作家ヴァル・マクダーミッドがゴールド・ダガー賞を受賞した、心理学者トニー・ヒルと刑事キャロル・ジョーダンのコンビが活躍するシリーズです。けっこう前に「Wire in the Blood」という名前（シリーズ二作目の原題）で映像化され、日本でもＣＳで放送されていました。小説も翻訳されているのですが、残念ながら、四作目で止まっている状態です。ですがイギリスやヨーロッパでの人気は変わりなく、宣伝文句によれば、現在でも新作は三十ヶ国語以上で翻訳され、一千万部を売り上げているのだとか。

五作目「Beneath the Bleeding」からはトニーの母親ヴァネッサ・ヒルが登場し、トニーのルーツが明らかになっていきます。ひょんなことから、いないと教えられてきた父親の存在が明らかになり、トニーは自分を捨てた父親に対する苦い感情を抱きながらも調べていくのですが、そこで意外な事実が浮上します。キャロルも過去の事件で受けた精神的な傷を抱えたまま仕事を続けています。それに加えて、六作目の「Fever of the Bone」では上司のブランドンが異動になって新しい上司に来るのですが、彼は予算ばかりを気にする男で、トニーに協力してもらうのはやめて警察内のプロファイリングチームを使うように命令して来たりと、問題は絶えません。

原作を読んでいる方なら、七作目の「The Retribution」はとても気になるのではないのでしょうか。二作目で逮捕されたジャッコ・ヴァンスがとうとう脱獄し、トニーとキャロルに対して復讐を実行します。そして二人にとって身近な存在が次々と脅威にさらされていきます。

ヴァル・マクダーミッドの他の作品も幾つか読んでいるのですが、やはりトニー・ヒルシリーズの新作を早く読みたいと思ってしまうのは、トニー・ヒルの人物造形ゆえかもしれません。

彼は犯罪者の心理を読む事には長けているのですが、分析するというよりは、いかに犯罪者を理解するかということに重点を置いていて、捕まえた殺人犯に対しても見下したりすることなく、その弱さに理解を示しています。そのような人でありながら、人付き合いは苦手で、キャロルにもなかなか好意を伝えられずにいる。そしてトゥーム・レイダーが大好き。

一見、冴えない中年男性なのですが、人間的な魅力があり、ついつい気になってしまうのです。（wikiだと、トニーが「性機能障害」である点が強調されているように思います。たしかにそこがトニーの心理に影響を与えている部分もあるのかもしれませんが、私はあんまりその点は気にしないで読んでます）

ちなみに、こんなことを書いておいてなんですが、実は三作目はまだ読んでいなかったりします。日本語、英語、両方の本を持っているのですが、キャロルに起きる事件のことで躊躇してしまって、どうしても読む手が止まっているんです。まだ新作が出るまで日がありそうだし、そろそろ読もうとは思っているのですが.....。

ジョン・ル・カレのスマイリー三部作をBBCがラジオドラマ化したものです。

ジョージ・スマイリーを演じているサイモン・ラッセル・ビールはジョン・ケアード「シアター・クラフト」の推薦文を書いている人でもあり、正直、それがきっかけでこのCDを買いました。もちろん、スマイリー三部作が好きで、英語で演じているCDドラマが欲しかったから、という理由もあったのですが。（ちなみに、「スクールボーイ閣下」のジョリー・ウェスタビーを演じているのは英ドラマ「ダウントン・アビー」で主役を演じているヒュー・ボナヴィルと、けっこう豪華です）

小説とは構成が少し異なり、たとえば「ティンカー・テイラー・ソルジャー・スパイ」では、ジム・プリドーが撃たれるシーンから始まりますが、演技力が半端ないです。オープニング音楽が流れ、車が止まる音、ジムと将軍の緊迫した会話、銃撃音、ジムが逃げる途中で銃撃を受け、叫び声をあげる。たった一分間のシーンでドラマに引き込まれてしまいます。そこからは落ち着いた大人のドラマが展開していきます。小説を読んでいる人には結末までわかりきっている物語ですが、それでも聴くに値する一品ではないかと思います。

私が買ったのは廉価版のバージョンなのですが、三枚のCDが保護の不織布カバーにも入っておらず、そのまま紙ケースの中に収められていました。私もけっこう驚いたのですが、海外の廉価版というのはこういうのが当たり前のようです。他のラジオドラマ「Cabin pressure」の廉価版ではCD10枚がまとめ買いのDVDメディアのように入っていましたから。気になさる方もいらっしゃるかもしれないので、事前にお伝えしておきます。

余談ですが、映画の「裏切りのサーカス」もけっこう面白かったです。個人的には、トビー・エスタヘイズがスマイリーから飛行場で尋問を受ける前、エスタヘイズがエレベーターに乗っているシーンが印象的でした。エレベーターの扉が開いた時にエスタヘイズの背後に立っていたピーター・ギラムがまるで死神のように見えて、思わずゾクッとしてしまいました。映画の中で、たしか「カーラ・プロジェクト」という文字も見えたので、三部作全てを映画化するのだろうかと思いに期待してたりもします。

ちなみに、サイモン・ラッセル・ビールは映画「理想の結婚」や英ドラマ「MI5 シーズン9, 10」などにも出演しています。興味のある方はこちらどうぞ。

ステラ・アドラーという名前は日本ではあまり有名ではないように思います。私も翻訳された彼女の演技論の本を読むまで知りませんでした。

彼女はアクターズ・スタジオの創立メンバーだったのですが、後にリー・ストラスバーグとメソッド演技に関する意見が異なったため、スタニスラフスキー本人に教えを乞い、その本質を理解したのだそうです。というところとわかりにくいかもしれませんが、簡単に言うと、マーロン・ブランドやアル・パチーノ、ロバート・デ・ニーロにも演技を教えた人、です。（といっても、正式にはアメリカでは色々な人に教わるのが普通だったりもするのですが。アル・パチーノはウタ・ハーゲンという人にも教わっていたそうですし）。とはいえ、気難しい人として有名だったマーロン・ブランドが敬意を示していた人物、と言え、どれほどの人かわかっていただけののではないのでしょうか。

この本は彼女がイブセン、ストリンドベリ、チェーホフの作品について、演じる際にどのような事を理解し、意識しなければならないかを語った一冊です。彼女は「脚本のInterpretation（理解、もしくは通訳、という意味）」こそが俳優の仕事だと語っています。ただセリフを憶えて演じるのではなく、作者の意図を読み取り、台本に描かれた世界を全て理解した上で、その世界を経験する。それこそが演技だと。彼女が語る戯曲についての分析と解説を読めば、その言葉の意味がよりいっそう理解できます。

こういう演技論を教える先生がいて、自分の母国語でこういう演技についての本が読める環境にあるのなら、俳優の演技のレベルが高いのも不思議ではないなと思ってしまいます。もちろん、その分、それだけ高いレベルが求められるということで、競争も半端なく厳しいのでしょうけど。

戯曲に関する解説本、ということで演劇好きや俳優志望者向けと思われるかもしれませんが、それだけでなく、『大学教授のように小説を読む方法』のように、いかに作品を深く読むかという技術を学ぶにも最適な本だと思います。ただ物語を追うだけでなく、そこに何が描かれているのか、それによって作者は何を伝えようとしたのかということを深く味わいたいという人は、この本で彼女の視点を学んでみてください。

また、紹介される戯曲についての知識がなくても興味深く読める本だとは思いますが、語られている作品に目を通してから読むと、さらに面白くなります。

なお、同じシリーズでもう一冊、ユージン・オニールやテネシー・ウィリアムズなどについて語ったものもありますので、そっちの方が興味のある方はチェックされてみてはいかがでしょうか。

女性の顔に硫酸をかけた被告が終身刑を言い渡されました。

重すぎる判決でしょうか、それとも妥当？

素人考えですが、日本ならばおそらく「傷害事件」として扱われるのではないのでしょうか。判決はたぶん3年から重くて5年、もしかしたら7年ほどかもしれません。被告が反省している様子を見せていれば、執行猶予がつく可能性もないとは言い切れません。

ちなみにパキスタンでは本当に終身刑になります。

パキスタンでは性的関係を拒まれた男性や離婚に対して反感を抱いた夫による、硫酸を使った女性への攻撃が多く、そのような事件の犯人が無罪となることも珍しくなかったそうです。そのような事件に対する抑止効果、また、そのような事件の犯人がきちんと裁かれるべきだという考えから、女性議員が法案を提出し、可決されたことにより、このような結果になったのだとか。

このドキュメンタリーは事件の被害者や加害者へのインタビューや、被害者の顔を治療する整形外科医の活動、法案が可決される様子などを見ることができます。

このドキュメンタリーを見て、パキスタンは野蛮という考え、あるいは特定の宗教に関する反感を持つ人もいるかもしれませんが、それは少し違うような気がします。これはどこの国でも経験してきた普遍的な流れとして解釈する方が（正しいとまでは言いませんが）よいのではないのでしょうか。

多かれ少なかれ、どの国にも偏見や差別というものは存在していました。イギリスでは貴族階級と労働者階級の人々の間の階級差の問題、アメリカでは黒人差別の問題（東洋人移民の差別、ネイティブアメリカンへの差別を考慮すると、非白人に対する差別意識、と考えた方が正しいのかもしれません）、ヨーロッパでは、北欧では……、などなど。例を挙げればきりがありません。もちろん、西欧に限りませんし、日本も例外ではありません。

このような意識は世界の流れがそのままであれば変化しないままだったでしょうが、時代の変遷によって階級差が崩れてきたり、様々な人が教育の機会を得たことによって、異議を唱える人が現れるようになり、意識の変化や法の整備が行われ、魔法のように問題は解決はしないまでも、少しずつ前進してきたわけですね。

パキスタンのこの例に限らず、最近ではインドでも女性蔑視の問題が浮上し、問題となっているわけですが、これも従来ではそれほど疑問視されてこなかった価値観が、主にその差別を受ける側にあった女性が教育を受けたり社会に進出することで、また情報化社会によって世界の人々の視線にさらされたことで、疑問視されるようになった結果なのだと思います。

そして今は、その国に住む人たちの力によって、少しずつ現代に即した形に変化していく過渡期にあるのではないのでしょうか。実際、それを迎えないまま、現代の国際社会の中で存在し続けるのは難しいでしょう。もちろん、その道のりは簡単なものではないでしょうが。

今の私たちから見ればそれがどのような行為かは一目瞭然ですが、私たちが経験した時もそれは簡単ではなかったのに、その過渡期にある人々を簡単に野蛮として切り捨ててしまうのは、いささか乱暴に思えます（意見を言うのは大事ですが、でも、「それってよくないよね」という意

見を表明することと、「野蛮だ」と言って切り捨てるのはちょっと違いますよね）。もちろん、そのような行為は行われるべきではありませんし、犯罪行為として処罰される必要があります。そのために、法というものが存在するわけですから。

他の国の出来事ではあるのですが、このようなドキュメンタリーやニュースをチェックし、常にその国に対して意識を向け、変化しようとする人々の動きに注目しているだけでも、ちょっとは違ってくると思います。少なくとも、何も知らないままではいられないよりは。

というわけで、もしよろしければ、一度ご覧になってみてはいかがでしょうか。もちろん、楽しい内容ではないのですが。

ちなみに、個人的な考えではこのパキスタンの法律は妥当だと思います。あなたはどうか？

4月末に日本語版が発売される「Bioshock infinite」ですが、とりあえずクリアしたので、いくつか書いてみようと思います。

主人公Booker Dewittはピンカートン社の探偵だった男で、エリザベスという女性をニューヨークに連れて行くという目的で、空中都市コロンビアに行きます。そこではバプティズムを基軸にした宗教が存在し、預言者を名乗る人物が実質的に支配しています。一見平和で美しい世界に見えますが、有色人種に対する差別観が根強く存在していて、各地にプロパガンダを流すキネトスコープがあるだけでなく、いかに有色人種を倒したかを教育する記念館もあります。

町の各地には偽の羊飼いが仔羊を狙っているという警告が貼られているのですが、実はその偽羊飼いの特徴は主人公のある特徴と一致しており、それが発覚したことがきっかけで戦いとなります。

主人公はエリザベスが住んでいる塔に向かい、彼女をニューヨークへ連れて行こうとしますが、様々なアクシデントに見舞われます。その中で有色人種を束ねる反乱軍「Vox poluli（ラテン語で「民衆の声」を意味するらしい）」に力を貸す羽目になったり、預言者と戦っていくことになります。

ざっと流れを書くとこんな感じなのですが、ここでは書ききれないぐらい、随所に色々と伏線がちりばめられています。最初は「ラッパの音」「仔羊」「預言者」などの要素から黙示録的な物語なのかと思っていたのですが、最後までプレイしてみると単純にそうとは言い切れないような気がします。ただ、ある程度聖書について調べておくと、理解しやすい部分もあるのかもしれません。

エンディングは賛否両論を引き起こしそうな内容です。すでに海外でもそうなっていて、ネット上にはエンディングを分析するとか解説するといった動画もいくつか存在しています。また、マルチエンドなのか、それともその問題となるエンディングしか存在しないのかもはっきりしておらず、この点も議論を呼んでいます。

ちなみに、分岐を選択する箇所は三か所あり（「チケット売り場での選択」も含めると四か所でした）、「どちらにボールをぶつけるか」「籠と鳥、どちらのマークのアクセサリーを選ぶか」「ある人物を殺すか殺さないか」というものなのですが、選択肢がエンディングを変化させるのか、まだはっきりとはわかっていません。

（2013.04.06 追記）

物語の展開上、エンディングはひとつだと思います。ゲーム内での選択は物語に多少の影響は与えるものの、エンディングの内容には影響がないと思います。

今回は武器の種類がかなり多くて、「ピストル」「マシンガン」「カービン」「ショットガン」「Vorreil Gun（一種のグレネード）」「RPG」「スナイパーライフル」、これにVox poluli側

の武器4つも加わります。この全てに4種類のアップデートが存在します。また、今までのプラスミドに相当するVigorが8種類あり、各2つずつアップデートが存在するのですが、まず全部を購入することは不可能です。もしかしたら、お金を得る何らかのテクニクがあるかもしれませんが、普通にプレイをした限りではまず無理だと思います。なので特に高難易度では振り分けるものを選択する必要があります。

今までの装備プラスミドのようなギアという要素もあり、こちらは4つまで装備できます。これは購入するのではなく、各地で発見しなければなりません。シールド欠損時に移動速度アップ、敵撃破時に体力回復、打撃攻撃の追加効果など、様々な効果があります。

パラメータは「体力」「Vigorゲージ」「シールド」の3つがあり、この上限を引き上げるInfusionボトルが各地に隠されています。今までのようにファーストエイドをピンチに応じて使うということではできませんが、エリザベス同行時には、状況に応じて、エリザベスが回復薬や弾薬を渡してくれます。

(追記) 通常のプレイでは全部で24個手に入れます。シーズンパスを購入すると29個手に入られるそうです。(この知識は収集動画を参考にさせていただきました。この場を借りてお礼申し上げます)

1999モードというものもあるのですが、こちらはハードコアモードであり、一度クリアすると解除されますが、オープニングでコナミの某コマンドを入力しても解除されます(とあるサイトに書かれていて、冗談かと思いましたが、やってみたら本当に解除されました)。始めたばかりですが、少なくとも「行き先を示すマーカーが使えなくなる」「お金が無くなると復活できなくなり、チェックポイントからの再開になる」など、制限が多くなっています。

ただでさえ複雑な話が英語で遊ぶとさらに難しくなるので(私もわかっていない部分が多いです)、これは日本語の方がわかりやすいかもしれません。

(2013.04.06 追記)

1999モードをクリアしました。英語wikiなどを読みつつ、もう一度ストーリーを見て、ようやく物語の結末が理解できた感じです。クリアついでに小ネタをいくつか書いておきます。

1999モードの進め方(参考までに)

とりあえず、Possesionの使用コスト軽減の入手が必須だと思います。グレネードやロケットを扱う固い敵は普通に戦うと大変ですが、操ればさんざん暴れた後に勝手に消えてくれるということもあり、とても使い勝手がいいです。機械操作もできるので便利なVigorですが、最初はコストが高いので、そのままだと大変です。「Hall of Heroes」の奥で買い逃すとしばらく買えなくなったりするのでなかなか面倒なのですが、「Hall of Heroes」前にあるダラー・ビルは「Hall of Heroesに入ってから出ると再びお金を出す」というバグがあり、それを利用すると時間はかかり

ますが、お金は貯まります。（この裏ワザは動画サイトの映像を参考にさせていただきました。
この場を借りてお礼申し上げます）

武器はダメージアップのアップグレードを重点的に買い、あとはよく使う武器の補助スキルを
購入すればいいと思います。Vox populiの武器のアップグレードは買わなくても困りません。
Vigorは好みにもよりますが、PossesionのふたつとShock jockeyやMurder of crowsのスタン時間
延長やBucking Broncoの効果拡大などがあると便利かと思います。

Fire manやMurder of crowsを使ってくる敵はBucking broncoで浮かせた後にショットガンな
どで、HandymanはMurder of crowsで気を散らせつつVorreil Gunを連射で、PatriotはPossesionで
仲間を攻撃させたりShock jockeyでスタンさせつつ高火力の武器で、後半に出てくる仮面をかぶっ
た敵はPossesionやギアで補助した近接攻撃などで対処しました。

〇〇（一応、名前は伏せます）は死体を復活させる厄介な相手ですが、炎や雷の効果中に敵に
とどめをさすと死体が消えるという効果を使って、復活する死体を消していくと、それ以上復活
しないので、楽に戦えるようになります。私はShock jockey→カービン銃などで撃つ、という方法
を行っていました。

「ロスト・ウィークエンド」実績取得方法

シャンティタウンの酒場に入り、机の上の酒を飲んで泥酔状態になったら、そこにいる人たちを
倒します。

チェックポイントから再スタートすると、酒場に入ったところから再開するので、同じことをく
り返すと、簡単に解除できます。（これは収集実績の動画の書き込みコメントに書かれていたの
を参考にさせていただきました。この場を借りて、お礼申し上げます）

「スキート・シュート」実績取得方法

VigorのUndertowで吹っ飛ばした敵を撃って倒すと、比較的簡単に解除されます。（Hardで解除）

都市開発ゲームと聞いて多くの人が真っ先に思い浮かべるのが「シムシティ」ではないかと思うのですが、「シムシティ」が市長としていかに都市を発展させて利益を得ていくかという点に特化しているのに対して、「トロピコ」は施政を行いながら自分の地位も心配しなければなりません。そこでいかに反対派を抑え込んでいくかが重要となります。

たとえ町が発展し、豊富に資金を手にしていても、選挙で負けたり、クーデターや反逆で宮殿を制圧されたらゲーム終了です。それを防ぐために、軍備を拡大したり、派閥のリーダーを買収したり、時には国民を無実の罪で逮捕したり暗殺することもできます。

「トロピコ4 ゴールドエディション」は本編とDLCのモダン・タイムズを収録した、いわゆる廉価版です。主人公はカリブの小国を治めるプレジデnteとなって、あらゆる手段を用いて国の問題に対処していきます。キューバ危機などが存在した、今よりもちょっと前の時代を彷彿とさせるような要素をモチーフにしており、真面目過ぎる人にはちょっと馬鹿らしく思える部分もあるかもしれませんが、ちょっとしたブラックユーモアを楽しめる人であれば、このゲームを好きになれると思います。

プレジデnteとなって人口が最大で数百人の島を発展させていく、というゲームのコンセプトは前作と同じですが、前作が条件の異なる島を発展させていくだけだったのに対し、今作のキャンペーンモードは大まかですがストーリーが用意されています。中盤ではアメリカ大統領の暗殺を指示したという濡れ衣を着せられた主人公が、その犯人たちに仕返しをしていくという流れになっていて、物語としては今までにもないわけではないのですが、都市開発ゲームと組み合わせられているのがなかなか面白いと思いました。

参謀役のペネルティーモやサンタナ大元帥、他にもさまざまな登場キャラがいるのですが、個性が強く、なかには明らかにモデルにした人物が誰かわかるようなキャラもいて、けっこう面白いです。

ステージは20あり、各ステージによって設定されている目標が異なっていますし、後半では復讐相手の嫌がらせも多種にわたり、飽きずに進められました。個人的には特に、各種布告が禁止されている状態で始まるステージに苦戦しました。

モダン・タイムズキャンペーンでは、年代に応じてグレードアップした施設が建てられるようになっています。ステージ数は12ですが、数人のキャラが追加されていて、その中でも博士がなかなかぶっ飛んだキャラで、演技も面白く、本編をクリアした後でも新鮮な気持ちで楽しめました（本編のどこかで見覚えのあるマップが登場するのはご愛嬌、といったところでしょうか）。

それから、プレイについて、参考になるかもしれない情報をまとめてみました。少しでも参考になれば幸いです。

ストーリーキャンペーンは状況によって一部の利益が減退したりするので、多方面での利益確保が効果的だと思われる。

農牧は収入が得られるまでに少し時間がかかるのでマップを見て最適な農作物を早期に設置し、後々、それに関連した工場を作る流れで資金の拡大が見込める。漁港もあると楽。鉱物資源は農業よりも早く資金を得られるが、環境保護主義者から怒られるので、お好みで。どのような形の輸出品であっても、税関があると輸出利益が上がるので、収入が安定してきたらなるべく早く設置しておきたい。

観光はマップの美しさが高ければ、ホテルを増やし、観光者用施設を増やしていくだけで資金が得られる。ホテル1つを無料設置できるスキルをつけておくと、農業での利益を開発しつつ、ある程度の観光もすぐに開発できる。宿泊施設を建てると設置できる娯楽施設の飛行船周遊は、「プレジデントの広告」という設定にしておくとなかなか場所にプレジデント訪問と同じボーナスがつくので、個人的には便利だと思う。

反逆者対策の兵器庫、番兵所も重要。軍事基地を設置して布告で軍を近代化したり、給料を高くして仕事の質を高めたり、建物の設定を特別訓練にして練度を早く高めたりすると、さらに守りは固くなる。兵士は高卒でないとなれないので、まだ高校がないという場合や高卒の住人が少ない場合には、布告の徴兵を行うと普通の住人でも兵士として雇えるので兵士を集めやすくなる（徴兵状態になれるスキルか性質もあったはずなので、ここはお好みで。普通の状態ならゲームオーバー確定でも、二年前ぐらいの状態のセーブがあれば、ちょっとした工夫で反逆者を追い払えることもあるので、試す価値はあり）。

ソ連との友好度が普通以上のステージなら、初期のうちに議会所を建設し、外務大臣に専門家を招き、ソ連の支援物資の布告をすると、アパートにかかる費用が格段に下がるので得。ただし、友好度が下がると布告できなくなるので、早めに手を打つこと。銀行でも建設費が軽減するので、安定してからこちらを設置するとさらに楽になる。

入国管理局は移民の数を増やしてくれるので、なるべく早く設置した方がいい。どんな施設も何人仕事しているかで生産性が増減するので。しばらくすると国粋主義者が脅しをかけてくるが無視して構わない。外交機関はあってもなくてもよい。

選挙は明らかに不利な時にはしなくてもいい。反逆者が少し増えるが軍備を整えておけば対処できるし、状況を安定させれば次からの選挙には勝利できる。

電力確保はお好みで。個人的には風力発電を使うようにしているので、他の発電所のマイナス面はよくわからないが、大型の発電所は最大出力が多いが、何人働くかで出力が変化するはずなので、お好みで。ちなみに風力発電は場所を選べば一基につき、最大40ほど発電可能で、技術者は不要。僻地でもクイック建設ですぐに完成させられる。

個人的なやり方としては、序盤の利益確保、軍備とある程度の住宅・教育環境の整備と必要な布告発令、利益拡充と電力確保と各方面の施設建設、という感じ。布告は各々のプレイに合わせて自由に組み合わせれば良いと思う。

モダン・タイムズではバイオ農場とオーガニック農場の利益が半端ないので、観光での利益の魅力が薄くなる。工場がなくても平気だが、より多くの収入を得られるので、必要に応じて設置を。化学プラント工場は布告で土地の肥沃化ができる。その代わり、モダンタイムズのユニットに変化すると前の状態のユニットは作れなくなる（例えばアパートがモダン・アパートに変化するとアパートは使えなくなる）。

新しいユニットは電力が必要な物が多いので、普段よりも早期の電力確保が必要となる。

少し大変だが、バイオ農場などで収益を確保してしまえば、資金で困る事は少ない。

参考までに、モダンタイムズキャンペーンについて、少し。

1.

モダン・タイムズの導入的シナリオ。

パニック・メーターなるものが登場し、100を超えると資金が激減したり、犯罪者流入が起る。

ミッションによってメーターの数値はリセットできるので、90ぐらいで完成させるようにすると、時間も稼げる。間に合わないような時はミッション指定の建物をクイック建設するのも一つの手。

2.

しゃっくり病という奇病が発生。感染者が100人を超えるとゲーム・オーバー。

療養所設置で年に4人、病院設置で年に2人、治療できる。

建物に感染するとさらに感染者が増えやすくなり、それを止めるには近くにレーダーアンテナを設置するか、解体するしかない。しかし解体すると再建築にお金を取られるし、対象が農場などの場合、収入が減り、手詰まりになる可能性が高くなるので、いっそのこと無視して安定的な収入を増やし、療養所などを多く設置して進める方が楽。

3.

序盤のリヤマ牧場設置のミッションをこなすと農場関連の設置が一切できなくなり、収入確保が難しくなる（後にミッションクリアで再び使えるようになる）ので、基本的な収入源を作っていく、バイオ農場が開発可能になったらいくつか設置して、収入が安定してから進める方が良い。

ちなみにオーガニック牧場を設置するとリヤマ牧場設置の数値も上がるので、先送りしたい場合

には注意すること。

4.

一年に一度は火山噴火か地震が起こる。

消防署を多めに設置して消防士を確保しておけば噴火は大したことなく、むしろ地震の方が脅威。バイオ農場などが壊れた場合は再建設を待つよりも、クイック建設ですぐに回復する方が収入が早く入ると思われる。

博士の研究に投資すると重要物件が地震で壊れなくなったり建築費が安くなるので、絶対にしておいた方がいい。最後の充電ミッションは三回続くので、資金に余裕がある時は、充電を待つよりも太陽光発電所を作れるだけ作るとすぐにクリアできる。大変だが、噴火関連実績とリヤマの呪い（前ステージでリヤマ狩りをした事を考えると、ちょっと納得）がすぐに解除できるステージ。

5.

このステージから、バイオ農場、オーガニック牧場、モダン・アパートなどが初めから使えるようになる。

モダン・アパート設置には電力が必要となるし、兵器庫がSWAT本部になると將軍を雇うために軍事基地を設置する必要があるので、資金をいかに早く増やすかが鍵となってくる。

最初に発生する「ソ連との同盟」ミッションを終えると、30か月以内にドッグを5つ設置、できなければゲーム・オーバーという条件が発生。それをクリアした後も侵略カウントダウンが発生し、0になるとゲームオーバーという厳しいステージ（侵略カウントダウンを遅らせる事は可能）。

様々な施設の設置に多くの資金が必要となるので、しっかりと経済の地盤を安定させてから挑む方が無難。

最後は反逆者の襲撃が発生するので、軍備も整えておくこと。

6.

最初のミッションをクリアすると缶詰製品指数が発生する。この缶詰製品指数の維持がしばらく続く。

少しずつ減少するので、各ミッションをクリアして維持する必要がある。逮捕や異端が条件となっているものは時間がかかるため、早いうちに実行しておかないと指数が減ってゲームオーバーになるので気を付けること。警察署や刑務所の設置も忘れずに。

指数の維持さえ乗り切ってしまえば、後はそんなに難しくない。

7.

議会所があるがすぐに爆破されるので、大臣を呼び寄せると損をする。修復した後なら問題ない。

テロリストに対処するための三種類の選択肢を提示され、それによってミッションが変化する。
「警察」を選んだ場合は、１０人逮捕、警察国家の布告、秘密警察の設置などをして、手掛かりを入手する。逮捕に失敗した場合でも、賄賂７００００ドルと兵器を５００輸出でもクリア可能。
ゲームオーバーフラグはなさそうなので、普通にクリアできると思われる。

８.
最初にラジオ局とテレビ局を建設する時間制限ミッションが登場するが、クリアできなくてもゲーム・オーバーにはならない。（もしかすると、最初のミッションに成功していると、資金が得られるかわりに登場するゾンビ数が増える可能性があるかもしれない）
その後、おかしくなった国粋主義者が１００人単位でトロピコに人を呼び込んだりと、混乱した状態が生じる。
原子力発電所を建設するミッションをこなすと、ゾンビが出現し、その後、そのゾンビを一定時間内に全部処理するとクリアとなる。サニー曰く、「バイオ農場と園芸室はゾンビを治療する」ということなので、バイオ農場を主に資金源としておいて、園芸室を建てられるだけ建てておくと、早くクリアできる。

９.
中盤になると環境保護団体が「発電所の解体」や「工場の解体」などを提案してくる。断ると放火されるので、消防署を準備しておくこと。また、「ごみ処理場の解体」に同意すると、水処理場も同じ判定で解体されてしまうので、気を付けること。資金に余裕があれば、同意後に再建築すること。
あとはミッションの指示に従って進めれば問題なし。

１０.
今までのステージに比べるとゲームオーバーの危険などもないので、簡単。
ただし様々な施設の設置が要求されるので、資金と建設事務所をたくさん用意しておくこと。

１１.
最初にラム酒出荷のミッションが提示され、ほどなくして敵勢力が対抗してラム酒を送る動きが発生するが、あせってすぐにラム酒工場を作らなくても、バイオ農場などをいくつか作ってクイック建設して、資金確保してから工場を建てても間に合う。その後、ソ連から輸入をするミッションもあるので、大きな赤字を作らないようにすることが重要。
後は資金を増やしつつ、ミッションをこなすだけ。
宇宙計画のムービーでフリーズ、あるいは処理落ちすることもあるので、こまめにセーブを。

１２.

石油、観光、金と宝飾品、どの方向性で進むかを最初に聞かれる。プレイに合わせた選択を。
最初から資金が70000あるので、収入源の確保と太陽光発電所、ソ連の救援物資などを発動する一通りの行動を済ませておくと、後が楽。

このステージでは選挙を拒否できないので、票を得られるだけの国作りが必要となる。

最後にも三択があり、「自分で考える」にすると、「黄金の像設置」「ジグラット設置」で、クリア。

ディア・ブラザー（映画）

身に覚えのない罪で終身刑を言い渡され、その後、証拠の不当性が明らかになって、冤罪が証明され、自由の身になる。アメリカではすでにこのような実話が何度も映画化されているわけですが、この作品が他のものと異なるのは、「兄の無実を証明するために妹が弁護士資格を取った」という点でしょう。

妹は兄が逮捕されたことをきっかけに、高校卒業資格を取得するところから始め、ロースクールを合格し、兄の無実を証明するための証拠を自分で探します。それを成し遂げるまでの十数年の間には、並々ならぬ苦労があったでしょうし、その精神力の強さも私には想像が及ばないです。

このような題材であれば大げさに描こうとすればいくらでもできそうなのですが、あえてそのような描き方をしていないところに好感が持てます。脚本だけでなく、サム・ロックウェル、ヒラリー・スワンク、ミニー・ドライヴァーなど、演技力の高い俳優の演技が、事実にも頼らなくても一本の映画として観る価値のある作品に仕上がっています（この映画は実話を基にしている、という部分でしか人を引きつけられない映画とは異なる点です）。

機会があれば、ぜひ観ていただきたい作品です。

ブロンソン（映画）

「ディア・ブラザー」に続き、こちらも実話を基にした作品です。

主役となるのは、英国に実在する、自分はチャールズ・ブロンソンだと主張している囚人。イギリスでもっとも有名な囚人なのだそうです。大半を刑務所の中で過ごしてきた彼の人生を、暴力やコメディを交えて描いています。どれほど実際の出来事が盛り込まれているのかはわかりませんが、この映画は彼をリアルに描こうとしているというよりは、彼を素材にして、一種のファンタジーというか、幻想映画として表現しようとしている感じがあるので、そういうことはあまり気にしないで観る方が描かれていることを正確に受け止められるのかもしれませんが。

演じているのはトム・ハーディ。「裏切りのサーカス」のリッキー・ター役や「ダークナイト・ライジング」のベイン役を演じている人なのですが、この人、役によってがらっと印象が変わる面白い役者さんです。

ストーリー自体はけっこう単純なのですが、ずいぶんと表現が独特な感じで引きつけられました。万人向けとは言い難いのですが、その独特さを楽しめる人であれば、この作品を面白いとっていただけるかと思います。

監督はニコラス・ウィンディング・レフンという北欧の人なのですが、この人について興味がある方は、「ギャンブラー ニコラス・ウィンディング・レフンの苦悩」というドキュメンタリーもご覧になってみてはいかがでしょうか。彼が映画で失敗して多額の借金を背負ってから、なんとかその状況を乗り切るまでの様子を撮った作品です。興味のある方はどうぞ。

この本を知ったきっかけは「ペテン観光都市」という番組でした。司会のコナー・ウッドマンが各地の観光地で頻繁に行われている様々な詐欺の技術を取り上げ、その現場に赴いて詐欺の様子を撮影するだけでなく、その手口を詐欺師から聞き出すという内容でした。

番組の中で紹介される手口に驚くと同時に、自らその現場に立ち会う度胸と、本当は手口を知られたくないはずの実行者から話を聞きだしてしまう交渉能力に驚かされ、彼は何者なのだろうかという興味が湧いたのです（彼がイギリス人っぽい英語を話している事も理由の一つだったのですが。この本を読んで気づいたのですが、正確には彼はアイルランド人らしいです）。そこでちょっと調べてみたところ、この本について知ったので読んでみたくなったという次第です。

この本は彼が自宅を売って手にした25000ポンド（当時、約50000ドル）を元手に、交易品を自分で売買しながら地球一周した約五か月間の旅の成功と失敗を綴った記録です。

モロッコで自分の能力を試す三日間の旅に始まり、スーダン、ザンビア、ケープタウン、インド、キルギスタン、中国、台湾、日本（東京と福岡）、メキシコ、ブラジル、そして英国というルート。彼が目をつけた商品は絨毯、ラクダ、コーヒー、チリソース、ワイン、馬、翡翠、サーフボード、ウーロン茶、魚、テキーラ、木材、と多岐にわたります。

元手を二倍にするという彼の目的は成功するのか、という物語としての面白さだけでなく、彼の経済に関する知識もわかりやすく書かれています（「エスキモーに氷を売る」というフレーズの意味と、それについての彼の考え方なども面白かったです）。

どうやらテレビ番組の企画でもあったらしく、各地のホテルの宿泊費や移動費など、売買に関係のない諸経費（商品を輸送する際の関税などは含まれていました）はどうも省かれているようなのですが、それでも彼の挑戦したことの凄さは変わらないと思います。興味のある方は手に取ってみていただければと思います。

ラヴァーズ・ダイアリー（映画）

フランスの大学生の援助交際と、それを取材する女性記者の物語です。原題はたしか「elles」みたいな感じだったはずなので、「彼女たち」という感じでしょうか。女性記者を演じているのはジュリエット・ピノシュ。「イングリッシュ・ペイシェント」で日本でも有名になった女優さんです。

解説には「フランスで議論を引き起こした官能作」と書かれていたので、エマニエル夫人みたいな感じかなと想像し、あまり期待しないで観たのですが、実際にはそういう雰囲気はまったくなく、最後まで引きつけられる映画でした。たしかにエロティックなシーンはあるのですが、あくまで男性と女性の間接的な関係を描くことに主眼を置いた作品なのではないかと思っています。

援助交際という行為に対して作品全体のテイストが非難めいた視線を向けることもなく、取材している女性記者もそのような嫌悪感などを持たないまま、物語が進んでいくという流れも新鮮でした。非難するのはあくまで男性の側か、援助交際をしている女性の親だけなので、見ていて説教臭く感じることもありませんでしたし。

社会の状況などが彼女たち（援助交際をしている大学生だけでなく、女性記者も含め）にそのような生き方をさせている、というのがテーマなのかとも思ったりしましたが、これはあくまで私個人の印象です。また、フランスの男性は女性に対して紳士、という風に語られていることが多い印象を受けるのですが、この映画に登場する男性の中には日本でも敬遠されそうな気質を持った人物もいて、「なんだフランスだって同じようなのがいるんじゃないか」ということがわかったのも興味深かった点です（まあ、当たり前と言えれば当たり前なのですが）。

年齢制限もあるので、ある程度年齢に達した方が観るべき作品ですが、ちゃんと面白い作品だと思うので、日本語のタイトルや宣伝文句に惑わされずに、先入観も捨てて、ご覧になって観てはいかがでしょうか。全ての人にお勧めはできませんが、興味のある方はどうぞ。

ザ・バッド（映画）

ボストンという場所は犯罪が多いことで有名らしく、数多くの犯罪映画や小説が生み出されているそうです。たしかにベン・アフレック主演の「ザ・タウン」もボストンが舞台だし、「エディ・コイルの仲間たち（The Friends of Eddie Coyle）」はボストンを舞台にした犯罪小説の中で最高の作品だと、シェフで作家のアンソニー・ボーデインが言ってました（その一言で気になって本を買っちゃったりしちゃいましたが、それはさておき）。

これもそんな犯罪もののひとつ。ですが、コメディタイプのゆるい作品です。

クリストファー・ウォーケン演じるロジャーは、長年、美術館の警備員を勤めていて、「孤独な乙女」という絵画を愛しているのですが、ある日、若いキュレーターの提案によって絵がデ・ンマークに移転されてしまうことに。そうなれば作品に出会えなくなると嘆いていたところ、同じように「猫と少女」という絵画を愛し、移転を嘆くチャールズと出会い、彼から絵画強盗を提案されます。二人では無理だと断るロジャーですが、チャールズはもうひとり同じ志を持つ人物を見つけ、三人はそれぞれの愛する作品のために行動を開始します。

三人の警備員を、クリストファー・ウォーケンの他にモーガン・フリーマンとウィリアム・H・メシーが演じているというけっこう贅沢な作品です。予算をたっぷりかけた大作映画のように派手な演出はないし、お約束な感じの展開もあったりするのですが、随所にくすっと笑えるシーンがあり、三人のおちゃめな演技もいいです。重たい作品を観たくないような疲れた気分の時にも、さらっと気軽に楽しめる一本です。枯れ専の人にもおすすめかもしれません。

こういう作品を観ると、日本にもお歳は召しているけど演技の上手い俳優さんもたくさんいるのに、なかなか現代もので主役になることが少ないので、味のある演技が観られる作品も増えてほしいなと思います。

ちなみに、原題は「The Maiden Heist」といいます。The Maidenは絵の中の乙女のことを差していて、Heistは「押し込み強盗」的な意味合いだったはずなので、こっちの方が意味が分かりやすい題名なんですよ。なんで「ザ・バッド」なんだろうと思っていたのですが、（衛星放送で見たので）これを書く前にDVDが発売されているのかチェックして、.....ちょっとびっくり。

でも昔から、主演俳優が同じだというだけで、全くの別作品なのに「続・～」という邦題がついていることがあったみたいなので、宣伝文句が実際とはちょっと違うのは珍しいことではないのかもしれませんがね。期待していたものと違うものを見た時のほうががっかりするので、個人的には解説は正直に書いていて欲しいなと思うのですが。

灼熱の魂（映画）

物語は双子の姉弟が亡くなった母親の遺言書の内容を聞くところから始まります。遺言書にはある指示が書かれていたのですが、弟の方は少し変わった所が多かった母親に嫌気が差していて、従うことを拒みます。一方、姉の方は母親の指示に従い、母親の人生の足跡をたどっていくことになります。しだいに、母親がどんな人生を送って来たのかが少しずつわかっていくのですが.....。

なにぶん、観てからしばらく時間が経っているので上手い感じでストーリーを紹介できないのですが、こちらは「ザ・バッド」とは一転して、重たい映画です。正直、誰にでも勧められる作品ではないです。残酷な映画を好まない人だったら受け入れがたい作品だと感じると思いますし、途中で観るのをやめたくなるかもしれません。

最初は過去と現在のシーンが入り混じっていてちょっとわかりにくい映画だなと感じていたのですが、しだいに内容に引き込まれていき、全ての真実が明らかになった時、ぞっとしました。言葉を失った、という方がその時の感じが伝わるかもしれません。映画は多くの場合、架空の物語だという前提があるので、描かれる出来事に強い恐ろしさを感じることは少ないですし、今までにもそれなりに戦争を描いた作品を観てきたつもりですが、こういう恐ろしさを感じた作品はあまりなかったように思います。

人によっては荒唐無稽と感じるかもしれませんが、個人的には、こういうこともありえるかもしれないと感じさせる真実味がある作品というか、物語の強さを感じさせる作品だと思います。

内容に引き込まれたので面白い映画だと言えるのですが、観る人を確実に選びます。たぶん、これは一人で観た方がいい映画だと思います。誰かと一緒に見ると、言葉に詰まってしまうかも。夫婦だったらありかもしれませんが、恋人と観るとつらいかもしれません。あと、小さなお子さんには見せないようにしてください。

アカシアの通る道（映画）

ストーリーはいたってシンプルです。木材を運ぶトラック運転手が、子供を連れたシングルマザーをブエノスアイレスまで連れて行く。それだけです。会話も少ないし、音楽が流れ続けるわけでもない。でも、最後まで面白く観られました。

トラック運転手にはもう八年ほど会っていない子供がいます。きっと、何か理由があるからなのでしょう。シングルマザーの女性が母親のいる地を離れて、幼い子供（言葉も話せないほどの小さな子です）を連れてブエノスアイレスまで仕事に行くのも深いわけがあるのでしょう。でも、それらが映画の中で詳しく語られることはありません。ほんのわずかな動きや、会話の端々にその影響が見え隠れする程度です。彼女の夫がどのような人なのかということも描かれません。

そんな映画のどこが面白かったのかと思われるかもしれませんが、ですが、この映画は人と人との距離感がとてもリアルに描かれているのです。そこがとても新鮮でした。接点がないので会話の糸口がつかめず、沈黙が続く空気の生々しさは、思わず、「そうそう、こういう感じだよね」と思ってしまうぐらいですし、その中で時折交わされる短い会話やほんのわずかな動きが、過去や今までに送ってきた人生を想像させ、二人を単なる物語の登場人物ではなく、どこかに存在している不思議ではない人にしていきます。映画というよりは、ある人の人生の瞬間をそのまま切り取ったかのような錯覚を抱かせる映像です。

ストーリーの紆余曲折はないのですが、人と人との空気感や距離感、関係のかすかな変化の描写を楽しめる人なら、最後まで飽きずに観ていただけたと思います。こんなにセリフが少ないのにちゃんとした映画になってる、という意味でも驚きの作品でした。あと、赤ちゃんもかわいいです。興味のある方はどうぞ。

こちらは残念ながらDVDが発売されていないらしいのですが（なかなか商業路線に乗せにくい作品だと思うので、仕方がないのですが）、もしCSの番組表で目にされた時にはご覧になってみてはいかがでしょうか。ちなみに、この作品はアルゼンチンの映画です。同名の日本映画があるようなのですが、お間違えなく。

ザ・マペット（映画）

スモールタウンという町で育ったウォルターというマペットは、テレビで観ていたカーミット（緑色の蛙のマペット）達に憧れていました。歳月が過ぎ、大人になった兄弟（人間です）が、彼女と一緒に旅行に行く時にウォルターも連れて行ってくれることになりました。ウォルターは念願のマペットスタジオに行くことができたのですが、そこにかつての栄光はありません。スタジオは寂れ、マペット達の姿もありませんでした。マペットたちはすでに忘れられた存在となってしまうていたからです。

石油で財を成した資本家のリッチマンはスタジオを買い取ってマペット博物館にしようとしているのですが、実は真の狙いはスタジオの地下に眠る石油資源で、自分がここを買い取ったらすぐに壊して石油を発掘するという計画を立てていました。その話を偶然耳にしてしまったウォルターはなんとかその計画を阻止しようとカーミットに会いに行きます。話を聞いたカーミットもその計画を阻止するため、昔の仲間を集め、チャリティーショーでスタジオを買い取るお金を集めようとします。リッチマンの妨害を受けながらもショーは行われ、最後にはハッピーエンドを迎えます。

ストーリーがどのような展開になるかはだいたい予想がつくのですが、それでも観ていると楽しいです。カーミットは人形でありながらちゃんとした生き物のような表情があるし、歌も味があって良いと思います。それにカメオ出演も含めて、出演陣がとても豪華です。エイミー・アダムズ、クリス・クーパー、アラン・アーキン、ジャック・ブラック、ウーピー・ゴールドバークなど、名前を挙げればきりがありません。ほんの1シーンにニール・パトリック・ハリス（「天才少年ドギー・ハウザー」の主演）が出演したりしているのもおかしいです。

でも、ぜひ観てもらいたいのは、普段、渋い脇役や悪役を演じることの多いクリス・クーパーが歌っているシーンです。しかもラップ。あまりの意外性に大爆笑してしまいました。

アメリカではこういう人形やCGアニメを使った映画に実力のある俳優が出演していることが少なくないので、チェックしてみると面白いです。「マペットのクリスマス・キャロル」にはマイケル・ケインが出演していましたし（本人の自伝によると、娘に観てもらいたかったのだとか。ちなみに「カーズ2」は孫のためだそうです）、「エルモと毛布の大冒険」という映画ではマンディ・パティンキン（「シカゴ・ホープ」「クリミナル・マインド」「Homeland」などに出演しているトニー賞受賞経験のある俳優）や、ヴァネッサ・ウィリアムズが熱唱していました。

どの作品も、子供だけでなく、マペットを子供の時に観た大人にとっても楽しめる作品なので、よかったらどうぞ。

少年は残酷な弓を射る（映画）

ストーリーは入り組んだものではありませんし、観始めてすぐに何が起こったのかはなんとなく察せられると思うので言ってしまうのですが、これは学校内大量殺人事件という罪を犯した息子ケヴィンと、その母親エヴァの物語です。それが現在と過去のシーンを行き来する形で少しずつ語られていきます。

世界各地を旅することが好きだった（仕事でもあった？）エヴァは夫となる人物と出会い、後にケヴィンを産むのですが、彼女は子供をなかなか愛することができません。それでも暴力に走ることもなく、母親としての務めを果たそうとするのですが、次第にケヴィンは不可解に思えるほど反抗心を示すようになります。しかしそれはエヴァに対してだけであって、父親にはそんなそぶりを見せることはありません。それは成長しても変わらず、むしろ、その反抗心には明らかに悪意がにじみ出てきます。エヴァは懸念を夫に伝えるのですが、夫はそれを考えすぎだと言って聞き入れません。それはケヴィンの妹に起きた事件に対しても同じでした。そしてケヴィンが16歳になる頃、決定的な事件が起こります。

エヴァを演じているのはティルダ・スウィントン。「ナルニア国物語 第一章」の魔女役や「フィクサー」などで有名な女優さんです。彼女が事件前と事件後の主人公を見事に演じ分けています。父親役のジョン・C・ライリーも様々な映画で、地味で奥手な男性から平気で下品なことばかりを口にしようもない男まで、幅広い役柄を演じる名脇役です。

表現は抑制が効いていて、色々なことを想像させる示唆的なカットが多いです。何度か流れるある音楽だけはちょっとそぐわないなという印象を受けたのですが、これはあくまで個人的な印象です。

子供をなかなか愛せない母親、母親に反抗する子供だけでなく、理解しているようで理解していない夫の姿が描かれているのも印象的でした。夫は一見、子供を扱うのが上手いようにも見えますが、それほど子供を真剣に見ていない、というか、全体的に観察力が欠けている感じで描かれているのです。それをはっきりと示しているのが、二人目の子供を妊娠していることがわかるシーンだと思います。エヴァを憎んでいるかのようなケヴィンは気づいているのに、ケヴィンが指摘するまで夫は気づかず、話さなかったことを怒るのです。他にも男性側の身勝手な視点がさりりと描かれていたり、男性に対する見方の鋭さを感じます。原題は「We need to talk about Kevin」といい、原作の小説があるのですが、いわゆる書簡体小説なので、この「We」の持つ意味合いは明らかな感じなのですが（もしかしたら読んでいくと別の意味が明らかになるのかもしれませんが）、映画だとエヴァはこの出来事を語る相手がいないので、「We」は妻と夫を指し示しているように思えて、そういう風に解釈すると、題名の持つ意味が変わってくるような気がします。

また、子供が得体の知れない存在に見えたり、どのように育つかわからないという恐怖、出産に対する恐怖などは、現代の女性に限ったことではなく、いつの時代にも存在していたのではないのでしょうか。そう思うのは「フランケンシュタイン」の話を思い出したからです。あるテレビ番組で観るまで知らなかったのですが、「フランケンシュタイン」の作者は女性で、作品には

ホラーやSF要素を取り入れつつも、出産などに対する恐怖が描かれているらしいのです。どうやら、作者が出産に対してそのような意識を持つ過去があることが根拠のようです。この話がとても印象的だったので、私の頭の中にはこの説がずっと残り続けています。自分で小説を読んでちゃんと確認したわけではないので、いずれ読まなくてはと思っているのですが、人工であれ、生命を生み出すという発想の中に、そのようなテーマが意識的に、あるいは無意識で描かれていたとしても不思議ではないですよ。

そういう風に考えると、これは現代の「フランケンシュタイン」と言えなくもないですし、加害者の親を扱った特殊な作品ではなく、もっと普遍的なテーマを描いた作品と言えるのかもしれませんが（子供を「怪物」として解釈しているわけではありませんよ。念のため）。

ラストのケヴィンとの会話シーンも人によって色々な見方に分かれるかなという気がします。私はエヴァが、ケヴィンを「得体の知れない存在」ではなく「年齢相応の子供」だったと理解することができたのではないかと思いますのですが、どうでしょうか？　もしかしたら違うかもしれません。

というふうに、色々と考えてしまう深い作品だと思います。落ち着いた描写ではありますが、衝撃的な内容を扱っているということに変わりはないので、ある程度の年齢に達した方が観た方がいいかと思います。すでに原作小説は翻訳されているので、映画を観て原作が気になった方はこちらもどうぞ。

さて、そういうわけで「フランケンシュタイン」なのですが、こちらはメアリー・シェリーの小説ではなく、2011年の二月にロンドンのナショナル・シアターで公演された舞台の脚本です。

フランケンシュタイン博士と怪物[The creature]の二役はベネディクト・カンバーバッチ（「Sherlock」のホームズ役でおなじみ。「スター・トレック イン・トゥ・ダークネス」にも出演してます）とジョニー・リー・ミラー（「エマ」のドラマ版や、映画「ダーク・シャドウ」などに出演）が一日ごとに交替で演じているという、ちょっと驚きの舞台です。話題性も高そうな配役ですが、二人はこの舞台でローレンス・オリビエ賞の男優賞を受賞しており、その実力も見事に示したことが証明されています。二役分のセリフを覚え、なおかつ役の理解をきっちりこなすというのはすごいですよね。また、この作品はダニー・ボイル（「ザ・ビーチ」「スラムドッグ・ミリオネア」などの監督で、ロンドン五輪の演出をしたことでも有名）が演出をしたことも話題だったそうです。

でもこの舞台、脚本を読んだだけではどういう風に演出したのかが想像できません。なぜかというと、シーンが30もあるからなのです。普通の舞台であれば第○幕、あるいは第○幕第○場という形で構成されており、場面の変更も少ないのがほとんどです。シーンごとのセットを構築したりするのが大変なはずなので。だからこれだけ（博士の研究室や湖のある場所、屋敷、山、北極など）の風景の表現をするとしたら、特徴的なものだけを配置して想像力に委ねるか、映像のようなものを流すのかなと勝手に考えたりしながら読んでました。

物語の流れとしては、怪物が生まれたところから、外に出て、その容貌のせいで人々から冷遇されるのがシーン10ぐらいまで。11から21までがDe laceyという目の見えない人に知識を学び、ある悲劇から彼と息子夫婦を殺害する部分です。それから怪物がフランケンシュタイン博士に女性を作り出すように頼み、フランケンシュタイン博士は女性の怪物を創り上げるも、その後で破壊し、怪物は博士の婚約者のエリザベスを殺害します。そして北極でラストを迎えます。

この脚本のフランケンシュタイン博士と怪物の関係性は、私が今までに映画などを観て得たイメージとはずいぶん違うものでした。なぜかということ、二人は非常に近い存在として描かれていたからです。たとえばどちらも孤独で（怪物は容貌のせいで、博士は頭が良すぎて周囲から理解されず）、親からは否定的に見られていて（博士は父親から、怪物は博士から）、伴侶となる存在を失う、など。そして博士と怪物を二人の俳優が交替で演じることによって、観る者にこのイメージがより強く伝わるようになっていたのではないかと思います。この発想は脚本を書く時から著者が決めていたのか、それとも演出のダニー・ボイルが決めたのかわかりませんが、私はとても斬新だと思いました。

ホラーというよりは悲劇としての側面をより強調した作品で、ラストの怪物の行動は胸を打つものがあります。個人的には今までに読んだ戯曲よりもわかりやすいものだと思うので、気になった方はぜひ手に取っていただければと思います。

ちなみに、イギリスでは公演の後に映画館でも観ることができたそうで、ダニー・ボイルを起

用したのはそういう理由もあったのかなと思いつつ、非常に羨ましい気がしました。いつかDVDで出してくれたら嬉しいんですが。

フライ・ペーパー！ 史上最低の銀行強盗（映画）

物語の舞台となるクレジット銀行に二組の銀行強盗がやってくる。一発の銃声を引き金に銃撃戦が始まるが、そこに客として訪れていたちょっと変わった男が状況を落ち着かせ、銃撃戦は収まる。人質を一か所に集め、二組の銀行強盗はお互いの目的に向かって行動する。人質となった局員の一人はおとなしくしていれば何も問題ないと言うのだが、なぜか変わった男が「ここにいる全員が殺されるかもしれない」と言いだし……。

銀行を舞台にした犯罪映画はコメディも含め、ハリウッドだけでなく日本でも作られています。二人組の銀行強盗はやることなすことがお馬鹿だったり、もう一方の三人組の強盗も凄腕なのにどこか間抜け、そんな強盗達と局員のやりとりを見ていると単なるお馬鹿系のコメディなのかなと思ってしまいます。実はもう一つの事件が密かに進行しているという、ミステリー要素も加わったちょっと珍しい一品です。時間は約90分と最近の作品としては短いのですが、脚本は上手くまとまっているし、オチもちゃんとついてます。

主役はアシュレイ・ジャッドに、「グレイズ・アナトミー」のパトリック・デンプシー。他にもアカデミー助演女優賞を受賞したオクタヴィア・スペンサーや「Lie to me」「クリミナル・マインド レッドセル」「クローザー」などに出演していた俳優が脇を固めており、私にとってはけっこう豪華な配役でした。なんでこんな人たちが、と最初は思ったりもしたのですが、最後まで観終わるとそれも頷けるという感じでした。

ちょっと汚い言葉が飛び交う部分もあるので、そういうのが苦手な人にはあまりおすすめできないのですが（あと小さい子供さんには待ってもらった方がいいかも）、カートゥーン的な要素もあるお笑い部分は日本人でも楽しめると思うので、興味のある方はごらんになってみてはいかがでしょうか。サブタイトルで確実に損をしている映画のひとつだと思います。

ちなみに、原題の「Flypaper」はネットの辞書によれば、「ハエ取り紙」という意味だそうです。ハエ取り紙って、西洋にもあったんですね。

全てを失い酒浸りになっていたレオは金を得るために仕事の面接を受けに行った。仕事の内容は、その家に暮らしている、交通事故で首から下が麻痺した女性ミュリエルの介護だった。仕事内容がきついため、今までに何十人もの女性がすぐに辞めてしまうほどの仕事だったが、レオは辛抱強く続ける。そしてレオとミュリエルの間に、ゆっくりとだが、絆が生まれていく。

過去に何かを失っていたり、生きることに絶望している人たちが関わりあっていく様子がメインになっている静かな物語なので、ストーリーとしての緩急はあまりありません。それでも最後まで飽きずに観てしまいました。それは物語が自分の好みであっただけでなく、映し出されるカットが美しかったからだと思います。絵としての完成度が高いようなカットが多かったように感じました。

それから、たぶん初めて、ソフィー・マルソーが主演しているのに面白いと感じた映画だったと思います。

というと、とても失礼なのですが、私の中ではソフィー・マルソーって、どこかがっかりさせられてしまうような役を演じることが多いイメージがあって（「007 ワールド・イズ・ノット・イナフ」とか、「ソフィー・マルソーの女三銃士」とか）、外れの映画を観てしまったような気分になってしまうので、なんとなく避けるようになっていたのです。でも、この映画ではちゃんと人間的な存在感のある役を演じていて、とても美しい女性だと素直に感じられました。

首から下が麻痺している女性にしては声が通り過ぎているのがリアリティとしてはちょっと微妙かもしれないのですが、そこは仕方のないところでもあるかと思います（昔、デンゼル・ワシントンが『ボーン・コレクター』の演技について話していた時に、「リンカーン・ライムは寝たきりだから腹筋などが弱っているはずなのに、その声の感じをうまく演技で出せなかった」と言っていたのを思い出しました）。

フランス語は読めないのですが、観終わった後に原作の小説も読んでみたいと思った映画でした（小説から削ったエピソードなどがあるような気がしたので）。フランス映画や文学的な香りのする映画が好きな人には気に入っていただけるのではないのでしょうか。

どうやら、国内版のDVDは発売していないようです。私はレンタル店で借りて観ました。もしどこかで見かけることがあったら、興味を持たれた方はご覧になってみてはいかがでしょうか。

アメイジング・グレイス（映画）

実話を基にした映画は、その事実だけで人を引きつけようとする意図が感じられる場合があるので、少し警戒してしまう癖がついているんです。この映画も実際にあった過去の歴史を描いたものなのですが、完成度が高く、何度観ても心動かされてしまう作品なので紹介させていただくことにしました。

主人公はイギリスの黒人奴隷貿易の廃止に一生を捧げたウィリアム・ウィルバーフォースという政治家です。演じているのはヨアン・グリフィス。「ファンタスティック・フォー」で世界的に有名になった俳優ですが、海洋ものが好きな方には「ホーンブローワー」シリーズの方がおなじみかもしれません。ウィルバーフォースの親友であり、黒人奴隷問題に彼の関心を向けさせたウィリアム・ピットを演じるのはベネディクト・カンバーバッチ。他にも、過去に奴隷船の船長をしていた牧師で、賛美歌「アメイジング・グレイス」の詩の作者でもあるジョン・ニュートン役にアルバート・フィニー、敵役には「裏切りのサーカス」にも出演していたトビー・ジョーンズとキアラン・ハインズ、老練な政治家フォックス役にマイケル・ガンボンと、配役がとても豪華です。

ストーリーはウィルバーフォースが挫折を味わっている現在のシーンから始まり、彼がいかにして黒人奴隷問題に関与するようになり、策を尽くして奴隷廃止法案を通そうとしたか、そしてそれが失敗したか、という過去が描かれていきます。そして身体は病気に蝕まれながらも彼は問題に取り組み続け、最後には奴隷貿易廃止に大きな影響を持つ法案の可決に成功します。

いちばん印象的だったのは、奴隷貿易がイギリスにとって大きな利益を生み出していたことや、フランスとの戦争の影響によって、法案が何度も否決されていたということです。こういう自国にとって都合の悪い歴史の流れがストレートに描かれている映画はちょっと少ないような気がしたので、意外だったのです。しかもこの作品のクライマックスに登場する法案は、正攻法というよりは明らかに騙し討ちのような内容です。そのような内容でなければならなかったという事実は、裏を返せばそれだけ奴隷貿易を廃止したくなかった人がいたということを示しているわけで、そういうエピソードを口当たりの良いものに変えることなく描いていた点にも好感が持てました。

とはいえ、事実の改変とは全く無縁というではなく、英語のwikiには不正確に描いている部分の指摘がいくつか書かれています。例えば、クライマックスでフォックス役のマイケル・ガンボンの演説シーンがあるのですが、実際、その頃にはフォックスは亡くなっていたそうです。それから、ウィルバーフォースが結婚後に口述筆記をさせているジョン・ニュートンを訪ねるシーンがあるのですが、その懺悔録は実際には数年前には出版されていたのだとか。また、ジョン・ニュートン本人は「アメイジング・グレイス」の歌詞を奴隷問題とは結びつけてはいなかったという指摘もあるようです（ただ、専門書を確認して調べるまではしていないので全てが確証ある情報だとはお約束できないのですが）。

個人的には、イギリスの観客が気を悪くするかもしれない事実を捻じ曲げる脚色のためではなく、より印象強いシーンを描くための脚色なので、許容できる範囲かなと思っているのですが

、この点は人によって意見の異なる部分かと思います。

色々書いてしまいましたが、脚本が素晴らしく、重い内容にもかかわらずユーモアが随所に散りばめられているので暗くなりすぎることはないし、名優たちによる素晴らしい演技が観られる映画であることは間違いないので、よかったら一度、ご覧になってみて下さい。

アンソニー・ボーデインの番組は好きでよく観ているのですが、昔からそうだったわけではないんです。最初観た時は「外国の食事に対してひどいことばかり言う口の悪い親父」という印象で、すぐに観るのをやめてしまったほど。当時の外国の食事紹介番組って、非西欧圏の食事に対してけっこうひどいことを言ったり、日本食の紹介番組でも「そんな物食べてないよ」とツッコミたくなるような料理を当たり前のように紹介する内容が多くて辟易していたのです（とある番組で、訛りのある日本語で「アマイウドン」という料理を紹介された時は大笑いしてしまいました）。

それから何年かして、他に観るものがなかった時にたまたま放送されていたアンソニーの番組をつけてみたら、なぜか面白くなっていたので観るようになったのです。大塚明夫さんの吹き替えのおかげでアンソニーの毒気が適度に抜かれていたからかもしれませんし、もしかしたら、番組の構成が以前よりも自分好みになっていたからかもしれません。彼の番組は年月を経るにつれて、他国の歴史や文化に対する敬意が内容に反映されるようになって、単なる料理紹介番組よりも深みが出てきているような気がします。北海道が紹介された回では、アイヌの人々から「今でもアイヌだからという理由で差別されることがある」という話を聞いていて、日本にいてもなかなか触れる機会のない話に驚いたほどです。

これはそんな彼のエッセイをまとめた本です。彼の過去の話から、家で料理を作るという基本に立ち返ることを勧める話、とある料理評論家に対する手厳しい批判、彼を一躍有名にした作品『キッチン・コンフィデンシャル』の登場人物のモデルとなった人物についての話など、二十編のエッセイが収められています。本の中でも毒舌が発揮されていて、きわどい表現もけっこう見受けられましたが、気分は悪くなりませんでした。その理由はおそらく、底意地の悪さから誰かを貶めるために書かれた言葉ではないから、だと思います（単に私の理解力が低かったから、という可能性も高いのですが.....）。

2010年に発売された本なので、ちょっとネタが古いものもあり、一部で有名なアンモニア処理した肉に対する批判も書かれています。ご存じない方のために説明させていただきますと、日本でも話題になり、現在でも時おりニュースで目にしますが、アメリカでも当時、O-157の被害が大きな問題となっていたのです。その問題に対して解決方法のひとつとして考え出されたのが、アンモニアで殺菌処理することで菌のいない安全な食肉を提供できるようにする、というものだったのです。これは様々なドキュメンタリーなどでも問題視されるようになり、その結果、たしか2012年には会社が倒産してしまったはずです（アメリカの畜産業や農業には今でも問題が多く、それについての書籍、たとえば『ファストフードが世界を喰いつくす』やドキュメンタリー映画（『フード・インク』『キング・コーン』など）がけっこう作られているので、そちらもご覧になっていただくと、より詳しく知ることができます）。

そしてパパとなったアンソニーは、二歳になる娘のことも書いています。マクドナルドを食べさせたくなくて、娘にロナルド・マクドナルドがいかに悪しき存在であるかを刷り込もうと知恵を凝らしたり、どれだけ娘を愛しているかという話は、個人的にはこの本の中でいちばん面白か

ったです。自分の過去の話では「何の問題もない両親の下で何不自由なく育ったが、それが退屈で仕方なかった」と書いていたのに、娘のことを書いたエッセイでは「もし、Stiv Batorsがまだ生きていて（パンクロックのギタリストだそうです）娘に汚い手で触ろうとしたら、容赦なくその首をへし折っただろう」と書いたりしているのですから。もう完全に親バカじゃないですか、アンソニー。

九月の中頃からは、CSのCNNJ[訂正：新シーズンが放送されるのはCNN／USの方でした]で「世界紀行」の新しいシーズンが放送されるそうなので、興味のある方は、そちらもあわせてご覧になってみてください。

「Cabin Pressure」 (ラジオドラマ)

ジョン・ケアードさんの本に推薦文を寄せていたサイモン・ラッセル・ビールという名前から出演作品を探し、スマイリー三部作のドラマCDを聴いてから、気になるイギリスの俳優さんがいると、なにか朗読作品などがあるのではないかと調べてしまう癖ができました。トールキンの「指輪物語」もラジオドラマ化されていて、フロド役を映画ではビルボを演じていたイアン・ホルムが、サム役をビル・ナイなどが演じていて、迫真の演技を聴かせてくれます。イギリスの本当に上手い俳優さんは、映像での演技だけでなく、声の演技も本当に見事なのです。それに発音もきれいなので、英語を聞き取る訓練にも最適だったりします。

そんなわけで日本でも人気俳優となっているベネディクト・カンバーバッチについてもチェックしてみたところ、いくつか朗読やラジオドラマCDが見つかったので、聴いたりしています。この作品も、それがきっかけで知ったものです。

この「Cabin Pressure」は航空会社の人たちが主役のコメディです。航空会社と言っても、所持している飛行機は一機だけ、というちょっと変わった会社で、そこで働いている四人もそれぞれに癖のある人物です。ベネディクト・カンバーバッチが演じているのは機長のマーティンで、彼は機長にしてもらおう代わりに無給で働いていたり、パイロットに関するマニュアルを全て暗記しているため、普通のパイロットなら半分ぐらいしか正解しないようなテストにほぼ全問正解し、カンニングを疑われてしまうことも。

ロジャー・アラム演じる副操縦士のダグラスは陰謀を企てるのが得意で、様々な問題をちょっと普通じゃない方法で解決します。あと、バーリンというお客がやってきた日には、彼のために用意している年代物のウィスキーを盗んだりしています（そういうイベントらしいです）。ステファニー・コール演じるのは社長のキャロリン、ジョン・フィネモア演じるアーサーはちょっとお馬鹿な客室乗務員。この三人の俳優さんはこの作品で名前を知ったのですが、ロジャー・アラムは様々な舞台だけでなくテレビや映画でも活躍している俳優で、最近では「ゲーム・オブ・スローンズ」のイリリオ役とか「新米警部モース」のサーズデイ警部などを演じています。ステファニー・コールは日本ではあまり有名ではないようですが、イギリスではコメディ作品で受賞経験もあるベテラン女優です。ジョン・フィネモアはこの作品の全ての脚本を書いています。とても才能豊かな人々が集まった作品です。

ストーリーはほとんど一話完結型です（ときおり前回のネタが話題となることもありますが）。着陸した場所でぼったくり同然の値段を吹かけられたので支払いを断ったら、さらに値段をつり上げられてしまったり、乗客の中に自分は命を狙われていると信じているロシア人の演奏家が出て、ちょっとしたことを暗殺の陰謀だと勘繰ってとんでもない騒ぎになったり。毎シーズン登場するバーリン・デイ（バーリンがお客として登場する日）では、ウィスキーを巡ってダグラスとキャロリン達との戦いが繰り広げられます。

イギリスのコメディの中にはけっこう引いてしまうくらいの下ネタを挟んでくる作品も少なくないのですが、この作品に関しては、理解できる限りではそのようなネタはなさそうです。会話はけっこう速めなので聞き取るのが大変で、何度も聞かないとわからない部分も少なくないので

すが（マイケル・ケインは本の中で「イギリス英語はアメリカ英語よりも速い」と書いていました。意識して聴き比べてみると、たしかにそんな気がします）、声も演技も素晴らしいので、何度聞いても飽きることがありません。

ベネディクト・カンバーバッチやロジャー・アラムのファンだけでなく、海外のコメディが好きだという方にもおすすめです。また、海外のサイトにはファンが脚本をアップしているところがあるので、それを見ながら聞けばヒアリング訓練にもなりますよ（私がサイトを見た時は大丈夫でしたが、ウィルス問題などは自己責任でお願いします）。

ちなみに、現在はシーズン4まで発売されているのですが、シーズン1～3とクリスマスエピソードは単品として発売されているものの他に、ひとつにまとまった十枚組のバージョンがあるので、もし興味を持たれた方はそちらの方の確認をお忘れなく。もし買った後で知ると損した気分になるかと思ったので、お知らせしておきます。

キック・オーバー（映画）

メル・ギブソンというと、ちょっと前に、差別的発言をしたとか、奥さんにひどいことをした、という話がテレビで流れていて、こんなことをしてたら評判が下がってしまうんじゃないだろうかと思ったりしたのですが、この間、エミー賞かゴールデングローブ賞の授賞式を観ていたら（どちらかは忘れてしまったのですが）、ジョディ・フォスターと一緒にテーブルについて注目されていたので、ちょっと意外な感じがしたのです。後から「それでも、愛してる」という映画で共演していたことを知って、なるほどと思ったのですが、この映画はそんな彼が主演・製作・脚本（正確には共著）を担当した作品です。

仲間と強盗した金を持って警察から追われていた主人公はアメリカとメキシコの国境の隔てる壁を突き破ったところで逮捕されます。いつものように事件処理はアメリカ側になるはずでしたが、車の後部座席に置かれていた大金を見たメキシコの警官は急に態度を変え、事件はこちら側で処理すると言います。そして主人公をメキシコの刑務所に入れ、金を着服してしまいます。

主人公が入れられた刑務所は小さな町のようになっていて、売店もあれば麻薬を売る場所もあるという混沌とした世界。そこで主人公は、刑務所の中を実質的に支配している男や、とある理由から特別待遇を受けている子供や、その母親と関わるようになります。そこに加えてアメリカの領事館職員が主人公のことを嗅ぎつけて盗んだ金の分け前を狙おうとしたり、盗まれた自分の金を取り戻そうとする大物犯罪者のフランクという男まで現れ、事態はさらに混乱したものになっていきます。

実はあまり大きな期待をせずに観たのですが、これが意外と面白い映画でした。少し上手く切り抜けすぎているし、ちょっとメル・ギブソンの役がおいしすぎる感じはしないでもないのですが、脚本は最後までよく練られているし、主人公の設定も犯罪者でありながらも好感が持てるようなものになっています。刑務所内の混沌とした雰囲気もストーリーと合っているし、特別待遇を受けている子供を演じている子役もなかなかいい演技をしています。それから、ほんの小さな役なのですが、「Breaking bad」のハंक役の人が登場していたのも個人的には嬉しかったです。

下品なセリフはあんまりなかったと思うのですが、ちょっときつい描写もあるので（犯罪者たちの登場する映画なので当たり前といえば当たり前なのですが）、子供向けではないかもしれませんが（でも、セリフの中で「良い子のみんな」とか言ってたような気もしますが）。ですが、けっこう面白い映画だと思うので、興味を持たれた方はご覧になってみてください。

ケイト・レディが完璧な理由（映画）

働く女性は大変で、子供がいるとなおさら。待遇は以前より改善したといっても、職場では女性というだけで当たり前のことが当たり前として受け入れられない場合があるし、仕事で時間が減って夫や子供との触れ合いの時間を作るのも大変だし、夫の母親からは家にいる方が家族のためにもなるのにとチクリとやられ、専業主婦をしている他の親との目に見えない確執もあったり。同じ境遇の人ならば、ついつい頷いてしまいたくなる話ではないでしょうか。日本だけでなく、アメリカやイギリスでも状況は良く似ているからか、こういう題材を扱った作品は国籍に関係なく作られているようです。

題名を見ると、なんだか全ての面において非の打ちどころのない女性を想像してしまいがちですが、必ずしもそうではありません。投資会社に勤めるケイト・レディは仕事のできる女性で、夫と二人の子供に恵まれています。忙しくて髪を十分に梳かす時間もないからぼさぼさだし、娘が呼ばれたパーティーに手作りの食事を持っていかないと馬鹿にされて悲しい目に遭うからと、買ってきたパイを手作りっぽく見せるために奮闘しています。そんな生活は大変だし、家族は大事だけれど、仕事が好きで辞めたくはない。そんな彼女の姿を悲観的な方向に陥ることなく、ユーモアを交えて素敵に描かれています。専業主婦としてなんでも完璧にこなして周囲を慄かせる「ザ・モンスターズ」との考えの違いや、男性同僚の視点などは、シーンとして描くと重くなってしまうようなのですが、ドキュメンタリーのインタビューのような形で語らせることによって、描くことはしっかり描きつつ、さらっと仕上げています。

ケイトは大きなプロジェクトを任されたことによって、さらに出張が多くなります。約束を守れなかったり問題が起きてしまって家族との摩擦が増えてしまう展開や、そんな彼女をそそのかすかのように出張先にハンサムな同僚が登場する展開はお約束ですが、その展開の先で彼女が出す答えはポジティブで好感が持てるものです。

主役のケイトを演じているのはサラ・ジェシカ・パーカー。「セックス・オン・ザ・シティ」とはまったくイメージの異なる？（実はまったく観てないので、ほとんど知らないのです）キャラを演じています。出張先で共に働くジャック役にはピアース・ブロスナン。他にも「ニュースルーム」や他のテレビドラマにも登場している顔ぶれがけっこう出演しています。

イギリスでベストセラーになった小説が原作で、日本語訳は「ケイト・レディは負け犬じゃない」という題名で発売されています。大まかなストーリーは同じなのですが、映画では描けなかったエピソードがけっこうあったり、細かい部分が異なっていたりするので、その違いを比べてみるのもいいんじゃないでしょうか。ただ、小説の方はより生々しいというリアルな感じなので、好みが分かれるかもしれません。映画を観て物足りないと感じた人はこちらの方がより楽しめるかも。

女性に限らず男性も楽しめる作品だと思うので、興味を持たれた方がいらっしゃったら、ぜひ一度ご覧になってみてください。

Breaking Bad（ドラマ）

ここで海外ドラマの紹介をしようかと思ったこともあったのですが、なるべくファイナルシーズンを観てからの方がいいだろうなと思って、あえて書かないようにしていました。しかし今年のエミー賞の放送でこの作品が作品賞を受賞したのを目撃して、以前からファンだった者としてはとても嬉しくなり、ついつい紹介したくなってしまったのです。

この作品はあまり日本では大々的に紹介されていないようなのですが、海外では最初のシーズンが放送されてからずっと評判になっていて、エミー賞の作品賞にはノミネートし続けるし、主演のブライアン・克蘭ストンとアーロン・ポールは主演・助演男優賞を連続で受賞しているという驚きの作品なのです。今年もウォルターの妻スカイラーを演じているアンナ・ガンが助演女優賞を受賞していますし、作品賞は「ゲーム・オブ・スローンズ」やケヴィン・スペイシー主演の「ハウス・オブ・カード」を制しての受賞、たとえば、その凄さがわかっていただけでしょうか。

物語は主人公のウォルターが肺がんを宣告されることから始まります。彼は高度な科学の知識を持っているのですが、とある理由から、高校の科学教師をしています。自分があとわずかで死んでしまうかもしれないという恐れと、自分が死んだら妻と障害のある息子の生活はどうになってしまうのだろうかという心配から暗澹とした気持ちでいた彼は、義理の弟の麻薬捜査の現場にたまたま同行することになり、そこで元教え子のジェシー・ピンクマンの姿を目にします。その後、義理の弟から麻薬売買がどれほどの金を動かすかという話を聞いたウォルターは、ジェシーに会い、自分を商売に加えるように持ちかけます。

ジェシーは高校時代からそれほど化学の成績が良くはなかったため、作り出していた麻薬の質はそれほどでもなかったのですが、ウォルターがその知識を動員して作り出したものは、並の人間には作り出すことのできない高純度のクリスタルメスでした。ただ、高純度の麻薬ができあがったからといって、それですぐに大金が手に入るというわけではありません。麻薬の販売網など持っていない二人が手に入れられるのは、せいぜい個人に売って得られるわずかな額だけ。そのため、すぐにでも大金を手に入れたいウォルターは、様々なりスクを冒していきます。それがさらなる混乱と問題を引き起こし、ウォルター達をさらなる危機へと導いていきます。

ウォルターは最初、どちらかというと気が弱く、善良そうな人間で、犯罪者など相手にすればすぐに負けてしまいそうなのですが、どんなに混乱した状態でも、彼の頭の良さは危機を正確に見抜き、乗り越えていく手段を見つけます。そして危険に対処していくうちに、犯罪者としての素質を見せ始めます。さらに話が進むにつれて、持ち前のプライドの高さが傲慢へと変わっていく様が見事に描かれています。脚本と演技力、どちらが欠けていても、ここまですごい人物にはならなかったと思います。他にも、今は話せなくなってベル（ホテルのフロントに置いてあるような物）で意思表示をする麻薬組織の大物だった男や、まったく犯罪者に見えないシンジケートのボスなど、ちょっと他では見られない変わった人物がたくさん登場し、いずれも高い演技力を持つ人々が見事に演じています。

日本国内ではシーズン4まで放送され、DVDにもなっているようです。個人的にはシーズン2

がちょっとだけ展開が遅いかなと思わないでもなかったのですが、それ以外のシーズンは常に先が気になって仕方がなかったです。早くシーズン5を放送してくれないものかと待ち続けているのですが、どうやら、もうすこし時間がかかりそうです。

子供向けではありませんし、その題材は人を選ぶかと思いますが、少しでも気になった方には、ぜひ一度は観ていただきたい作品です。

オレンジと太陽（映画）

その方が都合がいいから、という理由で、小さな子供たちを移民として海外に送る制度があったとしたら、どう思いますか？

ソーシャルワーカーをしていたマーガレットは、ある日見知らぬ女性から、子供ばかりを乗せた船でオーストラリアへ連れて行かれたという話をされ、資料を手渡される。誰かを移民させる場合には政府が手続するはずなので、記録に残らないはずはないと信じていなかったマーガレットだったが、その後、仕事の一環で会っていた女性からも同じような話を聞き、調査を始める。資料を基に女性の母親を探し当て、話を聞くと、当時の世間的な事情もあって孤児院に預けたが、後に後悔して会いに行ったところ、すでに養子に出したと言われたと語る。

母親などに断りなく、政府や様々な団体がオーストラリアへ子供を移民として送っていたという事実を知り、マーガレットはオーストラリアに赴いて、同じ境遇にある人を探し、その人々の肉親を捜す活動を始める。それは同時に、児童移民を主導していた様々な団体に属する人間と敵対するということを意味していた。そのような組織に属する人々の非難や脅迫を受けたり、移民となった人々の壮絶な体験を心理的に共有したことでPTSDを発症しながらも、マーガレットは活動が続けていく。

この映画は1970年代までイギリスで実際に行われていた児童移民の問題を扱った作品です。子供達は主に財政的な問題から（英wikiの情報によると、英国の孤児院に置いておくより、オーストラリアに移民として送る方が子供にかかる費用が安く済んだ、ということが大きな理由の一つだそうです）、名前を変えられたりしてオーストラリアなどに送られて、大変な生活を強いられていたそうです。この映画の主演であるマーガレット・ハンフリーズは実在の女性で、この人がいなければ、もしかしたらこの問題が大きく取り上げられることはなかったかもしれません。

この映画は彼女が書いた本が基になっていて、まだその原作を目にしたわけではないので、どの部分が事実で、どの部分が創作なのかはわからないのですが、このような制度が本当に存在していたということに、しかもつい最近まで行われていたということに驚きを隠せません。どこの国にも問題はあるものだとは分かっているのですが、このような事実を知るたびに、なんだか切ない気分になってしまいます。

事実に比べれば大したことはないかもしれませんが、この映画を観ることで、国に翻弄された人々の悲しみや苦しみが少しでも感じられるのではないのでしょうか。主演のエミリー・ワトソンや、「ロード・オブ・ザ・リング」でエルロンドを演じていたヒューゴ・ウィービングを含め、移民として送られた人々の大人になった姿を演じる俳優さんたちの演技は、それを心に届きやすくする役目を十分に果たしていると思います。

気分がスカッとするような作品ではないのですが、それでも、もしよかったら、一度観ていただければと思います。

The Saboteur（ゲーム）

パンデミックというゲーム開発会社をご存知でしょうか？ 「Mercenaries」という、三人の傭兵のうちのひとりとなって様々な勢力の依頼をこなしていき、某国の政治指導者を捕らえるゲームなどを製作した会社で、ゲーム自体はなかなか面白いのですが、けっこうバグが多いという欠点があって、残念ながら現在は閉鎖してしまったのですが、これはその会社の最後の作品です。

舞台は第二次世界大戦のドイツ軍占領下のフランス。主人公のショーン・デヴリンはあるレース大会でのいざこざが発端となった出来事によってナチスドイツの将校に親友を殺害されてしまいます。捕らえられていた場所から脱出し、親友の両親がフランスで経営するキャバレーに匿われて鬱々とした日々を送っていたのですが、レジスタンスのメンバーに声をかけられたことから活動に身を投じ、ナチスとの戦いを繰り広げていきます。破壊工作や裏切り者の暗殺、捕らえられた仲間の救出や闇商人の手伝いなどをしてレジスタンスの力を強め、ナチスドイツの手からフランスを解放し、親友を殺した将校に復讐するのが目的です。

個人的にはあまり目立ったバグもなかったし、かなり面白いゲームだと思います。難易度は四段階で、低い難易度なら初心者も楽しめるし、最上級の「F.Hard」だとかなり歯ごたえのあるプレイが楽しめるようになっていきます。映像表現も工夫されていて、ナチスの影響力が強い場所ではモノクロ画面になっていて、ナチスを示す赤色とレジスタンスカラーの青色だけが色を発するようにになっています。ミッションや破壊工作を達成して地域を解放すると、豊かな色彩のカラー画面へと戻っていくのです（ただ、カラーの地域だけになっていくと、逆にモノクロの渋さが懐かしくなってきたりするのですが）。

条件を達成していくことで新しい機能が増えていく P e r k s には達成条件が難しいものもありますが（ナチスの車十二種類をすべて集める、とか）、闇商人にお金を払うことで解放することもできます（数に限りはありますが）。

ミッション以外のフリーターゲットは約1000ヵ所ほどあり、ナチスの監視塔やスピーカーや戦車を破壊するものから、密輸品を手に入れたり、高い場所にいる望遠鏡をチェックするというものまであります。その場所は闇商人から地図を買えば全て表示されるので、見つからなくて困るということはありません。ゲームの「ゴッドファーザー」の全ての店舗をゆすって自分の縄張りにしていくようなプチプチを潰す的な要素が好きな人にはとてもお勧めです。

車の蒐集要素もあって、一度ガレージに入れてしまえばいつでも好きな車を呼び出して運転したり、話が進めばレジスタンスの仲間に乗ってきてもらうことも可能になります。車に乗っている時はジャズやシャンソンを聴くことができるのですが、個人的には「G T A」や「Saints row」などの箱庭ゲームの中で、気に入った音楽がいちばん多かったです。特にエンディングでも流れるニーナ・シモンの「Feeling Good」は好きになり過ぎてC Dを買って今でも聴いているほどです。フリーターゲットを探すために車に乗っていくのですが、好きな曲がかかっていると最後まで聴きたくて、車から降りられないということもしばしばでした。

国内版は存在しないのですが、今は値段が下がって買いやすくなっているようなので、気になったという方がいらっしゃいましたら、いちど遊んでみてはいかがでしょうか。

主人公のオットウェイはアラスカの石油会社に雇われたスナイパー。石油掘削中に職員を襲おうとする狼を射殺する仕事を請け負っている。彼は妻を失ったことで生きること絶望しており、自殺を試みるも果たせずにいた。その後、他の職員たちと一緒にアメリカへと戻る飛行機に乗るが、その途中、吹雪のせいで飛行機が墜落してしまう。墜落場所は正確な位置も分からない雪原の中で、生存者はほんの数人。彼が使っているライフルは雪で使い物にならなくなっていた。オットウェイは生き残った人々に指示を出し、生き残るために南へと移動しようとするが、森に棲む狼たちが彼らの命を狙う。そしてひとりずつ、狼の餌食になっていく。

ジャンルという枠組みで考えると、サバイバルホラー系に属するのかな、という気がします。ただ、雪原の中で群れる狼はこのようなジャンルの映画の敵としてはそれほど目新しいものではないと思いますし、生き残った人々が狼に襲われる様子はハリウッド系の映画に観られるようなハラハラ感を強く煽るような演出になっていないので、そういう面白さを求めてこの映画を観ると、おそらく、がっかりしてしまう人もいるのではないかと思います。

この映画はサバイバルホラーではあるけれども、どちらかといえば、生きること絶望した男たちの物語が本筋なのではないかと、観ていて感じました。オットウェイが妻を失ったことは冒頭から描かれますが、物語が進むにつれて、他の生存者も恋人や娘や妹などを失った経験を持っていることが明かされていきます。オットウェイが語るように、そのような大事な存在の記憶は生きる糧となるものですが、同時に、二度と会えない苦しみを味わう原因でもあります。彼らが世間とは隔絶されたアラスカの雪原を仕事場に選んだのも、もしかしたら、そのような過去から逃れようとした結果なのかもしれません。もしも飛行機事故が起らず、そのままの生活が続いていれば、酒や麻薬に溺れたりしながらも日々を過ごし、いずれ亡くなっていたでしょう。オットウェイの父がそうであったように。

油断すれば殺されてしまうという極限状況の中で、目前に死の恐怖が迫っているために、彼らは生き延びようとしています。必ずしも、全員がそこまで生きたいと願っているのかはわかりません。そもそもオットウェイは自殺しようとしていたし、他の生存者の中にも自ら進むことを諦める者がいます。それは単純に、傷を負ってこれ以上は進めないから、という理由だけではないことも描かれています。

オットウェイの考えは主にフラッシュバックと会話で表されていますが、個人的にはもうひとつ、ディアスという登場人物が大事な役割を果たしているような気がしました。それを示しているのが彼の名前ではないかと思います。別れ際、ディアスは自分のファーストネームを名乗り、それがオットウェイと同じ「ジョン」だということが分かるのですが、そのシーンは単に二人が同じ名前であることを示しているのではなく、彼と対になる存在であることを示唆しているように思えました。そのような観点からディアスの言動を考えると、彼はオットウェイがリーダー役として行動しているために口にはしない本音の部分を代わりに語っているように思える部分もあったし、彼がオットウェイに反抗して倒されてしまうシーンは、オットウェイがそのような

本音を自分の意志で制御していることを暗示しているようにも見えたのです（もちろん、ただの考えすぎの可能性もあるのですが）。

むさい男たちが主役の映画なので、少し品のない会話もありますし、狼に襲われるという展開上、残酷な描写もあるのですが、雪原の風景は本当に美しく撮られていますし、オットウェイを演じるリーアム・ニーソンが好きな方にもおすすめです。もし気になった方がいらっしゃいましたら、いちどご覧になってみてください。

セカンド・カミング（映画）

名前を見ただけでその映画をチェックしてしまいたくなる俳優、というのは誰にでもいると思うのですが、私にとってロバート・カーライルはそういう俳優のひとりです。「マクベス巡査」というテレビシリーズと映画「フル・モンティ」、どちらの作品から彼のファンになったのかはもう憶えていないのですが、それ以来、彼の名前を見ると、たとえ興味がない作品でもチェックしたり録画するようにしています。「007／ワールド・イズ・ノット・イナフ」、あるいは「28週後...」以来、世界的なヒット作に出演しているというわけではないのですが、「ザ・トーナメント」のようなB級テイスト漂う映画だけでなく、観るとちょっと切なくなる映画などで主演を務めています。この作品では栄光を逃した元ミュージシャンを演じています。

ラクラン・マカルドニクはアメリカの永住権を持つスコットランド人で、ロサンゼルス郊外の農場で働いています。ある日、彼は飲酒運転をしているところを検挙されてしまいます。たかが飲酒運転だと高をくくっていた彼は、それがきっかけで永住権を剥奪されるかもしれないと弁護士から告げられ、動揺します。彼にとって故郷のスコットランドは絶対に戻りたくない場所だったからです。貯金も少なく、移民問題に詳しい弁護士への依頼料すらまともに払えない彼は、昔のつてを頼って金を借りようとするのですが、冷たく追い払われてしまいます。その後、弁護士の計らいによって依頼料の問題は乗り切るのですが、彼がずっと前に犯していたもうひとつの罪が原因で、強制送還は避けられないものとなります。その状況を変えるには、自分が強制送還されることで「極度の苦痛」を味わう者がいることを証明しなければなりませんでした。そのため彼は十年以上連絡を取っていなかった元妻と娘に会うのですが、もちろん、良い結果を得られるはずがありません。彼はどうしようもないほどの自暴自棄に陥り、再び逮捕されてしまいます。そして家に戻った彼は帰国の用意をするのですが、その時、あまりよくない別れ方をしたはずの娘からメールが送られてきます。

栄光は逃してしまったけれど、落ち着いた平凡な暮らしをしていた男が、過去に犯した罪によって不幸になっていく。最初はそんな映画なのかなと思って観ていました。ラクランはスコットランドに戻りたくないという理由で昔の知り合いや別れた妻子に会いに行っては断られてしまうのですが、その場面や断られた後の態度は必ずしも良いとは言えないので、ちょっと自分勝手な男にも見えてしまいます。でも物語が進んでいくと、彼が背負う罪の重さやそれに対する後悔だけでなく、彼の全ての行動にそれらから逃れたいという動機が含まれていることが明らかになっていき、彼の台詞や振る舞いに対する印象ががらりと変わって見えるようになります。映画を観終わって、その視点から考えてみると、作中では描かれていない、たとえば元妻との生活がなぜ上手く行かなかったのか、ということもなんとなく理解できるような気がするのです。

物語の筋はシンプルで、結末も大団円というわけではありません。それでも、これならスコットランドに戻った後もなんとか生きていけるかもしれない、と思わせてくれる、そんな終わり方になっています。ロバート・カーライルは相変わらずちょっとダメなんだけど憎めない男を演じるのが本当に上手いですし、他の俳優陣の演技もいいと思います。もし気になった方がいらっしゃいましたら、よかったら、いちどご覧になってみてください。

Fallout、というタイトルを見ると、ベセスダ・ソフトウェアから発売しているシリーズもののゲームが思い浮かぶ方もいらっしゃるかと思いますが（私もそうでした）、こちらはそれらのゲームとは全く関係のないノンフィクションの書籍です。

冷戦下のアメリカでは、ソ連の脅威に対抗するためには核兵器が必要不可欠だという考えから、開発のために幾度となく核実験が行われました。そしてその結果、核実験の周辺地域には放射性降下物、いわゆる「死の灰」が降り注ぎ、周辺地域の住民に様々な体の異常が生じ、問題となりました。日本では原爆を落とされた広島や長崎にいた人々が原爆による被害だけでなく、様々な後遺症や差別に苦しめられました（苦しめられています、かもしれません）が、それだけでなく、ビキニ環礁（マーシャル諸島）の近くに漁に行っていた第五福竜丸の乗組員なども同じような苦難を味わいました。近年の原発事故の影響でこの問題が再注目されてドキュメンタリーになったものを観たのですが、乗組員の人々が差別されたり、「原爆マグロ」などという衝撃的な言葉が用いられて敬遠されている様子は、数十年前のことなのに、遠い昔の出来事というよりは、つい最近も目にした出来事のように感じました。そしてその既視感は、この本を読んでいる時も同じように感じました。

ここでは1950年代からカルフォルニア州ネバダで行われた核実験によって生じた放射性降下物が風に乗ってほぼアメリカ全土に飛来し、なかでも核実験の場所から近かったネバダやユタ州、アリゾナ州の人々に何が起こったのか、ということ、様々な視点から取り上げています。

核実験を続けるために放射能は安全だという情報を流し続けた原子力委員会（Atom Energy Commission）の動きも詳しく書かれているのですが、その動きは見覚えのあるもの（少量の放射能は危険ではないという発表やプロパガンダ映画がつけられたことや、子供の甲状腺異常は放射能とは関係ないという説明や、放射能の影響を調査しようとした科学者に対して研究資金を打ち切ったり圧力をかける様子など）から、放射能で火傷を負った馬を買い取った後に屠殺して鶏の餌にしたとか、信じられないようなものもあります。また、安全性の宣伝の一環で、原子力委員会と繋がりのある委員会に属する博士が「広島と長崎の生存者の多くは普通の生活を送っている」という主張をしていたという話は、そこに知り合いがいるわけではないけれど腹立たしく感じました。

ガンや白血病を発症して亡くなった人々、そのような病気で家族を喪った人々や、多くの牛や羊を失って土地を捨てて離れるしかなかった牧場主など、放射能の影響によって人生を狂わされてしまった人々についても詳しく書かれています。また、西部劇俳優とスタッフについても少しだけ触れられています。ジョン・ウェインが亡くなった病気の原因がネバダの砂漠で西部劇を撮影していたから、という話のは有名なようですが、他にもスタッフなどを含めて220人が91の症例を訴えていたそうです。ただ関連は不明とされていて、何件かは関連なし、ということになっているそうです（当時の映画業界が国と問題を起こしたくなかった、という可能性はありそうですが）。

被害に遭った人々の主張は繰り返し原子力委員会によって否定されてきましたが、１９８４年になって初めて裁判で因果関係が認められました。ただこの本はそこで終わっているわけではないのです。その二年後、放射能によって損害を被ったという牧場主の訴えは最高裁で否決され、その後も否決の動きは続いていくのです。この本の最後は、１９８４年の裁判で因果関係を認めたジェンキンス判事と著者の会話で締めくくられています。そこで彼がどのような理由から判決を下したのか、その理由を知ることができます。

毎年行われている平和記念式典にはアメリカ政府の関係者も参列していますが、自国で放射能被害を訴えている人々にすら、きちんとした対応をしていないのに、本当に他国の原爆の被害者の人々に対してそのつらさを想像して参加しているのか、読み終わってからちょっと疑問に思っていました。

それからこの本では周辺地域に住むアメリカ先住民の人々に関しては、当時の事情もあって資料が少ないことからか、その被害状況についてはあまり取り扱われてはいないのですが、同じように、つい先ごろまで核実験が行われていながら注目されていない地域の人々はどうなのだろうか、ということも気になりました（ちなみに核実験とは関係ありませんが、近年、イラクでは先天的な奇形を持つ赤子が生まれるケースが増えているそうです。その原因のひとつにイラク戦争で使用された劣化ウラン弾の影響があるのではないかと言われているのですが、アメリカ側は直接的な因果関係はないと言っている、というようなニュースも放送されていました）。また、大きな目的のために政府が個人を犠牲にする可能性を秘めている、ということもよくわかる一例ではないかと思います。

今ではちょっと手に入りにくくなっているかもしれませんが、もしこの本に出会う機会があったら、気になった方は目を通していただければと思います。

日本ではどの程度かわかりませんが、海外では「ブレア・ウィッチ・プロジェクト」以来、特定のカメラの視点から構成された映画が人気らしく、様々な作品が作られているようです。家の中で起きた怪現象を記録した、廃病院にインチキ霊能番組を撮りに行ったら本物の幽霊に襲われた、というオカルトホラーものから、北欧の伝説上の生き物トロール（トロール）が本当は実在していた、というものまで、その範囲は多岐にわたっています。

この作品ではシーンのほとんどが、謎の人物が車から撮影しているカメラ映像や、家や車や職場に仕掛けられた盗撮カメラによって構成されています。その視点から、主役が周囲の誰にも自分の訴えを信じてもらえない状況でじわじわと追いつめられていく恐怖を感じ取ることができます。

アーレッタ通り388に住むジェームズは、ある日、作った覚えのないCDが車に入っていることに気づきます。妻のエイミーに尋ねると、自分で作ったのだろと言われ、パソコンにも確かに履歴が残っていたのですが、自分がその曲をダウンロードした記憶は全くないため、言い争いになってしまいます。それを皮切りに、エイミーの失踪、無言電話、飼い猫のすり替えなど、他人に被害を訴えても信じてはもらえない、けれども自分の目にははっきりとおかしいとわかる不可解な出来事が続きます。ジェームズは精神的に追い詰められていき、疑いをかけていたビルを犯人だと思い込み、殺害してしまいます。

そしてある夜、妻の電話に掛けた時の着信音がきっかけで、ジェームズは家の中に犯人が潜んでいることに気づき、追いかけますが、逃げられます。そこで電話を介して、犯人に妻を返さなければ警察に全てを話すと告げます。翌日、会社のパソコンに自分の家のベッドに寝ているエイミーの映像が写しだされたので急いで帰りますが、エイミーは地下室で殺害されていました。そこにエイミーの姉妹のキャサリンと警察がやってきます。銃を持っているジェームズは犯人だと疑われ、警察官の言う事に従わなかった彼は射殺されてしまいます。

この作品では謎の人物、つまり犯人の姿は最後まで明かされることはありません。誰が犯人なのかを想像しながら観ていたのが、ちょっと驚いてしまったのですが、観終わっても、裏切られたというよりはそれなりに納得できる感じでした。映画を観て、この犯人がどういう人物なのか想像できたからです。

この犯人は対象となる一家の生活や過去を調べ上げた上で、その全てを監視し、相手に対して徐々に脅威を加えて精神状態を不安定にさせ、最終的に崩壊させることに快楽を見出すシリアルキラーの一種だと思われます。だから犯人は、ジェームズが子供の頃にいじめたビルという人物がいること、ジェームズがかつとなると突発的に暴力的行為に及ぶ傾向があり、妻エイミーの姉妹キャサリンが疑いをかけるほどの暴力を振るった過去があることも、全て把握していたのだと考えられます。

そして犯人はその経緯を撮影した全ての映像を編集してDVDにしています。これは後からその作品を観て、再びその時に味わった快感に浸るためだと思われます。犯人が編集を終えたDVDを棚にしまうシーンがあるのですが、これは観客が今まで観ていた映像は犯人が編集した完成

版の映像を見ていた、ということを表しているのかもしれませんが。ちなみに、邦題は「388」だけなのですが、英語の題名では「388 Arletta Avenue」となっています。これは舞台となる場所を意味するだけでなく、犯人が書いたDVDのラベルとしての意味を含んでいるという気がします。また、犯人がDVDをしまう棚には他にもいくつか同じラベルのケースがあったことから、すでに何件かの前歴がある人物だと思われます。

作中の映像が犯人の編集したものだという仮定から考えると、ときおり映し出される、寝室で寝ているジェームズの姿を撮影する犯人の姿や、地下室に立っている犯人の姿の映像がちゃんと意味を持っていることがわかります（最初に観ている時は謎の人物が家の中にいる、という恐怖を演出する映像だと感じるのですが）。これは被害者に対して何らかの脅威を与えようとしているのではなく、この犯人自身が何度も犯行を繰り返すなかで、さらに強い快感を得るために、より危険な状況の中で自分が他人の家の中に侵入するという、一種のゲームを楽しんでいるのだと考えられます。より難易度の高い行為を達成した、という優越感に浸っているわけです。その快感に浸ろうとするが故に、一度は捕まえられそうになるわけですが、そこを乗り越えたという事実が、この犯人に更なる快感をもたらすのだと思われます。

犯人の動機が語られることはないのですが、不明のようですが、個人的には、映画の中にヒントがあったと思います。それはジェームズがビルに過去の行いを詫びて、妻の失踪に関わりがあるのか探ろうとしているシーンでの会話です。彼は自分の過去の行いについて言い訳をしているなかで、「なぜかはわからないけれど、それを楽しんでいた」というようなことを話します。このセリフが犯人の動機を示しているような気がします。

他人に対して悪意を向ける人物がいた場合、その理由として過去の諍いを想像するのはごく当たり前の心情です。この映画を観る、あるいは（私を含めて）この映画を観た人はその理由を考えながら犯人は誰かと考えただろうし、この映画の犯人もそれを理解しているから、ジェームズがビルを疑うだろうと予測し、罠を仕掛けていたのでしょう。でも、この犯人の場合は違います。映画を観る限り、犯人はジェームズや過去の被害者に対して、そのような感情は持っていないと思います。彼がこのような行為に及ぶのは、過去のジェームズと同じで、それを純粋に楽しんでいるからなのだと思います。

ここまでネタバレしてしまう理由は、実はこの映画、あんまり評価が良くないからです。個人的にはなかなか面白いと思ったのですが、ネット上ではけっこう酷評されているし、海外の映画評価でも賛否両論という感じで、ここに書こうか迷ったほどです。でも、読んだ人の観る時間の節約ぐらいにはなるかとも思い、こうして書いてみた次第です。個人的には面白いと思ったし、「CUBE」の監督が製作総指揮に参加しているのもなるほどという感じだったのですが、人にはあまりお勧めしない方がいいのかもしれませんが。それでも興味を持っていただけの方は、覚悟の上で、いちどご覧になってみてはいかがでしょうか。

The Winning Season（映画）

個人的に、どこか憎めないダメ男を演じるのが最も上手いイギリスの俳優はロバート・カーライルだと思っているのですが（彼は正確にはスコットランドの人なのですが、それはさておき）、ではアメリカでは誰だろうかと考え、サム・ロックウェルではないかという気がします。彼を意識するようになったのは、テレビ業界のプロデューサーにしてCIAの職員だった男性の実話を描いた「コンフェッション」という映画がきっかけでした。それ以来、名前を見かけるとチェックする俳優のひとりになっています。一癖ありそうな男からどうしようもないぐらい馬鹿な男まで幅広く演じ分けることができる彼は、この映画でもそんな人物を演じています。

学生時代は有望なバスケットボール選手だったけれど、今はレストランの皿洗いをしているビルは、かつての同級生で高校の校長をしている友人から女子バスケットボールのコーチを頼まれます。皿洗いで居続けるよりはと受けた仕事でしたが、そのチームは部員が六人だけ（しかも一人は足を怪我している）、しかもボールの扱いはそんなに上手くないし、メンバー同士の息も合っていないという、どうしようもない状態でした。最初は女子バスケットを軽く見ていて、しかもチームの現状を見てやる気がほとんどなかったビルでしたが、監督として女子バスケットの試合を見て、考えを変えるようになります。そして練習を続けるにつれて、メンバー同士が少しずつ互いを理解するようになっていくにつれて、最初は負け続けだったチームが少しずつ勝ち始めるようになります。

一方、ビルは別れた妻のもとにいる娘モリーと少しでも関係を築こうとしていましたが、ほとんど上手くいきません。週に一度会うこともすっぱかされて、友人の誕生日会にいる娘を無理やり連れ戻したり、女子バスケットの対戦相手になった時は悩んだ挙句にその弱点を突くようにしたために、さらに関係が悪化してしまう始末。娘を大事に思っている彼は今までよりも酒に溺れるようになります。それでも彼はコーチの仕事はちゃんと務め、とうとうチームは地区大会に進出するまで勝ち進みます。ですがその夜、ちょっとした気の緩みから過ちを犯してしまい、それが原因で彼はコーチをクビになってしまうのです。それでも自分のチームが地区大会を勝ち抜けると確信した彼は、なんとかしてチームに指示を伝えようと奮闘します。

バスケットボールのことに限っては優れているけれど他の部分はまったくダメなコーチと、それぞれに問題を抱えている女子バスケットチームの面々がお互いに支え合いながら成長していく姿は、スポーツを題材にした映画では王道かもしれませんが、それでも観ていて楽しいです。

それから女子学生が抱えている問題として同性愛や移民差別が登場します。扱いはそれほど重苦しくなく、さらりとした感じなのですが、学生のスポーツを題材にした映画の中でそのような問題が話題に上がるのは今までにはなかったと思うのでちょっと驚きました。このように描かれる問題が変化するのも、アメリカの現在が反映されているということなのかもしれません。

ちなみに、この作品の題名を英語で紹介しているのは、邦題がふたつあるからです。一般的な題名は「ハートボール」というそうなのですが、WOWOW放送時には「プリティ・フープ」という題名でした。どのような理由でそうになっているのかはわかりませんが、時折、こういうことがあるようです。

コーチをクビになり、試合会場に入ることも拒否されてしまうビルが、なんとかしてチームに指示を伝えようと奮闘する姿は、個人的にはこの映画の一番の見所で、サム・ロックウェルだからこそ演じられる姿ではないかなと思います。気軽に楽しめる作品ですし、もしよかったら、一度ご覧になってみてください。

リッパー・ストリート シーズン1（ドラマ）

切り裂きジャックといえば、ミステリー好きなら知らない者はなく、その陰惨かつ謎の多い事件は現在でも人々を惹きつけています。イギリスでは事件の舞台となったホワイトチャペルを巡る観光ツアーがあり、事件に触発されたドラマ作品がいくつも制作されています。ただあまりにも題材として用いられているが故に、またか、という印象を抱く方もいらっしゃるのではないのでしょうか。この作品でも十九世紀のロンドンが舞台になっているのですが、他の作品と異なるのは、切り裂きジャックの事件が起こった後のホワイトチャペルを描いているという部分です。

舞台は切り裂きジャックの事件から数か月後のホワイトチャペル。リード警部補は切り裂きジャックを捕まえられなかったことを苦々しく感じているが、それでも日々起こる事件を部下のドレイク部長刑事と共に捜査していた。偽造紙幣と八百長試合の捜査をしていた二人だったが、そこに切り裂きジャックの事件と同様の特徴を持つ女性殺害事件が発生する。切り裂きジャックに未だ執着するアバーライン警部はジャックが再び犯行を行ったと決めつけ、新聞記者ベストは詳細が不明なのに容疑者の名を新聞に書きたてようとするが、リードはそれを留め、元ピンカートン社の探偵でアメリカ軍の外科医をしていたジャクソンの助けを借りて事件を捜査する。やがて被害者は売春婦ではないことが分かり、殺人事件の裏に潜む謎が明らかになっていく。

一話目こそ切り裂きジャックの模倣犯という切り口から始まっていますが、その後は「オリヴァー・トウィスト」のフェイギンらを彷彿とさせる犯罪集団が登場したり、コレラの再来かと人々を恐怖に陥れる集団怪死事件や、スト活動に加わっていたユダヤ人殺害事件とその裏で暗躍するロシアの秘密警察の存在、それぞれの登場人物の過去にまつわる事件などが描かれていきます。海外wikiの情報によれば、ごく一部を除いて時代考証は正確だそうですし、十九世紀イギリスのスラム街の猥雑な雰囲気なども見事に再現されていると思います。

過去のある出来事が原因で妻との関係が疎遠になっている主役のリード警部補を演じるのはマシュー・マクファディン。ドラマ「MI5」や、ジュリア・マッケンジー版ミス・マープル「ポケットにライ麦を」の警部役なども演じています。日本ではあまりメジャーな方ではないかもしれませんが、その役柄によって表情や声の調子を見事に変化させている、演技力の高い俳優だと思います。エジプトで兵士として働いた経験があり、腕っぷしはとても強いが女性に対しては奥手なドレイク部長刑事を演じるジェローム・フリンは、「ゲーム・オブ・スローンズ」が好きな人ならブロン役（ティリオン・ラニスターと共にいる傭兵）としておなじみだと思います（私がこの作品が観ようと思ったのも、この人が宣伝写真に写っていたのがきっかけでした）。売春宿の女主人と親しく、なにやら穏やかでない過去を持っているジャクソン役を演じるアダム・ローゼンバーグは初めて観た方だったのですが、アメリカでは様々な舞台やテレビで活躍している俳優さんだそうです。

事件の描写が生々しいところもあるので、そのような表現が苦手な人にはおすすりできませんが、脇役も含めて全ての俳優さんの演技の質が高いし、ヴィクトリア朝のイギリスやミステリーが好きな人には間違いなく楽しめるのではないかと思います。イギリスではシーズン2が放送されているそうなので、早くこちらでも放送してくれないだろうかと今から待ち望んでいる作品

です。今はCSでしか放送されていないのですが、どこかで名前を見かけた方は、よろしければご覧になってみてください。

ロンドンゾンビ紀行（映画）

どちらかというと、ドラキュラ（それも映画ではなく、ゲームの「悪魔城ドラキュラ」の方）に魅了されていたので、ゾンビの出る映画にはまったく興味がありませんでした。ただ、「Dead Rising」や「Dead Island」などのゾンビと戦うゲームをやるようになってからは少しずつ観るようになってきました（そういえば、「バイオハザード」も敵にゾンビが出てくるのに、ゾンビ映画を観ようという気にはなりませんでした）。

ゾンビ映画と言うと、群れで襲ってくるゾンビから逃げるか戦うだけ、というイメージだったのですが、ドラマ「The Walking Dead」はそのような作品とは異なり、生存者たちの深い人間ドラマなどが描かれていて驚きました。この作品が世界的にブレイクしたことも手伝ってか、それともゲームのおかげなのか、詳しくはわかりませんが、現在も次々と新しいゾンビ映画が生み出されているようです。私が観たものでは南北戦争やキューバを舞台にした作品などもありました。

この映画の舞台はイギリスなのですが、他の作品とちょっと違うのは、イースト・エンドという地区に限定しているところです。昔はスラム街として有名な地区で、現在はきれいになっていますが、やはり都会と比べると低所得者の人が住んでいるというイメージの強い場所のようです。ここに住む人々はコックニーと呼ばれ、階級意識の強いイギリスでは差別されてきた歴史も（1960、70年代でも当たり前に）あるのですが、ちょっとした困難ぐらいでは挫けない人も多く、ヴィダル・サスーンや私の大好きなマイケル・ケインなどが育った場所でもあります。この物語は建設現場で十七世紀に王の命令によって封印された地下墓地が発見され、中に入った二人の作業員がゾンビに噛まれてしまうところから始まります。

資金的な問題から数週間後に取り壊しになることが決まっていた老人ホームに祖父レイを入所させていたテリーとアンディは、イースト・エンドを離れたくないというレイの要望を叶えようと、老人ホームを守るために銀行強盗を計画していた。いとこのケイティやイラク帰還兵のミッキーらと共に強盗を行い、金銭の強奪には成功するも、入り口で警官隊に囲まれてしまい、人質を取って立てこもる。なんとかして脱出しようとした彼らが外に出た時、警官らの姿はなくなっており、目の前に現れたのはゾンビだった。彼らは人質と共に車に乗って逃走する。一方、ゾンビは老人ホームにも迫っており、何人かが襲われてしまう。若い頃にナチスと戦った元軍人のレイは指示を下して仲間を助け、部屋に立て籠もっていたが、ゾンビが部屋に突入してくるのは時間の問題だった。

コメディタッチのゾンビ映画で、明らかにB級映画のノリなのですが、オープニングの演出にも引きつけられたし、随所に登場するネタが個人的にはかなりツボにはまりました。あらかじめ知ってしまうと面白くなってしまうかもしれないので、全てを明かすことはできないのですが、歩行器を使わないと歩けないおじいさんとゾンビの命懸けのチェイスシーンなど、観れば笑わずにはいられないようなシーンが満載です。ロンドンの下町っ子ということもあってか、言葉遣いはちょっと汚いところもありますが、下ネタがなかったのも良かったです。

ゾンビに関する描写はちょっと激しくて、海外のゲームが日本語で発売される際に規制される

ような感じの表現が苦手な人にはおすすりできませんが、軽いノリで笑いたい方やイギリス好きの方にはおすすりです。よかったら、いちどご覧になつてみてください。

それからこの映画とは関係のないネタですが、そろそろ「Sherlock」の新シーズンがイギリスで動きを見せそうな予感です。というのも、それを感じさせる動きがあつたので。

ファンの方の中には見ている人もいらっしゃるかと思うのですが、「Sherlock」では登場人物のブログなどが製作されています。ホームズの作ったホームページや、モリーやワトソンのブログなどです。ワトソンのブログにはドラマで描かれた事件のことや、名前しか登場しなかつた事件のことなどが書かれています。コメント欄にはモリアーティとおぼしき人物や兄のハリー・ワトソンの書き込みなどもあつてなかなか面白いのです。

そして、このサイトを見つけてから一年近く、折に触れてチェックしていたのですが、つい先日、そのブログが更新されていたのです。まだ悲しみからは癒えていないが、なんとか前に進もうとしているという内容で、また更新されそうな予感。

日本で放送されるのはまだしばらく先になりそうですが、ネットで検索すれば見つけるのはそれほど難しくないはずなので、少しでも「Sherlock」の新しい動きを感じたいという方は、チェックしてみるのも一興ではないでしょうか。

東京トワイライトバスターズ（ゲーム）

大正十二年、夏。父親が失踪したという知らせを受けてイギリスから帰国した草薙祥は、父親の知人らに連絡をとり、失踪直前の父親の足取りを掴もうとする。その調査の最中、父親のものと思われる死体が発見されたと警察から伝えられる。顔は判別不可能だったが、その服装から父親に間違いないと認めた祥は、失意のまま、後の手続きを執事に任せ、イギリスに戻ろうとする。しかし船に向かう桟橋で、突然、ある少女の幻影を見る。それが父親と何か関わりがあるかもしれないと感じた祥は調査に戻り、父親とその友人が最後に向かったと思われる場所を発見する。そこは軍部の人間が出入りしている工場だった。祥は危険を覚悟して仲間と工場に忍び込む。そこで彼は恐るべきものを目にするようになるのだった。

これは今から十数年ほど前に発売されたPC-98用のゲームです。当時はまだフロッピーディスクの時代で、インストール時に作成した起動ディスクにHIMEM.SYSやらEMM386(388?).EXEをコピーしてエディターで構文を書き換えないと効果音が出ないようになっていたので、とても苦労させられた思い出があります。

当時のパソコン雑誌の「Log in」などではそれなりに大きく扱われていたのですが、あまり有名にはならなかった作品のようです。また、二度ほど発売延期を経て発売したためか、表示される話数と実際に遊べる物語の数が異なっていたり（「第八話」が絶対に出てきません。DS版では話数が修正されています）、警部や新聞社の情報の聞き込みは物語の進行と全く関係ないなど、明らかに雑な部分も見受けられるのですが、それでも魅力的なゲームであることに変わりはなく、今までに五周ほど（パソコン版で4周、DS版も1周）遊んでいます。

ジャンルはリアルタイムアドベンチャーで、町を移動して情報を集めたりサブストーリーを発見する物語パートと、工場や洋館を探索する探索パートに分かれています。探索パートの難易度はけっこう高めです。画面隅に表示されている時計が刻一刻と進んでいく中で、様々な場所を調べ、入手した武器やアイテムを駆使して先に進んでいかなければなりません。とはいえ、よくあるアドベンチャーのようにただ全ての場所を調べればいいというわけではありません。各キャラには体力ゲージだけでなく精神ゲージが存在し、探索時には少しずつ減少していき、完全になくなると錯乱状態に陥り、一時的に操作不能になります。また、ステージによっては時間がより重要な存在になることがあるため（時限爆弾が爆発したり、エンディング分岐に関わるなど）、注意が必要です。

味方には物語の要となる少女の他に、老執事、秘書、警部、魔女、風水師、華族のお嬢様がいて、敵には妖怪から魔術師、憲兵などが登場します。ストーリーはクトゥルー神話やグループSNEのゴーストハンター・シリーズを彷彿とさせるもので、オカルト系の作品が好きな人にはかなり楽しめるものだと思います。

このゲームソフトは日本テレネットのウルフチームが開発したのですが、2010年にスターフィッシュ・エスディによってDSでリメイク版が発売されました。様々な部分に変更があり、個人的にはちょっと残念な部分もありましたが（気づいた変更点について、最後の方にまとめ

てみました）、そこに対する違和感を横に置いて遊んでみると、やはり面白さは減っておらず、最後まで楽しめました。

現在、パソコン版はP r o j e c t e g gという懐かしいソフトを有料で遊べるサイトでプレイできるので（私が確認した当時はありました。なくなっていたら申し訳ありません）、興味のある方は、手に取りやすい方の媒体で遊んでみてはいかがでしょうか。

D S 版移植時に生じたと思われる変更点

- ・一部キャラ・イベントグラフィックの変更
- ・音楽の微妙な変化（音源の変化が原因か？）
- ・鍵が使用すると消費されるようになったため、「鍵をかける」ことができなくなった。（「睦月精肉工場」では扉を閉めておけば侵入が発覚することはないが、「禁断のアトリエ」では鍵をかけて隠れることができなくなり、また、執事の六郎の察知能力が高くなったため、隠れたり逃げたりしなければならない必要性が増した）
- ・一部アイテムの名称変更（「大麻」「ヒロポン」「モルヒネ」「ストリキニーネ」「トリカブト」「人肉」などの名称が消え、同アイテムが「乾燥薬」「強力鎮静剤」「強力回復薬」「毒粉末」など、別の名前に変わった）
- ・一部会話の追加（初心者などにもわかりやすいようなヒントとなる発言が増えたような気がする）
- ・一部アイテム入手追加（「禁断のアトリエ」クリア時に徐々に生命が回復する魔導具が手に入るようになった、など）
- ・拳銃の弱体化（その代わり、マップで使用しても騒音で敵に気づかれることがなくなった）
- ・壊せる扉が減った。（きちんと対応するアイテムを使用しなければ開けられない扉が増えたような気がする。そのため、針金や古釘の重要度が減った）
- ・キャラステータスの変化（鈴麗華の攻撃力は弱体化したが、九条静などの最弱キャラの弱さが緩和されたように感じる）
- ・セーブデータ数の変化（パソコン版は4つだが、D S 版は2つ）

世間的には評判のよろしくなかった「アサシン・クリード3」ですが、個人的には、一部の点を除けば「リベレーション」よりも良くなっていたし、独立戦争時代のアメリカの雰囲気を楽しめたので、悪くない作品だと感じていました（中古で安く買ったということも理由の一つかもしれませんが）。ストーリー一面でも、過去と未来で描かれる父と子の物語はそれなりに楽しめたし、なぜヘイザムがアサシンの血を引きながらテンブル騎士団の幹部になったのか、という点が気になっていました。ですから、次の主人公がヘイザムの父であると知り、その謎がわかるのではないかと期待して遊んでいたのですが.....。

このレビューを書く上で、（読んでも楽しくはないから）批判的な部分は書かない、と決めていたので、ストーリーに関しては多くを語るつもりはないのですが、一言だけ言うとしたら、「IGN（海外のゲーム評価サイト）の評価は正しかった」という感じでしょうか。風景の描写は美しくなっていると思うし（次世代機になればなおさらでしょう）、海戦は楽しいし、航海時の船乗りの歌や酒場で演奏されている音楽がとても良いだけにとても残念です。

（世間的な評価はどうあれ、自分が接した時に）批判的になってしまう部分が多い作品は紹介しないと決めていたので、この作品について紹介するのはどうしようか二週間ほど迷っていたのですが、思ったよりも国内でプレイ人口が少ないのか、攻略情報があまり充実していない感じだったので、自分なりの進め方などをメモ代わりにここに書いておけば、誰かの参考になるかもしれないと思い、書いてみようかと思いました。ほんの少しでも参考になったら幸いです。

ちなみに私はオフラインでプレイしているので、ケンウェイの交易艦隊に関してコメントすることはできません（前作までのアサシン派遣任務とは異なり、今回はXbox Live接続時にしか交易できません。そのため、接続してない人はアブスターゴチャレンジや宝の地図がコンプリートできないようになっていきます）私はある程度情報を見て覚悟した上で買ったので、別にいいかと思っているのですが（それでもちょっと残念ですが）、気になってしまう方は要検討かもしれません。

ストーリーミッションのサブ目標について

シークエンス3の「黒旗を掲げよ」では、サブ目標としてハンター船（手配度が高まるとやってくる船）を襲わなければなりません、強化せずに挑むとちょっと大変です。素材がないとできないものも多いのですが、通常弾の強化や臼砲の入手などはお金だけでできるので、これだけでも行っておくと、だいぶ楽に目標を達成することができます。

同じく、シークエンス3の「正当防衛」では、八隻のスクーナー船と戦う場所で、側砲で二隻破壊というサブ目標が登場するのですが、側砲（通常砲の攻撃）で二隻を破壊しても達成されません。（目標の翻訳ミスの可能性があるのですが）どうやら実際に求められているのは「側砲で二隻同時に破壊すること」みたいです。私はこれで達成しました。あらかじめ何隻かのスクーナーをあと少しで破壊できる状態にしておき、射線上に二隻が入った時に砲撃すると、上手くいきます。

シークエンス4でダートを入手し、それを駆使して敵を排除し、捕らわれている人々を助ける場所があります。犠牲者が出て構わないという人であれば気にしなくてもいいのですが、狙撃兵にバーサーク・ダート（毒で狂って周囲を攻撃する。効果が切れると死亡）を使うと、まれに捕らえている人物を撃つことがあるので、注意が必要です（サブ目標にはなんら影響はありません）。

シークエンス9で、バージェスとコックラムの二人をダブルアサシンすることがサブ目標になっている場所があります。ここでは二人並んで移動する部分が少ないこともあって、けっこう難儀しました。参考までに自分なりのやり方を記しておきます。ちなみに、暗殺コントラクトを半分終わると手に入る「隠密の衣装」を装備した状態です。

（メモリー再開位置より）

1. スタート地点から坂を駆け下り、繁みの前にいる兵士を暗殺。
2. ダッシュで左にある藁山に飛び込み、そばにいる兵士を暗殺。
3. 建物裏に回ると、木の向こうに、正面を向いていて左を向いて止まる兵士がいるので、後ろから暗殺。
4. 兵士の視線を避けつつ、前に進み、藁山の中に飛び込んでそばにいる兵士を暗殺。
5. 近くの建物の屋根に上り、イーグル・アイで対象をロックした後、屋根の陰で待つ（上にいると見つかるので）。二人が通り過ぎ、ターゲットのひとりが「野郎ども！」と言いながら戸を叩いている時に、そばにある木の枝の上に移動する。（そばにいる兵士に警戒されるが、無視して上へ）
6. 「野郎ども！」と叫んでいたターゲットが戻っていく時にエア・アサシンのロックがかかる。しばらく待っていると、二人同時にロックされて光る瞬間があるので、その時に暗殺すると、ダブル・エア・アサシンになる。

もしかしたら、もっと楽な方法があるかもしれませんが、私はこんな感じでやりました。

シークエンス10の「ロープスイングを利用して船長を倒す」はロープスイングからのエア・アサシンです。タイミングを狙ってロープスイングし、船長がロックで光った瞬間にロープを放して暗殺ボタンを押したら成功しました（メモリー再開すると見張り兵士を暗殺するところからやりなおしなので、できれば一度で決めたい場所です）。

シークエンス11の「旧友に出会う」の旧友とは、捕らえられた元海賊仲間のこと。裏切り者は警戒区域内の籠檻、不死身の男（シークエンス8でアサシン・ブレードのエア・アサシンをくらわせたはずなのに生きてるって……）は監獄内の牢の中にいます。インタラクトすると達成となります。

収集物

マヤの石を揃えるにはシークエンス10まで進める必要があります。

潜水鐘はシークエンス6で使えるようになります。一部の暗殺コントラクトで沈没船の先にある密輸団のアジトに行かなければならない場合があるので、暗殺コントラクトを優先的に進めると、二度手間にならずにすむかと思います（宝の地図も同じく。なのでコンプリートを狙う人

は地図も先に手に入れておくと楽です）。

暗殺アクティビティについて

シークエンス2からできるという点はあるがたいのだけれど、この時点のエドワードはアサシンのことなどほとんど知らない海賊なので、そんな彼が伝書鳩の知らせを見て暗殺を請け負うというのはちょっと不自然かなという気がします。演出面を考えると、シークエンス4ぐらいまで封印しておく方が自然だったのではないかなとも思います。

シークエンス4で手に入るバーサーク・ダートを利用すると暗殺が楽になりますが、進行上、敵が船に逃げる時などに効果がキャンセルされてしまう場合があります（追いかけて暗殺すれば海戦に持ち込まずに終了できるかは検証していません）。

狩りについて

前作のように罠を使わないと毛皮の質を損ねるということがないので、一部のチャレンジさえ済ませてしまえば、銃でも問題なく動物を狩ることができます。テンプル騎士団狩りのイベントをこなしたり、新しく着いた島で狩りをこなす癖をつけていれば、特に問題なく、陸地の生き物を全て狩れると思います。

海での狩りは時間によっては魚影などが見えにくくなります。銚は対象の動きを先読みして投げないと当たりづらいです。一部の攻撃モーションは銚を投げることによってキャンセルさせることができます（白鯨はまだ出会ってません。オンラインに繋いでいないと出会えない可能性も考えられます）。

船の強化について

多くの強化は海戦で略奪する物資が必要となるので、まずはお金だけで実行できる部分（通常弾の強化など）を上げ、海戦を楽に行えるようにしておくと楽だと思います。実質的には「外殻」「重砲」「側砲」「旋回砲」「通常弾の強化」だけでも戦列艦と十分に戦えるようになりますが、サブ目標で「臼砲」や「衝角」、「樽爆弾」なども必要となることがあるので、ある程度は鍛えておくといいかと思います。

シークエンス8ではストーリーで戦列艦と戦わなくてはならないので（ちゃんと注意が入ります）、それまでには鍛えておきたいところです。

伝説の船との戦いについて

どれも戦列艦以上の強さなので、可能な限り、性能を強化しておく必要があります。砲撃能力だけでなく、衝角も最強にしておくと、より楽に戦えます。ここでは、必勝、というわけではありませんが、こうしたら勝てましたという方法を参考までに紹介させていただきます。

プリンス号（南東）

臼砲と重砲をメインで使ってくる幽霊船。通常弾の砲撃だけで攻撃していると競り負けるので

、連鎖弾で動きを鈍らせてリムアタック、相手がこちらの側面に姿をさらした時に重砲攻撃などを駆使すると良い。

ラ・ダマ・ネグラ号（南西）

強力な臼砲と高い防御力を持つスペイン船。距離をあけていると臼砲をくらうので、防御しつつ最大速度で敵船を追いかけ、連鎖弾からリムアタック。旋回砲がよく効くので、リムアタック後に砲撃チャンスを得たら重砲から旋回砲のコンボが効果的。

ブラザー・イン・アームズ号（北東）

ロイヤル・ソブリンと軍艦フィアレスの二隻と対決。常に挟み込んでくるような動きをするので、それを避けるように動きながら臼砲や通常砲で攻撃。挟まれた場合にはわざと速度を落として旋回し、少しでも早く挟撃から抜け出すこと。

一隻になったとたんに攻撃的になり、強烈なラムアタックを狙ってくることがあるので、二隻の時になるべく両方の耐久力を減らしつつ、一隻になったら樽爆弾でラムアタックを回避しつつ、一気に砲撃を加えて勝負をつけること。

エル・インポルト号（北西）

樽爆弾を使ってもよけようとせずにラムアタックを狙ってくる稀有な船。砲撃も強力でかなり厄介な相手。四隻の中でいちばん強いのではないかと思われる。

鍵となるのは連鎖弾。速度を遅くすることでラムアタックがよけやすくなる（初回の突撃にも有効）。出来る限り、こまめに連鎖弾を浴びせて速度を減退させ、側面や背面へのラムアタックや重砲と旋回砲のコンボが有効。離れると強力な砲撃を浴びるだけでなく次の突撃を狙われてしまうので、積極的に近づいていくこと。

伝説の船をすべて倒すと（もしくは、エル・インポルト号破壊時に）チャージ攻撃ができるようになります。

ポセイドン・アドベンチャー（映画）

「セプテントリオン」というゲームをご存じでしょうか？ 有野課長が挑戦していたので、「ゲームセンターCX」をご覧になっている方ならすでにご存じかと思いますが、ヒューマンという会社から発売されたSFCのソフトで、何人かの主人公の中からひとりを選び、転覆した豪華客船の中を回り、生存者を助けて脱出するというアクションゲームです。そして、このゲームに多大なる影響を与えたのがこの映画だそうです。引退間近の豪華客船ポセイドン号が地震の影響によって発生した大波で転覆し、生命の危機にさらされた乗客たちが脱出しようと苦闘する姿を描いた作品です。

最初は「この牧師、どうしてそっちに行けば助かるって確信してるんだろう」と思ったりもしたのですが、観ているうちにあまり気にならなくなりました。それはこの映画の内容に惹きつけられていったから、ということもありますが、この映画が描いているのは単なる海難事故ではなく、困難に直面した人間の姿ではないかと感じたからです。登場人物を通して、そのような人々が寓意的に描かれているように思えました。どんな困難にも果敢に挑み続けることで道が開くと信じている人を体現しているのがスコット牧師であり、だからこそ、彼は疑問を抱くことなく、信じた道を進んでいく。独身のマーティンが兄を亡くして生きる気力を失っている女性に語り掛ける言葉や、現状にしがみついていることで生き延びることができるかと信じている人たちが亡くなっていく様子にも、同じものを感じました。すでに製作されてから四十年の時を経ている映画なのに惹きつけられたのは、こういうことを感じさせてくれる何かがあったから、なのかもしれません。ちなみに、原作があると書かれていたのでちょっと英語のwikiをチェックしてみたのですが、設定や物語の筋に少し異なっている部分があるようです。そのような部分を細かく検証してみると、より深く作品が理解できるかもしれません。

先導者となるスコット牧師を演じるのはジーン・ハックマン、わざわざ説明する必要もないほど有名な名優です。この作品の演技はアカデミー賞では評価されていませんが、wikiによれば英国アカデミー賞では最優秀俳優賞を受賞しています。スコット牧師と対立する刑事ロゴを演じるのはアーネスト・ボーグナイン。アカデミー主演男優賞の受賞経験もある俳優ですが、西部劇の悪役としてもおなじみの人です。船員のエイカズを演じるロディ・マクドウォールや船長役のレスリー・ニールセンは刑事コロンの犯人役や被害者役として登場するほど有名な俳優です（レスリー・ニールセンは「裸の銃を持つ男」のイメージが強かったのでコメディ俳優だと思っていたのですが、刑事コロンを観てシリアスな演技もできる渋い俳優だったことを知りました）。

ポセイドン号が転覆して天地が逆転していく様子や、ステンドグラスに落下していく人を写したカットには息を吞んでしまいました。今ならばたやすくCGでこれ以上の映像表現を作れてしまうことは誰の目にも明らかなのですが、「今から四十年も前、CG技術が発達していない時代にこのような表現を行った」ということを差し引いても、恐怖が伝わってくる生々しさを含んだ映像は一見の価値があると思います。もしよかったら、ご覧になって観てはいかがでしょうか。

禁酒法時代のアメリカ、マサチューセッツ州のニューカムという小さな町にあるウェザートップ邸は地元の人々から幽霊屋敷と呼ばれていた。ある日を境に当主のベネディクトを含め、屋敷にいた全ての人が姿を消したからだ。その後、ベネディクトについて尋ねる謎の東洋人が現れるが、彼もまた姿を消す。その記憶が忘れられた頃、屋敷に出かけた三人の子供のうち、二人が死体で発見され、ひとりが失踪する事件が起きる。その事件をきっかけに、様々な人がこの町を訪れるようになった。事件の調査にやってきた女性記者のモーガン、モーガンに館への同行を依頼されたディレクターのブラックウッドや自称霊能者のオーガスト、失踪した少女の捜索を依頼された探偵アレックス、自分の機械の力を証明したいビンセント、失踪した恋人を追ってやってきたジョアンナらは、館を調査するなかで様々な怪異に遭遇することになるのだった。

ベネディクトと聞くと、カンバーバッチかウェザートップしか思いつかない、というくらい、この作品が好きだったりします。

どのような順番で発売されていったのか、細かい経緯は把握していません（どうやらパソコン版のゲームが最初ようです）、小説は角川スニーカー文庫から発売され、ゲームはパソコンではPC-88からmsx、X68000で、他にもPCエンジン版やSFCなどでも発売されました。私はPCエンジン版に触れてから小説を読み、その後、縁あってPC-88版もプレイしました。

小説は「アイの物語」などで有名な山本弘さんがノベライズを担当されています。クトゥルー神話の世界観が色濃く、私はこの作品がきっかけでクトゥルー神話の世界観を活かした作品に引きつけられるようになったのですが、その後で読んだラブクラフトの小説にはあまり魅了されなかったのも、この本を読んでいなかったら縁のない世界観だったかもしれません。「視る」という霊能力の概念や、物語の後半の舞台となるラプラスの支配する世界の設定などは、当時のみならず、今でも読む価値のある斬新な設定ではないかなと思っています。ちなみに旧版と新版があり、旧版では挿絵を結城信輝さんが（たぶん、「クロノ・クロス」のキャラデザインやOVA版「ロードス島戦記」の総作画監督の人と同じ人だと思うのですが、かなり絵のタッチが違います）、新版では「パラケルススの魔剣」から挿絵を担当している弘司さんが描いています。

ゲーム版は媒体によって詳細は異なるのですが、基本的にはプレイヤーは館を訪れる者のひとりとなって、仲間やNPCの助けを借りて館の怪異に挑むという流れになっています。ただレベルを上げるだけでなく、訓練所でスキルを上げることによって強くなっていきます。探偵は銃や尋問、科学者は心霊機械や回復、霊能者は霊能力や心霊治療、ジャーナリストは写真撮影など、スキルは職業によって異なります。ジャーナリストは戦闘では役立たずですが、敵からお金が得られない本作では、心霊写真を売ることが資金を稼ぐ手段のひとつなので、外せない仲間の一人だったりします。

PC-88版はウィザードリィっぽい感じで、半端ない難しさが特徴です。私はクリアできませんでしたが、即死トラップがあるという話があったり、小説には登場しないエクストラダンジ

ョンのような存在もあったとか。昔の作品なのでグラフィックはお世辞にも良いとは言えず、PCエンジン版を先に遊んでいたのでもちよつとがっかりしたのを憶えています。

PCエンジン版はグラフィックの質が高く、ダンジョン内は音楽がなくて移動する足音だけが響くという演出になっていました。キャラの顔グラフィックはちよつと不気味な感じ。NPCのアレックス・クインの声は田中和実（「メタルギアソリッド3」のフィアー役など）、草壁健一郎は塩沢兼人、ナレーターは天本英世と、声優陣が豪華でした。小説版をもっとも忠実にゲーム化した作品ではないかと思ひます。おぼろげな記憶ですが、ウェザートップの館に入つてすぐに右か左の突き当りまで移動し、南の壁を向いて三回ぐらゐ調べると、HPとMPが999になる上に館やラプラス城の各階層にワープできるようになる、という裏技がありました。

SFC版はオリジナルストーリーになると雑誌に紹介されていたのに、いざ発売されてみると従来と同じ作品だった、というよくわからない感じの作品です。移動も3Dではなく、見下ろし型になっており、何があるかわからない場所を探索するという雰囲気を楽しむことはできなくなつてゐるのですが、随所で弘司さんの描いたグラフィックが登場するのが特徴です。PCエンジン版のラスボスはほとんど霊能力でしか対抗できない感じだったのですが、こちらだと探偵の銃攻撃の方が効いてゐたような記憶があります。

このシリーズには、その他にも「パラケルススの魔剣」という小説と、TRPGリプレイ集がいくつかあります。最新作の小説「アルケリンガの魔海」は期待してゐるのですが、残念ながら、まだ発売されてゐません。「ラプラスの魔」が発売された時期の漫画や小説などを思い出してみると、この当時はいかに幽霊やオカルトを題材にした作品が流行つてゐたかがわかります。テレビの心霊現象特集も今よりはるかに多かつたように思ひます。今はブームが去り、それほどでもない感じなので、こういう作品が人気を博するには少し難しい時代なのかもしれないな、などと勝手に思つてゐたのですが、最近になつておばけ屋敷が再び流行つてゐるという話を聞いたり、「クトゥルーの呼び声」のカードゲームが話題になつたりしてゐるので、もしかしたらブームが再燃する可能性もあるかもしれません。

ちなみに、「パラケルススの魔剣」もPC-98でゲーム化されたのですが、こちらは個人的にはちよつと残念な出来のRPGでした。霊能者やディレッタントの使える霊能力や魔術の数は増えているのですが、ストーリーの流れ上、主役は霊能力系職業よりも大口径の銃が使える職業の方が有利だつたりと（SFC版の「ラプラスの魔」のシステムはこちらに近いのかもしれませんが）、あまりゴーストハンターシリーズの名にふさわしいホラーゲームとは思ひえなかつたのです（ちなみに、3DOの「黒き死の仮面」という作品もあるのですが、こちらは未プレイです）。

小説は探せば手に入るとは思ひうのですが、ゲームはちよつと難しいかもしれません（ソフトが見つかつては本体の問題があるので）。ただ、以前にも紹介したEGGの方で販売されてゐた記憶があるので（PC-88版は確実ですが、現在も販売されてゐるかどうかはわかりません）、もし興味を持たれた方がいらつしゃつたら、こちらをチェックしてみて下さい。

デクスター シーズン1～8（ドラマ）

朝起きて、食事をして、身支度を整えて、仕事に行く。そんな日常の風景をここまで不穏な感じに仕上げたオープニングは今までに観たことがなかったように思います。この一分にも満たない映像を何度も観ているうちに、演出の力というものについて、より意識を向けるようになったような気がします。

主人公デクスター・モーガンはマイアミ警察の血液分析官でありながら、実は殺人鬼という裏の顔を持っています。彼は幼い頃のある経験がきっかけとなって、若い頃から殺人への衝動が抑えられずにいたのですが、それを知った養父で警官のハリーは、彼に「掟」を教えることで彼を無秩序な殺人者にしないようにしました。そんなハリーの教えによって、デクスターは法の網を逃れている犯罪者のみを狩る殺人鬼となっています。同じ警察署に勤めている妹のデボラ、下品なジョークばかりを口にする同僚のマスカ、デクスターに怪しさを感じて毛嫌いしているドークス、気の優しいバティスタなどに囲まれながら、警察の仕事をこなしつつ、自分の欲求を満たすため、今日も獲物を捜すのです。

殺人鬼、という一般的には受け入れがたい存在が主役なので、ドラマの空気は重々しい部分も少なくないのですが、マイアミという場所が生み出す陽気な雰囲気や、随所に散りばめられたコミカルさによって、陰鬱には仕上がっていません。また、各シーズンごとに特徴的な殺人鬼がデクスターと対峙する存在として登場し、物語が展開していくのですが、それだけではなく、デクスターの孤独や周囲の人物との関わりについてのとまどい、ハリーの掟に対してどう向きあうか、というデクスターの感情が大きなテーマとなっていて、それがこのドラマを単なる殺人鬼が主人公のサスペンスドラマとは違う作品にしています。構成や展開も見事で、他のドラマよりも平均的に一話の構成時間が長いのに（他のサスペンスドラマは約43分ぐらいなのですが、この作品は平均で約55分ぐらい）気がついたら終わりだった、ということもしばしばでした。

常に綱渡りのような人生を送っているデクスターですが、ファイナルシーズンでは最後に大きな決断を下します。それは、他人への共感や思いやりの感情を持つことができないサイコパスの一人であるはずのデクスターが、彼らとは違う存在であることを示した選択だと思います。

過激な描写が少なくないので確実に観る人を選ぶ作品なのですが、一度は目を通して見ていただきたい作品です。もしよかったら、ご覧になってみてください。

ダーク・ウォーター ～奪われた水の真実～（映画）

この映画を紹介するのはとても勇気がいります。なぜなら、英語wikiによれば「北米での興行成績が5750ドル」という信じられない数字が書かれている作品だからです。でも個人的な印象としては、そんなに悪くない映画だと思っています。なので、紹介してみることにしました。

クリアベックという会社がエクアドルの水道事業に携わり、浄水施設を築いたが、その浄水施設に問題が生じ、チフスが蔓延した。クリアベック社はその事実を隠蔽するため、エクアドルの将軍アギーラに依頼する。アギーラは問題を公表しようとする活動家フランシスコ・フランシスを追い、チフスの感染者を虐殺し、タイカの町は混乱を極めていたが、その事実は世界の注目を集めてはいなかった。

クリアベック社の主要株主であるモーガン・スウィントンはエクアドルからやってきた青年の自殺を目にし、衝撃を受ける。青年の残した音声データを聴いてエクアドルの問題を知り、社長でもある兄ブルースを追求するが、冷たくあしらわれる。それでもモーガンはどうにかせずにはいられず、独断で目的を果たそうとする。そのためには事件の真相を知るフランシスをアメリカに連れて来なければならなかった。相談相手に調査員として最適だと教えられたのが、元CIA局員のジャック・ベゴジアンだった。

ジャックは田舎で妻子と暮らし、世の中の真実について語る深夜番組のラジオパーソナリティをしていた。モーガンから依頼を持ち込まれた当初は難色を示していたが、救出対象がフランシスだと聞いたジャックは依頼を受ける。ジャックはCIA局員として働いていた時にフランシスを陥れたことがあり、負い目を抱いていたからだった。

そのモーガンの動きは全て、ブルースへ筒抜けになっていた。ブルースの相談役コールダーはモーガンの動きを警戒し、裏の仕事を請け負うトールに盗聴やハッキングを指示していたからだった。コールダーはブルースに必要な手を打つべきだと説得する。そしてアギーラに仕事を速めるように指示し、それが上手く行かなかったことを知ると、今度はトールに、ジャックとフランシス、そしてモーガンの殺害を指示するのだった。

「オーシャンズ13」以来、しばらく映画で名前を見ることもなく、授賞式やボクシングの試合の観客としてしか顔を見る機会のなかったアンディ・ガルシアが久しぶりに主演していた映画だったので、ちょっと気になって観てみたのですが、派手な展開やアクションに頼ることなく、大企業の利益優先の商業活動がもたらす問題を上手く映画に取り入れた大人のドラマに仕上がっています。ちなみにアンディ・ガルシアは製作総指揮としても作品に関わっています。活動家フランシスコ・フランシスを演じているのはフォレスト・ウィテカー。彼も私の大好きな俳優のひとりですが、この映画でも、落ち着いているが意志の強さを感じさせる演技を見せてくれます。

過去の仕事に負い目を感じている元CIA局員という設定もとてもいいなと思いました。アメリカの娯楽作品ではたびたび英雄化されたCIAが登場するのですが、ティム・ワイナーの「C

「I A 秘録」を読んでからそういう設定の作品を無邪気に楽しめなくなってしまったので、過去に負い目を持っているが、それでも世界をより良い方向にしたいという願望を持っているという人物像の方が受け入れやすかったのです（こういう設定はアメリカではあまり好まれないのかもしれませんが。ちなみにイギリスの諜報系のドラマだと、C I A はなにかにつけて問題に我が物顔で首を突っ込んでくる迷惑な存在として描かれていることが少なくないです）。

大企業の商業活動が地元住民に様々な弊害を引き起こすという話も、今までにいくつか耳にしたり読んでいたので、題材としてもありえない話とは感じなかったです。水源地となる土地を、将来、水の所有権を主張することを計算に入れて海外の資産家が購入しようとする話や、製薬会社がアマゾンの植物からとれる物質の特許申請したことによって地元の人々が使えなくなったという話は新聞でも書かれていましたし、以前に紹介したコナー・ウッドマンの書いた「Unfair Trade」では、先進国の大企業の商業活動が南米やアフリカの国々にもたらしている影響や、フェアトレードビジネスの実情について書かれています。例えばカメルーンでは、政府が海外の企業と沖合の漁業権を取引してしまったので、地元の漁師は浅瀬で取れる魚しか獲る事が許されておらず、その中でも価値の高い魚は観光客用として売り、地元民は豊富な資源があるにも関わらず、モロッコの砂漠を越えてやってくる干し魚を食べている、など、読むだけで鬱症状になりそうな事実が列挙されています（その中でもなんとか良い状況を作り出そうとしている人々の活動も書かれているのが、せめてもの救いです）。

観終わった後に気分がすっきりするような映画ではありませんが、「そんなに興行成績が少ないなんて、どんなひどい映画なんだ？」という怖いもの見たさでも構いませんので、もしよろしければ、ご覧になってみてはいかがでしょうか。

たまたまネットの検索項目の上位にお名前が挙がっていたので、もしやと嫌な予感を抱きつつ見てみたら、声優の矢田耕司さんの訃報がニュースとなっていました。主役級の役で声を耳にする機会は少なかったのですが、常にナレーションや海外の方のコメントの吹き替えなどでご活躍されていて、ここ最近でもNHKの「モタさんの言葉」で穏やかな紳士的な声を聴くことができていたので、そのたびに和やかな気持ちにさせてもらっていました。また、かなりのご高齢であるはずなのにまったく声に衰えを感じないことに敬服しながらも、お元気かどうか案じていました。

そんな私的な感覚から、いずれは紹介しようと思っていたのですが、矢田耕司さんの名前を憶えるきっかけになった作品を紹介しようと思います。

南総里見八犬伝から触発されたい（そういう話をどこかで読んだ記憶があります）この作品は二部構成の作品になっています。上巻では光の御子を守る勇士を選ぶ八玉によって選ばれた八人の男女の数奇な運命と、彼らが集まって闇の勢力を撃退するまでが描かれています。下巻ではその後の八玉の勇士の物語と、とある理由から過去の世界に飛ばされ、今までの因縁に決着をつけるまでが描かれています。

敵である闇の軍勢との戦いが描かれているだけでなく、八玉の勇士同士も密接に運命が関わりあっており、たとえば針使いのリリアン・ランスロットは占い師の村で断片的に見た情報から海賊のザン・ハヤテを親の仇だと思っているし（実際は短剣を抜こうとしているのだが、刺しているように見えた）、魔術師のアレック・ヘストンは長年のライバルと戦って倒すのですが、そのライバルの孫クーク・ロー・タムが八玉の勇士の一人で、しかもクークは天涯孤独の身になってしまっていたので、アレックは自分が祖父だと思われた時に誤解を解くことができず、クークを可愛がりながらも罪悪感を抱いています。このような心情の絡みがストーリーに一層の面白味を加えています。

ゲームはまずはパソコンで発売され、それから家庭用ゲーム機でも発売されました。ジャンルとしてはコマンド式RPGなのですが、随所に斬新さが見られました。敵の表示は個体だけでなく集団の場合もあって（たとえば看守1000人という表示になっていたりして）、ダメージを与えるとちゃんと数が減っていき、集団を蹴散らしていく感じが表現されていました。体力は数値の表示もありますが、普段は玉によって表現されていて、最大値では輝いているのですが量が少なくなるにつれて輝きを失い、砕けていきます。技もレベルを上げて習得するのではなく、勇士に応じた本を買って装備することで読んで覚えるという現在のスキルシステムの元祖のような仕組みになっており、思い返して改めてその新しさを意識することもしばしばです。

上巻（または「八玉の勇士伝説」）の戦闘システムは機種ごとにあまり変化はないのですが、下巻（または「闇皇帝の逆襲」）の方は、PCエンジン版は上巻とほとんど同じなのですが、パソコン版（少なくともMSX版は）オートバトルのようになっていて、PCエンジン版を先に遊んだことのある私としては、けっこうわかりにくくて不便でした。

PCエンジン版のCD-ROMシステムは不意に止まってしまうことがあるという欠点もあったのですが、その代わり、アニメーションが追加されています。そして声優陣は、八玉の勇士に、草尾毅、富沢美智恵、皆口裕子、宮内幸平、郷里大輔、渡辺菜生子、塩沢兼人、矢田耕司、その他にも、曽我部和恭、藤田淑子、屋良有作、難波圭一、島田敏など（全て敬称略）、かなり豪華で、しかも上手い人ばかりです。この当時のPCエンジンのゲームの演技は最近のゲームの演技よりも上手いものが多いと思っているのですが、この作品の演技もそのひとつではないかと思っています。

パソコン版の方はプロジェクトEGGで遊ぶことができますし、PCエンジン版はちょっと難しいかもしれませんが中古ソフトショップなどで見つけれられると思います。興味のある方は、よろしければ一度遊んでみて下さい。

ここ最近は特に自分にとって思い出深い存在になっていた声優さんが亡くなることが多く、その知らせを見聞きするたびにとても残念な気持ちになります。一方で亡くなった後も声を聴く機会があると、なんだかまだご存命のような気がしてしまったりもするのですが。

主に脇役として活躍されている方や舞台上で活躍されている俳優さんも同じなのですが、演技が上手いのに世間にその名をきっちりと知られていない声優さんもけっこう多いように思います（もちろん、業界内では有名なのでしょうが）。永井一郎さんや内海賢二さんのようにきちんと紹介される場合は稀で、今回の矢田耕司さんにしても、きっかけに気づかなければ見逃していたと思います。その実力に見合った評価がなされていないのはとても残念だなと、このような知らせを聞くたびに寂しくなってしまうのです。

物語の舞台となる高校の学長は問題を改善できていないため、今限りで学長としての職を解かれそうになっていた。素行に様々な問題を抱えていたり、将来をともに考えない生徒。子供への処分で教師を糾弾しにやって来たり、無理難題を突き付けながら、親としての責務は果たさず、保護者会には顔を出さない保護者。彼らと立ち向かうことで様々な重圧を受けていた教師たちは毎日ストレスにさらされており、なかには精神的に追い詰められて教職を辞してしまう者もいた。

古典文学を担当する教師バースは臨時教員としてこの高校へ赴任する。彼は問題のある学校に代理で赴く事が多く、厄介な生徒たちの扱いに慣れていた。彼は心理的に距離を置き、深く関わらない接し方で、仕事としての教職を務めていた。そして仕事が終わると介護施設の祖父を見舞い、帰る日々。その帰りのバスの中で街娼まがいのことをしていた少女エリカと出会う。最初は相手にしないが、ある日、彼女の様子を見かねて家に泊めることに。バースは彼女とも一定の距離を置き、ルールを定めて生活していたが、次第にエリカはバースを慕うようになり、バースも彼女に対する心の距離を縮めていく。

一方、有名大学に進学できるほどの学力を持ちながらも芸術家になることを憧れているが、家族からは理解されず、学校でも孤立しているメレディスは、バースに救いを求めようとするが、彼は拒絶する。同僚の女性教師マディソンはその様子を見て誤解してバースを咎めるが、その詰問は彼が周囲に隠していた過去の記憶に触れたため、彼は激怒する。この口論や祖父の死によって高まった精神的な緊張を振り払おうとするかのように、バースはエリカとの関係性を続けることを拒み、彼女を社会福祉局に委ねてしまう。

バースの最後の勤務となる日、絶望感を深めていたメレディスは彼女なりのやり方で自殺を行う。それによってバースは深く打ちのめされてしまうのだった。

アメリカの教育問題の全てを描いているとは言えないかもしれないけれど、きっとどこかに存在するであろう、荒廃して誰もが疲れ切ってしまった教育現場を切り取って描いたらこんな感じになんだろうなと感じる、リアルさに溢れた作品です。映画としては文句なしに引きつけられる作品で、最後のシーンが終わるまで画面に釘づけになって観ていました。特に「アッシャー家の崩壊」の朗読と荒廃した学校の風景で教育現場の崩壊を表現したと思われるラストシーンはとても印象的で、がっつんと強い衝撃を受けるというわけではないけれど、腹の底が冷えるような寒気を覚えました。

個人的には（同じように感じている人もいるかもしれませんが）教師という職業に特別な意識は持っていません。今でも年賀状をやりとりしている先生はいますし、この先生は尊敬できるなと思う方もいましたが、逆にがっかりするような教師にも出会ってきました。就くのが簡単だったから先生になったと、普通に生徒の前で言うってしまうほどのがっかりな人もいましたが、教師に限らず、どこの世界も同じようなもので、いい人もいればそうでない人もいる、というだけのことでしょう。

作中で「親になるための技術を必須科目にすべきだ」というようなセリフがありましたが、イマイチな先生にも出会ってきた身としては、「いかに教えていくか」という技術や他にも教師として必要なスキルを、（学校の教師に限らず）物を教える側も常に学び続ける必要があるのではないかと思ってしまいます。主役として登場するバースは、生徒たちとは一定の距離を置いていましたが、そのような技術に長けていたので、少なくとも、（メレディスを除いて）自分の担当していたクラスに何らかの影響を与えることには成功していたように思います。

この映画がちょっと難しいなと感じたのは、単純に生徒やモンスター・ペアレントの影響による学校の崩壊を描いているわけではなく、そのような教師の資質についても触れているような気がしたけど、上手くつかめなかったからです。初見で通して観て、このレビューを書こうと思った時に細かい部分の確認のためにもう一度見てみたのですが、それでもまだ、セリフやシーンの意図が完全には把握できていない部分があります。親の無関心が問題の原因の一つだというメッセージは比較的わかりやすい形で提示されているのですが、それだけではなく、登場人物の細かな仕草や個々の教師の孤立や無関心にも何らかの意味が含まれているような気がするのです（私の誤読という可能性も大いにあります）。それから、ラストシーン以外にも学校をアッシャー家と同一視しているような箇所もあるので、「アッシャー家の崩壊」も読んでおくと、もっと深い部分でこの作品を理解できるかもしれません。

主役のバースを演じるのは『戦場のピアニスト』で脚光を浴びたエイドリアン・ブロディで、本作では製作総指揮も兼任しています。他にもルーシー・リュウ（ドラマ『エレメンタリー』ワトソン役）や、ウィリアム・ピーターセン（ドラマ『CSI：ラスベガス』グリッソム役）、ジェームズ・カーン（映画『ゴッドファーザー』ソニー役）、ブライアン・克蘭ストン（ドラマ『Breaking Bad』ウォルター役）など、豪華な顔ぶれが揃っています。

観て楽しくなるような映画ではないのですが、一度は観る価値のある作品ではないかと思います。もしよろしければ、ご覧になってみてください。

ちなみに、映画の中でバースが言っていた「かつては全ての教師が改革できると信じていた」という言葉を鵜呑みにするほど純粋ではないのですが、それでも実際に希望を持って教育実習生としてやってきていた方もいたので、そういう人には、どうか今も希望を失わずにどこかで頑張ってくれていればいいなと、この映画を観終わってから思い出したりしました。

Ghost Busters : The Video Game（海外版）

このゲームの存在はけっこう前から知っていたのですが、今まではあまり手を出す気になれませんでした。アメリカでも版權もののゲームはけっこう外れが多いし、このゲームを販売しているアタリ社には、期待していた「Alone in the dark」の新作で痛い目を見せられた過去があるので、これも同じような出来なのではないかと思っていたのです。ですがつい最近、このゲームの実況動画を見て、ボイスキャストは本人達が担当していて、脚本も映画と同じようにダン・エイクロイドとハロルド・ライミスが担当していることを知りました。ハロルド・ライミスの追悼記事の記憶はまだ新しく、とても残念に思っていたこともあり、これはやってみなくてはと思い、遊んでみることにしたのです。

物語は「ゴーストバスターズ2」から二年後、主人公がゴーストバスターズの新人兼（扱いに失敗すればニュージャージーまで吹っ飛ばされる）新型装置実験技師として雇われるところから始まります。装置の扱い方を学んでいたところ、ちょっとしたミスからゴーストが逃げ出してしまい、その後を追ってセジウィックホテルへと向かうことになります。単純な仕事のはずだったのに、なぜか様々なゴーストが現れ、やっと捕獲したかと思いきや、あのマシュマロマンが現れる始末。なんとか撃退し、その後、セジウィックホテルで出会ったイリッサという女性から話を聞き、幽霊の活動が活発化した理由を探っていくうちに、事件にはゴーザの力が関わっており、イヴォ・シャンドア（映画の一作目に登場）がゴーザの力を増幅する狙いで設計した建物が他にも存在していたことが明らかになっていきます。

はっきり言って、予想以上の出来でした。ストーリーはしっかりと今までの映画の内容を踏まえつつも、新しい展開が作られていて、それがゲームという媒体にちゃんと合ったものになっています。レイ（ダン・エイクロイド）が幽霊に憑りつかれたり、ベンクマン（ビル・マーレイ）がスライムまみれになるなどのお約束もきちんと踏襲されているし、恐怖演出がありながらユーモアも含まれていて、ゴーストバスターズの面々の軽妙な掛け合いなども楽しむことができます。ゲームシステムは作品の雰囲気とよく合っているし、様々な小ネタ（捕獲した幽霊のストーリー、ゴーストバスターズの会社内のヴィーゴの肖像画や留守電メッセージ、呪われた品々など）も楽しいです。

とはいえ、ちょっとだけ問題もあります。この作品はオートセーブシステムなのですが、そこがちょっと完璧とは言えないのです。たとえばステージクリア後、次のステージに進む前にゴーストバスターズの会社内でちょっとしたイベントを見る部分があるのですが、この部分はオートセーブシステムが対応しておらず、ここで終了してから再開すると、次のステージの最初から始まるため、イベントを見逃してしまいます（このおかげで2面が始まる前のイベントを見逃してしまいました）。

また、装備のアップデートのために使うお金のデータは随時記録されているのですが、装備の購入に関する情報はオートセーブの際に記録されるようになっているようです。そのため、なかなか敵に勝てずに進めないという時にお試しで何か装置をアップグレードし、その状態でやられてしまうと、再開した時にお金は減っているのに装備を購入していないことになっている、とい

う厳しい状態に陥ってしまうことがあります。これはけっこうショックなので、装置のアップグレードを行う際は、敵を倒して次の場所に移動する時（次の敵が出現してオートセーブされる前）に購入することをお勧めします（ちなみに私がプレイしたのはPS3版です）。

この点を除けば特に不満はなく、わくわくしながらゴーストバスターズの新作をゲームという形式で楽しめました。メイキングの中でダン・エイクロイドが実質的な三作目だと語っているのも頷ける内容です（ゲーム内のメイキングには字幕はついていないのですが、ゴーストバスターズ一作目のブルーレイにも同じコンテンツが収録されているので、興味のある方はご覧になってみて下さい）。

プレイ時間は難易度プロフェッショナルで12時間ぐらいだったと思います。海外ソフトを扱う中古ソフト店などで見つかるはずだと思いますので、興味のある方はどこかで見つけたらチェックしてみてください。

セシル・コルベルの歌声は好みだったので新作も輸入盤のCDを手に入れて聴いていたのですが、肝心のアニメの方はこの間テレビで放送されるまで観たことがありませんでした。どんな感じなのだろうかと考えて観てみたら、ちょっと違和感を抱いてしまう部分があったので、原作の方ではどうなっているのだろうと読んでみようと思ったのです。

翻訳版はちょっと訳が古いかもしれないと思ったので、探してみたところ、このシリーズ全てが一冊に収録された英語版があったので、それを買ってちまちまと読んでいるところです（現在は二作目を読み終えたところです）。以下の感想は拙い英語力で理解できる部分で判断して書いているので、実際とずれがあるかもしれないことをお断りしておきます。

読み始めてすぐに気づくのは、ボロワーズという存在のユニークさです。原作ではケイトという少女と一緒に暮らしていたメイ夫人に「ちゃんとしまっておいたはずの編み棒が無くなっている」という話をしたことから、メイ夫人が弟から聞いた小さな人々[ボロワーズ]の話をし、というシーンから始まります。するりと物語の中に引き込まれる導入部の書き方の見事さに加えて、誰もが一度は感じたことのある（はずだと思うのですが）経験から、このようなキャラクターを生み出した想像力に驚かされました（英語版には前書きがあって、そこにはどのようにボロワーズについて想像していったのかが書かれています）。

作者はこの想像力を駆使して、アリエッティ達がどんな物を借りて、それをどのように使って生活しているかをしっかりと描いています。包帯用の布をタオルにしていたり、赤いインクの吸い取り紙を絨毯にしていたりと、自分たちが使っていた日用品が意外な形で使われていることを当時の読者は面白いと感じただろうし、この面白さは作品が書かれてからすでに六十年ほど経っている今でも失われていないと思います。また、アリエッティ達目から見た人間の世界の描写は違った世界を体験しているような面白さがあります。物語の設定や展開も論理的で、登場人物の行動やその動機に疑問を感じて読む手が止まってしまうような部分はありませんでした（映画は時間の制限などがあるし、日本に舞台を変化させているので致し方ないとは思いますが.....）。

ちなみに二作目ではアリエッティ達が外の世界で生活する姿が描かれています。映画に登場する弓を持った小人スピラーはこの作品から登場します。すでにボロワーズシリーズの五作品は翻訳されていて、お近くの図書館などでも借りることができるはずなので、気になった方には年齢に関係なく、ぜひ一度読んでみていただければと思います。映画を観た方は二作目から読み始めても話についていけるとは思いますが（前作で何があったかも最初に触れられているので）、お時間がありましたら、一作目から読まれることをお勧めします。

余談ですが、本の販売において海外が日本よりも優れているなと思うのは、古い作品がとても安く買える場合がある、という点です。たとえばシャーロック・ホームズやシェークスピアの全ての作品などがハードカバーの本一冊よりも安い値段で手に入ったりします（電子書籍ではなく、紙に印刷された本で）。

もちろん欠点はあって、海外商品は国内のものに比べると微妙なものに当たる確率が少し高くて、本では文字の印刷が薄かったり、少し消えていたり、製本が雑だったり、落丁があったり（ジェフリー・アーチャーの「アダムとケイン」三十周年版を買ったら同じページが別の場所にもありました）、ゲームでは開ける前から説明書が傷ついていることなどもあるのですが（そんな時は「海外クオリティだから仕方ないか」と苦笑いするのが常なのですが）、それでもお手頃な値段でたくさんの作品に触れられるというのは読む機会が増えるきっかけにもなるのではないかと思います。

日本の作家の全集もそんな感じになってくれれば気軽に買えるんじゃないかなと思う時があるのですが（教科書で名前と顔写真しか目にしない作家の全作品や源氏物語や平家物語などの全巻なども、一冊になっていて1500円ぐらいで買えるなら、多少、言葉が難しくても買いたくなると思うのですが）、どうでしょう？

オッド・トーマス 死神と奇妙な救世主（映画）

オッド・トーマスは、その名（Odd）が示すように奇妙な能力を持っていた。他の人が見えないものを見る能力を持つ彼は、死者から助けを求められると協力せずにはいられず、つつい事件に関わってしまうので、周囲からは変わった人間だと思われてしまうことが多い。ただし、この町の警察署長はオッドの持つ能力に理解を示していて、彼が事件に関わったきっかけを考えて口裏を合わせてくれたり、要請に応じて協力してくれる関係にあった。子供の頃から運命を感じて将来を誓いあったストーミー・ルウェリンも理解者のひとりだった。

変わった事態に遭遇することが多いオッドは精神の均衡を保つために生活を限りなくシンプルなものにしており、普段は町の食堂でコックをしていた。ある日、食堂に来た客に、殺戮や惨劇が起こる気配を感じ取って事件に関わる人物に集まることを好む悪霊ボダッハが憑りついているのを目にする。オッドはその人物を調べていくうちに、町で大量殺戮事件を起こそうとしている者がいることを知り、最悪の事態を防ごうと奔走するのだった。

主人公オッド・トーマスの適度な軽さを持った語りや、（時にはブラック風味を含んだ）コメディ要素によって、暗くなりがちな幽霊や死という題材が重すぎるものにならずに、すんなりと映画の世界観が受け入れられるようになっています。それでいて、ちゃんとホラーサスペンスとしての要素も備えていて、悪霊ボダッハの描写は鳥肌が立ってしまうぐらいの不気味さが伝わってきます。後半はエンターテインメント映画にふさわしく、息もつかせぬ展開が繰り広げられます。

ボダッハの存在がリアルに感じられるのは、CG効果の上手さももちろんですが、主役のアントン・イエルチン[リメイク版スター・トレックのチェコフ役がいちばん有名だと思います]の演技力のおかげであることも間違いないでしょう。彼の演技によってボダッハがよりいっそう真実味のある存在として感じられるようになっています。署長役のウィレム・デフォー[スピード2の悪役から日本でおなじみの俳優さんです]もいい味を出しているし、オッドの恋人ストーミー役のアディソン・ティムリンも風変わりだけど魅力的な女性を演じています。

原作はディーン・クーンツのベストセラーで、同名主人公のオッドシリーズが海外では六作ほどすでに発売されており、そのうち四作がすでに日本語に翻訳されています。この映画が面白かったので期待して二作目から読んでみたのですが.....、ちょっと残念なことに、私には合わない作品でした。先に小説の方を読んでいたら、映画は観ていただろうかと考えるとちょっと難しいのですが、これはあくまで個人的な好みの問題だと思います。小説と映画では様々な細部に違いがあるので、逆に小説の方が好きな人にとっては映画の方が好みではない場合もあるかもしれません。

たとえば映画版ではエルビス・プレスリーの幽霊は出てこないし（ファンサービスの意味も含んでいるのか、エルビスのパネルは登場します）、恋人ストーミーには重い過去があるのですが触れられていないし、オッドと両親の関係についてもさらっと流すような形でしか描かれていません。ただこのような取捨選択のおかげで、映画の展開は物語の流れに必要な部分こそぎ落

とされていて、軽妙に仕上がっているなので、個人的には原作のおいしいところを集めて上手くアレンジしていると感じました。

基本的には軽いノリを含んだエンターテインメント映画なのですが、ちょっときつい描写もあるので、小さな子供にはあまり向かないかもしれません。あと、虫が大量に登場するシーンもあるので、お食事中的鑑賞は控えていただければと思います。幽霊や悪霊が登場する映画が好きな人にはもちろん、そうでない方にも楽しめる作品です。気になった方は、よろしければいちどご覧になってみてください。

ラスト・ダイヤモンド 華麗なる罣（映画）

泥棒のシモンは、酔って部屋を出てしまった客を装ってホテルの部屋に侵入して金庫の中身を盗むという仕事を終えた後、仲間のアルベールから呪いのダイヤモンド「フロレンティン」を盗み出す仕事をもちかけられる。出所したばかりで保護観察中だったシモンは大掛かりな仕事はできないと難色を示すが、アルベールの説得によって仕事に加わることに。

アルベールが紹介した人物が手に入れていた情報から、オークション会場のダイヤの警備は厳重で、さらに保管ケースを開けるには特別な二本の鍵が必要なことがわかっていた。鍵には特殊な仕掛けが施されていて合鍵を作る事は不可能なため、本物を手に入れるしかない。片方の鍵は当日に警備主任から奪う予定だったが、もう一方の鍵はオークションの主催者が保管しているため、気づかれないように事前に入手しておかなければならなかった。そこでオークションの主催者に近づき、偽物と本物をすり替えるという作戦が開始される。

オークションの主催者だった女性が亡くなったため、その娘ジュリアがオークションを引き継いでいたのだが、経験のないジュリアに対して周囲の態度は冷たかった。シモンは母親の相談を受けていた警備の専門家としてジュリアに接触し、情報を提供。その情報によってジュリアは周囲の評価を変えることができたため、ジュリアはシモンを信頼していく。シモンは彼女の部屋に入り込むことに成功し、偽物の作製に必要な鍵の型を取り始めるのだが、その最中に不測の事態が起こり、鍵型が見つかりそうになってしまう。それを避けるためにとった手段が、ジュリアだけでなく、内心ひかれつつあったシモンの心の距離をも縮めてしまう。シモンはジュリアに対して複雑な感情を抱きつつも、仕事をこなしていく。

そしてオークション当日、ダイヤを盗むことに成功し、仲間たちは大喜びする一方で、シモンだけがその喧騒から離れていると……。

いわくつきのダイヤモンド、ささいなミスや偶然から生じるアクシデント、欺く相手との禁断の恋など、お約束とも言えるおなじみのシチュエーションがちらほらと見受けられるので、またかと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが（私も観る前はそう感じていた一人でした）、この作品は私にとって、ここ最近観たなかでは最も完成度の高い（詐欺や窃盗を扱った）犯罪映画でした。犯罪計画は緻密に組み立てられているし、アクシデントの起きる原因にもおかしな所はなく、その対処もプロにふさわしく、そつのない動きで行われています。犯罪映画で交わされがちな下品な会話もなく（記憶に残っている限りでは、ですが）、スタイリッシュで上質な映画に仕上がっています。

シモン演じるイヴァン・アタルのことはほとんど知らなくて、この映画で始めて意識するようになったのですが、渋い魅力と演技力の両方を備えた俳優だと思います。仕事から離れて保護観察官と会ったりする時のだらしなくてスーツなんて絶対に似合わなさそうな姿と、警備の専門家を装っている時のきっちりとした姿の落差を演じ分けていて、プロの犯罪者としてのシモンをしっかりと表現していました。

誰に薦めてもそれほど問題はない映画だとは思いますが、犯罪映画が好きな人や興味を持た

れた方は、一度ごらんになってみてはいかがでしょうか。ちなみに宣伝ではないのですが、この映画がDVDで発売されるのは十二月頃なので、ふだんDVDを借りたり買ったりしてご覧になっている方はもう少しお待ちください。

マッド MUD（映画）

二人の少年、エリスとネックボーンは島の木の上でボートを見つける。ボートを自分たちの物にしようと思ったが、そこにはすでにマッドという風変わりな男が住んでいた。マッドは自分にボートの所有権があると言い、ボートと引き換えに食べ物を頼む。エリスは承諾し、缶詰を持っていった時、ジュニパーという女性の話を聞く。その後、父親の仕事に同行して町に行った時、話で聞いていたのと同じタトゥーをしている女性を見かける。そのことをマッドに話すと、興奮した様子を見せる。

翌日、警察の検問に遭遇し、マッドが逃亡者であることを知ったエリスだったが、ジュニパーへの愛を語るマッドは悪人ではないと考え、彼に知らせに行く。マッドは自分が追われていることをすでに知っており、ジュニパーと逃げるためにボートを修理しようとしていた。エリスが追われている理由を尋ねると、ジュニパーを裏切って子供を産めない体にした男を殺してしまったからだと語る。それを聞いたエリスはボートを修理するために必要な物を集めてほしいという彼の頼みを聞く。だが、警察だけでなく、マッドに殺された男の兄弟も復讐のために町にやってくるのだった。

この映画はあらすじを細かく書いて紹介しても、あまり面白いとは思われないんじゃないかな、という気がします。というのも、めまぐるしい展開の変化ではなく、さりげないセリフや登場人物の感情の変化など、あらすじには書きにくい部分にこの映画の面白さが込められていると思うからです。主人公のエリスが様々な出来事を経験して傷ついたり学んだりする姿と、エリスの純粹さに触れてマッドが変化する様子がじっくりと描かれているので、人間ドラマを中心に据えた作品を楽しめる人なら、この映画も面白いと感じていただけるはずです。

キャストも私にとってはなかなか豪華でした。ジュニパーという女性に惚れこんでその面倒事を引き受け続けたあげく逃亡犯になってしまった男マッドをマシュー・マコノヒーが演じています。彼を知ったのは「評決のとき」がきっかけです。一時はB級アクション映画や恋愛映画によく出ていたようですが、最近では「ダラス・バイヤーズ・クラブ」で様々な賞を受け、ドラマ「True Detective」（こちらでも南部の男を演じています）でも注目されているので、ご存じの方も多いかと思います。

マッドが惚れこんだ女性ジュニパー役は「キューティ・ブロンド」シリーズでおなじみのリーズ・ウェザースプーン、主人公の向かいに住むトム・ブランケンシップはサム・シェパード、ほんの少ししか登場しない脇役ですが、ネックボーンの叔父ゲイレンはマイケル・シャノンが演じています（マイケル・シャノンが出演しているというだけでその映画をチェックしてしまうぐらい、好きな俳優の一人だったりします。「アイスマン」という実在した殺し屋を描いた映画もなかなか面白い映画でした）。

けっこう海外での評価は高めなのに日本ではあまり知られていない映画みたいなので、もっと多くの人に見ていただければと思っています。気になった方はよろしければ一度ご覧になってみて下さい。

スパイラル 危険な関係（映画）

ある出来事がきっかけとなって妻と性的な関係を持てないことに不満を抱いていた主人公が、出来心から浮気してしまったことで問題が生じ、それをなんとか取り繕おうとしてとった行動がさらに問題を生んで……、という泥沼系のブラックコメディです。

「植木鉢」や「腎臓」、「チーズの盛り合わせ」などが物語にかかわってくるというオープニングの予告は導入部としてけっこう面白いし、ストーリーの展開もちょっと間が抜けているけれどユニークだと思います。主人公の浮気がきっかけで人生の下り坂を転がり落ちていく、という展開の映画はけっこうありますが、この映画の主人公の場合は浮気が妻にばれないように取り繕おうとする行動があまり悪質ではないためか、主人公への好感度が下がり、観る気がそがれることもありますでした。

主人公をトビー・マグワイアが演じていることも、その印象を強くする理由のひとつになっていると思います。もちろん確かな演技力があってのことでしょうが、トビー・マグワイアの表情ってどこか善良さを感じさせるものがあって、腹に一物ある人間に見えないので、普段から悪いことを考えているわけではないけれど問題を回避しようとして魔が差してしまう弱い人間、というキャラクターに説得力を与えているような気がします。もし他の俳優だったら、そんなこと言ってるけど本当はそうなることを期待してたんじゃないの？ という腹黒さを感じてしまうかもしれません。なので、個人的には最適の配役ではないかと思います。

レイ・リオッタは最近脇役を演じることが多く、印象の薄い役や残念な役柄で登場することも少なくないのですが、この映画ではなかなかいい人物を演じています。主人公と（ケリー・ワシントン演じる）妻が浮気していることに気付いて金銭を要求した時はまたちょっとがっかりな感じの役なのかと思いましたが、その後にとった行動は、おっと思わせるものがありました。ローラ・モリーの誰からも疎まれてしまうような面倒な隣人ぶりも見事ですし、主人公の友人になるリンカーン役はドラマ「24」の最初の大統領役でおなじみのデニス・ヘイスバートが演じていますが、ちょっと顔が痩せてて、髭だらけの顔になっているので、だいぶ印象が違って見えしました。

この映画は現在のアメリカを舞台としていながらも、演出や話の展開にどこか昔話やおとぎ話のような雰囲気漂っている、そんな印象を受けました。とはいえ、明らかに子供向けの作品ではありませんし、後半にはアライグマが轢かれるシーンがあるので、そういうのが苦手な人にもおすすめてできません。好き嫌いの分かれる作品だと思いますが、気になった方はよろしければご覧になってみて下さい。

最近公開されたコリン・ファース主演の「デビルズ・ノット」という映画は、1990年代のアメリカで実際に起こった、三人の少年が殺害された事件を題材としています。当初は悪魔崇拝などの影響だと騒がれ、三人の若者が逮捕されたのですが、後に冤罪だと目されるようになり、様々な人が注目し、ドキュメンタリー映画が作られたり、本が書かれたりしています（「デビルズ・ノット」も原作本があります）。このドキュメンタリー映画も同じ事件を題材としていて、1993年当時の映像から始まり、三人が自由を得るまでが描かれています。

とはいえ、三人が無罪になったのかというと、そうではありません。むしろ法律的には有罪といえるのかもしれませんが。というのも、彼らが自由になれたのは無罪を勝ち取ったからではないからです。彼らは無罪を主張しながら有罪答弁をする「アルフォード・プリー」という司法取引を行うことで自由を得たそうなのですが、ちょっと私には理解しがたい仕組みです。弁護側としては三人の死刑の期日が迫っていたので苦肉の策だったそうです。逮捕された三人の内の一人は完全な無罪を勝ち取るまで闘い続けたいという気持ちを持っていたのですが、この司法取引は全員が応じなければならないものだったので、他の二人のことを考えて彼も応じることにしたと語っています。

このような事態をもたらした警察や検察の怠慢さや逸脱した手法についても詳しく描かれています。他にも冤罪に関するドキュメンタリーなどをご覧になったことのある方なら同じ思いを抱くかもしれませんが、冤罪を生み出す原因となった捜査の杜撰さや法律さえも無視した証拠の集め方には驚きを隠せなくなる一方で、有罪にするためにそのような手段をとった理由や心理は驚くほど共通していて、なおかつ陳腐なものです。

冤罪を描いたドキュメンタリーとしては悪くない作品だと思うのですが、ただ、真犯人を指摘しているような流れはちょっと気になるところです。この映画では三人の弁護を担当した弁護団が調査した内容などを紹介しつつ、殺害された少年の一人であるスティーブの継父が犯人である可能性が非常に高いという描き方をしています。映画を観ていると確かにこの人は限りなく黒に近い灰色のような人物だと思いますし、真犯人であるような気がしてくるのですが、そう決めつけるのも危険だと感じたからです。

この映画の中では同じ事件を扱った別のドキュメンタリー「パラダイス・ロスト」という作品のことが登場するのですが、その続編「パラダイス・ロスト2」の中では殺害された少年の一人、クリスの養父が犯人のように描かれていたことが紹介されます。当時、警察の捜査が彼に向けられていたとはいえ、まだ犯人として確定していかなかった彼を犯人のように描くのは危険だと、今ならすぐに判断できますが、この作品が公開された当時はどうだったのでしょうか。おそらくこの映画を観た人の多くは彼を犯人だと信じ、なかには過激な行動や非難を行う人もいたのではないのでしょうか。「パラダイス・ロスト2」を製作した人々は無実の罪で逮捕された三人の若者を助けたいという強い動機があったのかもしれませんが（他の動機もあるかもしれないので断定はできませんが）、その結果は、ウエストメンフィス警察が三人を有罪にするために行ったこととそれほど変わらないような気がします。そしてこの映画も同じ危険を冒している可能性がない

とは言い切れないと思うのです。

このような理由から当初はこの作品を紹介するつもりはなかったのですが、「デビルズ・ノット」の紹介をテレビで見て同じ事件を扱っていることに気づいたので、（「デビルズ・ノット」ではこの事件がどのように描かれているのかはまだわからないのですが）この映画も観ることで事件について多角的に見ることができるのではないかと思い、紹介させていただきました。

また、この映画では彼らを有罪だと判断した女性陪審員にもインタビューしているのですが、彼女の表情と言葉には色々と考えさせられました。日本でも裁判員裁判が行われるようになった今、彼女が抱いたであろう思いは他人事ではないのかもしれないと思うと、同じような立場になる時が来るまでには信頼できる司法になっていて欲しいと願わずにはいられませんでした。

観て気分の良くなるような作品ではありませんが、ある程度の距離を置いて観るなら、悪くはない作品だと思います。この作品に興味を持たれた方は、あるいは「デビルズ・ノット」を観て事件の方に興味を持たれた方は、ご覧になってみてはいかがでしょうか。

友情の翼（映画）

第二次世界大戦時、乗っていた戦闘機が撃墜されてアイルランドに不時着し、捕虜収容所に入れられた連合軍少佐とナチスドイツ軍の大尉が、価値観の違いやヒロインの女性を巡っての対立を経て、友情を築くまでを描いた映画です。

捕虜収容所を描いた映画はたくさんあるけれど、これはちょっと毛色の違う作品だと思います。まず、収容所の雰囲気はずいぶん違います。鉄条網で分けられてはいるけれど、ひとつの収容所の中にイギリス軍兵士とナチスドイツ軍兵士が収容されていて、しかも所長の方針により、捕虜には他で見られるような強制的な規則はほとんどなく（もちろん脱走は認められていませんが）、どちらの国の兵士も日帰りであれば外出が認められています。なので競馬場に行って賭けに興じたり、夜は酒場に行って酒を飲んだりしているのです。

実際にこんな雰囲気の収容所があったのかどうかまでは調べていないのでちょっとわかりませんが、アイルランドの方針に対してそんな馬鹿なと思われる方もいるかもしれませんが、映画で描かれている情報によれば、アイルランドは第二次世界大戦時は中立国で、どちらに対しても中立を保つという意味もあって、両国の兵士を捕虜としていたのだそうです。島の人々の中にはイギリス人に対して厳しい見方をしている人も多く、なかにはドイツ軍に肩入れし、港を使わせるべきだという考えを持っていた人もいたのだとか。ナチスのしたことを知っていると意外に思えるかもしれませんが、過去数百年にわたってイギリスに苦勞させられてきたアイルランドの歴史を考えると、そういう考え方を持つ人がいたとしても不思議ではないかなと思います。映画の中でもその複雑な状況はさりげなく描かれていて、ヒロインの家の家政婦は息子も連合軍に加わっている所以对して優しい態度を見せる一方、ヒロインの父親は主人公と対立する大尉と戦争前に馬の取引をしていたので、彼を友人として家に迎えたりしています。その他の人物も多種多様で（ナチスドイツ軍の兵士の中にもちゃんと礼儀正しい人物がいたりして）、その点もこの映画のいいところだと思います。

そのような人物が織りなす物語はもちろんですが、この映画のもうひとつの見せ場は酒場のシーンです。ヒロインを演じているジーン・バトラーはリバーダンスのプリンシパルも務めた世界的に有名なダンサーで、このシーンで見事なアイリッシュ・ダンスを披露しています。その後の四人の男性が踊る振り付けも彼女が担当していて、その踊りと主役の二人の喧嘩のテンションがリンクして描かれる様子はなかなか見応えがあります。また、もうひとつ、アイリッシュ系の音楽が好きな人ならではの驚きがあって、一瞬しか顔のアップが映らないのですが、酒場の中でアコーディオン（正確にはコンサーティーナ？）を演奏している女性はミュージシャンのシャロン・シャノンだったりします（演奏している他の二人はわからなかったのですが、もしかしたら詳しい人にとっては同じぐらい有名な人なのかもしれません）。

主役の二人などは他のどの作品に出ているかは申し訳ないことに思い出せないのですが、収容所長は「ユージュアル・サスペクツ」などで世界的に有名になったガブリエル・バーンが演じていて、この作品ではプロデューサーとしても名を連ねています。

なにぶん、ちょっと古い作品で（1996年の作品です）、日本ではDVD化もされていない

ようなのですが、もしかしたらレンタルショップにあるかもしれないし、ＣＳなどで放映される機会があるかもしれないので、どこかで見かける機会がありましたら、よろしければご覧になってみてください。

それから来年には「リバーダンス」の日本公演も行われるので、アイリッシュダンスに興味のある方や、映画を観てアイリッシュダンスを生で見たくなった方は、ぜひチェックしてみてください。

ザ・イースト（映画）

環境テロ集団に潜入して組織の危険度を調べ、必要に応じてFBIなどと協力して対処することを商売としている調査会社に就職した主人公が、「ザ・イースト」と呼ばれる集団に潜入して活動を共にしていくうちに感化されていくという映画です。

環境テロリストの活動に惹かれていく様子を描いた映画なんて面白いのか？ と思われる方もいらっしゃるかと思います。私も観る前は、環境テロリストの言い分を批判なしで認めているかのような単純な内容になっているか、でなければ、テレビで目にするような乱暴な行動をとる抗議団体の人々を彷彿とさせるキャラをそのまま登場させる質の低い映画なのではないかと思っていました。でも、その予想がいい意味で裏切られた作品でした。

まず、一風変わった、普通の人から見れば怪しいと思うような食事の仕方など、カルト宗教的な習慣がいくつか登場するので、ここで引いてしまったり、観るのをやめてしまう方もいるかもしれません。でも、第一の標的が明らかになり、そのテロ方法が明らかになると、様子が変わってきます。メンバーの中にはアフリカでとある抗生物質を投与されたことで重い副作用に悩まされるようになった医師がおり、その抗生物質を作り出した製薬会社が第一の標的なのです。そして彼らがとった行動は、その製薬会社のパーティーの招待客のシャンパンの中に問題の抗生物質を投与することでした。その後のニュースでは何も問題は起きなかったと招待客が語り、彼らの活動は失敗したかに見えたのですが、後に同じ人物が副作用に苦しめられているニュースが報道されます。

「ザ・イースト」のテロ活動が成功したことで苦しむ人々が生まれた以上、彼らが人を傷つけたことは明らかです。しかし、もしそれが行われず、何も知らない一般の人々に投与され続けていたら、さらに多くの人々が苦しむことになっていたのではないかと。ならば、本当はどれだけひどい副作用に苦しめられるかを明らかにした彼らの行動には一部の理があるのではないかと。このような問いかけが主人公だけでなく、観ているこちらにも突きつけられるのです。主人公が「ザ・イースト」の活動に感化されていく様子に理解を示せたのも、このような点が上手く描かれていたからではないかと思います。

でも、この映画は彼らの存在をそのままにはおきません。彼らの活動が続く中である問題が生じたことから、「ザ・イースト」のリーダーの考えは少しずつ変貌を遂げていきます。彼が最後に明かした計画は理想の終焉であり、力によって事態を改善できると信じる者が陥る暴走でした。全てが明らかとなるなかで、主人公がどのような答えを出すのかがクライマックスで描かれます。このラストもとても上手い終わり方だと思います。

観終わってからスタッフロールで知ったのですが、この映画はリドリー・スコット、トニー・スコットの映画制作会社が作ったもので、二人とも制作に参加しています。「メタルギア・ソリッド2・3」や「ザ・ロック」の作曲も担当したハリー・グレッグソン・ウィリアムズの名前もありました。俳優陣はエレン・ページ以外はどこかで見たことはあるけれど名前は思い出せない、という感じだったのですが、違和感のある演技をしている人はいなかったように思います。てっきりエレン・ページはぶっとんだ環境テロリストを演じているのかと思ったのですが（以前、

性犯罪者の疑いがある男を監禁して去勢する少女を演じていた姿を見ていて、その印象が強かったのと、癖の強い役を演じるイメージがあったので）、それほどでもありませんでしたし。

この作品は利益優先型の大企業が生み出す問題や環境テロリストの暴走などを題材としながら、娯楽作品としての質をきっちりと保った見事な映画だと思うので、政治的な事柄が映画で描かれていることに抵抗を感じない方には、一度は観ていただきたい作品です。実話を基にしているそうですが（どの程度盛り込まれているのかはわかりません）、そのような前提がなくとも十分に説得力を持った映画だと思います。よろしければご覧になってみて下さい。

LEGO (R) ムービー (映画)

ちょっとしたゲーム好きであれば、レゴのCG作品についてご存知ではないかと思います。どの程度、日本語化されているかまでは知らないのですが、『バットマン』などのアメコミから『スターウォーズ』や『ハリー・ポッター』のような世界的に有名な映画まで、様々な作品がレゴで再現され、ゲームになって販売されています。以前、バットマンシリーズのひとつを遊んでみたことがあるのですが、バットマンやジョーカーなどのおなじみのキャラを活かしつつ、レゴ特有の演出なども織り込んでいて、まずまずの面白さでした。

そのようなゲームCGを見ていたので、映画になったとしても不思議ではないなと思ったのですが、一方で、内容は子供向けではないかという思いもありました。先ほどのバットマンのゲームも十歳前後の子供を対象にしている感じの作りだったので。実際、予想はそれなりに当たっていました。でも、面白かったのです。

ストーリーの大まかな流れはアメリカの子ども向けアニメによくある感じなのですが（といっても、さらっと現代を皮肉っている部分もあるし、後半はちょっとだけメタフィクションみたいな箇所がありますが）、退屈する暇を与えないほど様々なものが詰め込まれています。世界を越えて集まったヒーローたちのコントみたいな掛け合いや、特別なところはなににもない主人公の浮いてる感が生み出すおかしさなど、随所にお笑いが散りばめられているし、アクションシーンは途中から観た人をも引きつけてしまうほどの躍動感に溢れています。

また、レゴの映画だから全てがレゴブロックのパーツでできているのは当たり前なのですが、それでも、風景や様々なギミック、バットモービルなどがレゴブロックで再現されているとちょっと感動を覚えてしまうし、レゴシリーズの名物と言ってもいい（かもしれない）登場人物たちが様々な物を瞬時に組み立てていく様子は、建築物が建つ様子を早送りで見ている時のような面白さがあります。

ヒロインのワイルドガール役は以前に紹介した「スパイラル 危険な関係」にも出演していたエリザベス・バンクス、スパボンの力で世界を支配しようと企むおしごと大王役にウィル・フェレル、バッドコップ役にリーアム・ニーソン、ウィルトウィウス役にモーガン・フリーマンなど、出演陣も豪華です。大人も子供も楽しめる映画なので、よかったらご覧になってみてください。

エージェント・スティール（映画）

弟ニッキーの裏切りによって刑務所に入ることになってしまった兄のクランチは、出所後、しがいないバイクスタントで生計を立てていた。だがある日、ジョルジュ・スーラの絵をめぐるごたごたに巻き込まれ、ニッキーが戻ってきたことを知ったクランチは、ニッキーの泊まるホテルへ行き、殴り合いをする。その後合流した調達屋のパディから、グーテンベルグが聖書の次に印刷した「ヤコブの福音書」を回収する仕事をもちかけられるが、クランチは参加を渋る。しかし150万ドルという報酬が欲しくて仕方のないニッキーはクランチを説得する。複製屋のギーも仲間に加えて作戦にとりかかる彼らだったが、そこにスーラの一件でニッキーに目をつけていた国際警察のビックが情報提供者のウィンターと共に追いかけてくる。さらにニッキーは仲間に内緒で、なにやら怪しい動きを見せるのだった。

久しぶりにカート・ラッセルが主演していると書かれていたので、映画自体にはあまり期待はしてないけど観てみたら.....、という作品です。コメディ系のクライム映画で、演出は軽妙で洒落ているし、脚本もなかなか計算されているし、笑える部分がけっこうありました。ちょっと下ネタ的な箇所があるので、特に女性はその部分で引いてしまうかもしれませんが（でも、こういう前衛芸術は実際にあったりするので、大目に見ていただければ.....）、最後までほどよい緊張感と笑いを楽しめます。

時間は約90分とそれほど長い作品ではないのに、子供の財布も平気で掏るシーンで笑いと共に描かれるニッキーの金への執着、犯罪者となった理由について語るウィンターの言葉に込められた美への憧れや執着、全く美術品を理解していない捜査官ビックが随所で見せるとんちんかなコメント（ジョルジュ・スーラが好きなので、彼のスーラに対するコメントは大笑いしました）など、ちゃんと全ての登場人物の個性が発揮されているところも好きでした。（ちなみに、これは映画の中でも描かれていないし、裏設定として存在しているかどうかはわからないのですが、調達屋パディはクランチとニッキーの父親なんじゃないかと思ったりしています）

カルフーン兄弟の兄クランチにカート・ラッセル、弟ニッキーにマット・ディロン、ウィンター役にはテレンス・スタンプ（彼が主演している映画「アンコール！！」もなかなかいい映画だと思います。おすすめです）など、出演陣も豪華です。英語のwikiをちょっとチェックしてみたら海外の評価はあまり芳しくなかったのですが、個人的には面白いと思った作品なので、もしよかったらご覧になってみてください。

太極 ゼロ・太極 ヒーロー（映画）

名前を聞けば誰でもどんなものかはわかるけれども、詳しく知っている人は少ない。太極拳ってそんな感じではないでしょうか。太極拳と一口に言っても幾つかの流派があって、日本では健康体操というイメージが強いけれど、陳式太極拳は武術として用いることができるそうだし、同じ太極拳でも「十二式」「二十四式」「三十四式」（要するにそれだけの数の動きがある、ということなんですが）などがあって、調べれば調べるほど複雑になってきます。

この映画は楊式太極拳の開祖の若き日を描いた物語です。というと、ちょっと堅苦しい物語が展開されそうですが、そんなことはありません。出だしはこんな感じです。

生まれつき頭にこぶがあり、それが原因で天涯孤独の身になってしまった楊露禪は武術家に拾われ、十数年後、天理教の兵として清の官兵と戦っていた。頭のこぶを押すとバーサーク状態になり、無類の強さを発揮することから重宝されていたが、それは彼の命を縮める危険もあった。軍医からこのままでは死ぬと宣告された主人公は、助かるためには陳家溝へ行き、陳家拳を教わるしかないと言われ……。

と、もはやどこに事実が含まれているのかわからないぐらい、荒唐無稽な筋書きです。でも、それを理由に敬遠してしまうには勿体ない作品です。

個人的に格闘アクション映画で重要な点は二つあると思っています。

一つ目はもちろん、演じる俳優です。中国のアクション映画でも、最近ハルクスの良い俳優を起用するのが大事な要素となっているためか、殺陣の素養を持っていない人が主役になる事も少なくないのですが、そういう場合、激しいアクションシーンは必然的に代役が演じることになるため、カメラワークが制限され、映像の魅力が薄れてしまうことが多いのです。

でも、そのような俳優が主役の場合でも魅力ある作品に仕上がっていることがあります。それは大事な二つ目の要素、アクションの振り付けを担当するアクション監督の力が関係しています。その存在を意識するようになったのはごく最近なのですが、アクション監督にもリアルさを求めるアクションを追求する人、アクロバティックな動きを構成する人、その場の物を駆使したアドリブ的格闘など、振り付けの傾向のようなものがあり、優れたアクション監督はそれほど上手くない人でも上手く見えるアクションを構成できてしまうし、そうでもない人だと演者や映画の魅力を削いでしまうのです（リュック・ベッソンの「アルティメット1・2」はストーリーは特別と言えるほどではないのですが、主役を演じているダヴィッド・ベルとシ릴・ラファエリがアクション俳優としての才能だけでなく振付師としての才能もあるので、アクション映画としてはとても質の高い作品に仕上がっています）。

この映画の主役は、ジェット・リー（リー・リンチェイ）と同じく武術大会での優勝経験があるので見事な動きをみせてくれますし、アクション監督は「五福星」や「プロジェクトA」を観ていた方ならおなじみの、サモ・ハン・キンポーが務めています（ドニー・イエンが主演を務めた「イップ・マン」シリーズアクション監督も務めているのですが、二作目では洪家拳の使い手

として登場し、ドニー・イエンと円卓という不安定な足場を活かした格闘シーンを演じています）。

ちなみに、「ヒーロー」の方にはユン・ピョウが出演しており、昔と変わらない見事なアクションを披露しています。また、英国人フレミング役として、「プリズン・ブレイク」のアブルッチ役、最近ではドラマ「ブラックリスト」のベルリン役などでおなじみの名脇役、ピーター・ストームアが出演しています。この二人も映画の雰囲気さをさらに盛り上げる存在になっています。

映画自体の演出も斬新で軽妙です。今時と言ってしまうかもしれませんが、アニメやゲーム的な演出が豊富に取り入れられていて、それが作品の荒唐無稽さと上手く組み合わせられているのです。繰り返しに陥ってしまいそうな場所はそのような演出で進めることで無駄なくスピーディーに物語を展開し、なおかつ笑いとアクションを楽しめるようになっています。

レベルの高いアクションを見たい、という人には自信を持っておすすめできる映画なので、よかったら一度、ご覧になってみてください。

グランドピアノ 狙われた黒鍵（映画）

五年前にある失敗をしてから人前で演奏をしていなかったピアニストのトム・セルズニックは、師匠のような存在だったパトリック・ゴードラーの追悼コンサートに出演することになっていた。ラジオ番組のDJに電話口で無遠慮な質問を浴びせられつつ会場に着くと、ここでも彼を苛立たせるような悪戯に遭遇する。セルズニックはコンサートの準備をするが、演奏に使う楽譜の中に「ラ・シンケッテ」という難曲の楽譜が紛れ込んでいるのを見つけ、これも悪戯だと思った彼は楽譜を捨てる。

コンサートが始まり、演奏しながら楽譜をめくっていくと、楽譜に「一音でも間違えたらお前を殺す」と書かれているのを発見する。これも悪戯の一つかと思っていたセルズニックだが、自分の手元にレーザーサイトの光が当てられているのに気づいてから、姿の見えない脅迫犯との心理戦が始まるのだった。

ある特定の状況下で姿の見えない犯人と攻防戦を繰り広げる、という映画はけっこうありますが、演奏中のコンサート会場が舞台で、しかも主役がコンサートに出演しているピアニスト、という設定は今までにないものだと思います。この映画はあらすじを読んでもあんまりピンとこないのですが、物語に引き込むための要素がちゃんと備わっているので、観始めると、脅迫が始まる辺りから引き込まれていきます。

まず、音楽の使い方が見事です。場面の状況を描き、雰囲気高めるために用いられていることはもちろんですが、「一音でも間違えたら殺す」という脅迫を受けている中での演奏というシチュエーションが加わることで、より緊迫感が加わっています。そして音楽が進む中で、セルズニックは脅迫者に翻弄されながらどうにかしようとして行動するのですが、演奏を絶対にミスしてはならないし、ピアノを離れても自分の演奏が始まるまでに戻って来なければならないという制約があります。これによって、音楽が時計と同じ役割を果たし、セルズニックがリアルタイムで行動しているような錯覚を生みだしています。

セルズニック演じるイライジャ・ウッドの演技も作品に大きく貢献しています。セルズニックを演じていることに加え、ピアニストとしての演技も見事で、その指の動きには驚かされます。「海の上のピアニスト」のティム・ロスと同じくらいか、それ以上と言ってもいいかもしれません。もし演奏シーンが顔のアップや手のアップなどを多用して構成されていたとしたら、観る人はおそらく代役が弾いているだろうと考え、ここまでの緊張感は生まれなかったのではないかと、という気がします。監督もそれを意識しているのか、映画の中ではイライジャ・ウッドの上半身から鍵盤へ、あるいは鍵盤からイライジャ・ウッドの上半身へと動かすカットを用いて、彼が本当に弾いていることを印象付けようとしているように見えました。脅迫者役のジョン・キューザックの声の演技も、冷酷さがよく出ていて良かったです。

五年前にセルズニックがどのような失敗をしたのか、という点など、気になるのに描かれないまま終わってしまう点がいくつかあり、ここは評価が分かれるところかもしれませんが、その点を描くことに時間を割いてしまうと、映画の緊張感が薄れてしまうかもしれないので、個人的に

は省いて正解だったと思います。でも、この作品ではちょっとした会話や動きなどで登場人物の設定を表現しているようなところがあるので、もしかしたら、彼の失敗は「ラ・シンケッタ」を失敗するかもしれないという懸念が生み出したものだったのではないか、という気もします。

ちなみに、セルズニックが演奏中に席を離れたり、何かつぶやいたりする姿に、演奏中にそんなことするピアニストはいないだろうと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。でも、ピアニストの中にはちょっと変わった行動をとる人もいるらしく、私の知っている範囲でも、グレン・グールドなどは普通の人よりもかなり低い椅子に座って演奏する姿が有名だったりするし、「シャイン」の映画のモデルになったデヴィッド・ヘルフゴットは弦きながら演奏することで有名で、実際にCDを聞くとごによごによとした人の声みtainなものが混ざっているほどです。だから作中の観客も、ショックのせいで奇癖があるのかもと考えて、不審に思わなかったのかもしれませんが。

スペインで製作された映画ということもあってか、wiki情報によればアメリカでは大々的に公開されたわけではないので、あまり大きな評判を生んではいないようなのですが、スペイン本国ではベストドラマ賞にノミネートされたり、サントラが受賞しているそうです（こちらは英wiki情報です）。私もサントラは観終わってからすぐに欲しくなるほどでした（観終わってから探してみたら、輸入盤は買いづらい状態だったので諦めていたのですが、最近、某通販サイトのデジタルミュージックメディアで扱っているのを見つけました）。面白い映画なので、もしよかったら、ご覧になってみてください。

ドン・ジョン（映画）

今までに何度か、この作品は観る前は期待していなかったのですが……、という感じで映画を紹介しましたが、この映画もそんな一本です。だって、主人公はプレイボーイで様々な女性と関係は持つけれど、どんな女性よりもポルノ動画の方が最高だと思っていて、理想の女性と出会った後でもその考えは変わらず、満足できなくて夜中に動画を見ていたら、それが見つかって陰悪になる、こんな序盤のあらすじを見て面白い映画だと思う方が難しいと思いませんか？

なので、もしジョセフ・ゴードン＝レヴィットが主演でなかったら絶対に観ていなかっただろうし、スカーレット・ヨハンソンだけでなくジュリアン・ムーアも出演していると知った時には、なぜこんな映画に出演しているのだろうかと思ったほどです（観終わったら納得できましたけれど）。

全体的な作品の雰囲気はコメディタッチで、ちょっと刺激の強い映像もあるので子供には向かない内容なのですが（ここで言うまでもなく、あらすじで明らかですが）、コメディの演出でほどよく笑いに変化させているので、エロティックな雰囲気はそれほど強く感じませんでした。

個人的にはポルノ動画にハマっているという設定はあくまでとっかかりで、独りよがりな理想を持った主人公を通して、恋愛やコミュニケーションについて描いた映画だという印象を受けました。主人公は何度も教会に通って自分の性癖を懺悔するのですが、そのシーンも、キリスト教に対する皮肉というよりは、告解者と神父との間に相互的なやりとりが行われていないことを描きたかったのかなと理解しています。そして、こういう映画では男性側の問題が改善されてめでたしめでたしという結末になりがちなのですが、この映画では主人公だけでなく、主人公の理想の女性だったバーバラの側にも問題があることをちゃんと描いています。そこが男女どちらに対しても公正な作りになっていて、上手いなと感じました。

それ以外にも、性的なイメージを前面に押し出した雑誌や、食欲を煽るためにあえてセクシーさを強調する食べ物のCMだとか（ちょっと前のハーゲンダッツのCMなどもそんな感じでしたね）、現代社会がいかに女性の性的な要素を売り物として扱っているかなども、さらっと描かれています。

西洋というとレディ・ファーストというイメージをお持ちの方も多いと思いますが、一方では根強い女性蔑視も昔から存在しているようです。最近ではそれが強まっているらしく、それを批判した女性が脅迫を受けたというニュースも読みましたし、BBCでもドキュメンタリーで取り上げていたほどです。ちなみに、ちょっと昔のアメリカでのセクハラがどんな感じだったのか興味がある方には、シャーリーズ・セロン主演の「スタンドアップ」という作品を観ていただければと思います。この映画では、セクシャル・ハラスメントが定義されるきっかけとなったミネソタ州の裁判が題材となっています。ただ、かなりきつい内容なので、観るのに覚悟が必要な映画でもあります。（主人公の設定は少し事実とは異なっているかもしれませんが、セクハラ部分はかなり事実に近いです。どうしてこういう微妙な説明かということ、原作本を持ってて目を通そうとしたのですが、内容がきつく、まだ読み通せてないからなのです）

ちなみに、ジョセフ・ゴードン＝レヴィットは主演だけでなく、脚本と監督も担当しています

。英wikiによれば、この作品の評価は好き嫌いが分かれている感じですが、いくつかの賞にもノミネートされています。

それにしても、「ホーリー・ウェディング」で子役時代の彼を見た時から、その存在は記憶していたのですが、ここまでの大物になるとは思いませんでした（カトリーヌあやこさんの「すちゃらかシネマ」という本で、彼がかわいくないと酷評されていて、その文章が印象的すぎたので、ずっと彼のことを憶えていたのです）。

なかなかとっつきにくい筋書きではあるし、人によって評価が大きく分かれる作品なのですが、興味がある方は、よろしければ一度ご覧になってみてください。

無関係に思える出来事に何らかの意味を見出してしまうことって、あると思います。誰かのことを考えていた時にその人から電話が来ると何か繋がるものでもあったのかと感じたり、たまたま占いの結果が悪い時に嫌なことがあったりすると「やっぱり今日は悪い日だったんだ」と思ってしまうたり。最初の例の方は共時性（セレンディピティ）という言葉で説明されることもあるわけですが、実際には、一見無関係に見える個々の出来事にどれくらい見えない繋がりがあるのか、それとも完全に無関係なのかは、簡単にわかることではないと思います。

人生も同じで、何か意味があるのか、それとも何の意味もないのかは、簡単に出せる答えではないと思います。苦しい出来事などがあった時に、それは後に何らかの意味があるのだと思うことで乗り越えられたり、後から考えて、あの出来事があったから今の自分があるんだと思ったりする一方で、そのような出来事があったから自分は特別だという錯覚に陥ったり、逆にそういう経験が少ないから自分には何もないと思ってしまうこともあるようです。そして、自分の人生に意味を見出すことに苦しんでいる人には、かえって「人生には何の意味もない」という言葉が救いになることもあるみたいです（ヤマシタトモコさんの『運命の女の子』に収録されている「不呪姫と檻の塔」はこういうことがテーマなのかなと読みながら思ったりしました）。

英wikiによれば、この作品の海外での評価は観た人の間ではそれなりに高いみたいなのですが（ちなみに、アマゾンに書かれている日本の評価だとハッキリ好みが分かれている感じですが）、商業的には残念ながら成功とは言えない結果になっているようです。たしかに「タイヤが念力で人間を爆死させる映画」という紹介文を読んで、あるいはタイヤが写ったパッケージと宣伝文を目にして、「こりゃ面白そうな作品だ」と思う人は少ないでしょう。私もB級のカルト作品だと思ってましたし。

路上に置かれた椅子を車が轢きながら画面に近づいてきて、止まった後にトランクから現れた警官が「この作品は意味のない表現へのオマージュだ」と語るように、冒頭から意味を察することが不可能に近いシーンが続きます。タイヤの動きを見学する人々を集めた理由は何なのか、そして後に彼らを毒殺するのはなぜか、タイヤが人を殺害するのはなぜか、など、色々と想像はかきたてられるけれども、明確な答えは与えられないまま映画は進んでいきます。そのわけのわからなさを楽しめる人なら、この作品を楽しめると思います。

個人的には、なんとなく理由があるように思わせておきながら最後になっても釈然としないまま終わってしまう映画には不満を感じることもあるのですが、この作品では最初から意味はないと断りがあった上で映画が展開されていくので、むしろそのシュールさが面白く思えました。また、絵になるカットがけっこう多く、映像に飽きることがありませんでした。演出も独特で、タイヤ（エンディングでロバートという名前がついていることがわかります）の細かい動きや音楽によって、まるでタイヤに人格があるかのように思えてくるのが見事だと思います。と同時に、意味がないと前置きされているにもかかわらず、タイヤに人間味を見出してしまうことに苦笑いしつつも（タイヤの動き自体には意味が存在するのかわからないのに感情を見出してしまうのは、一種の同一視なので）、そう感じてしまうことが興味深かったです。

間違いなく好みが分かれる作品だとは思いますが、ちょっと普通の映画に食傷気味の人や、他の人が見なさそうな映画をチェックしてみたい人は、一度、ご覧になってみてはいかがでしょうか。観る人によって印象や解釈が異なる万華鏡のような映画、という言い過ぎかもしれませんが、決して何も考えずに撮られた映画ではないので、よかったら、どうぞ。

イコライザー（映画）

久しぶりに映画を紹介したかと思ったら、よりにもよってあんなわけのわからない作品かよ、と思われる方もいらっしゃるかもしれないので、次はちゃんと筋が通って面白い作品を紹介したいと思います。

ホームセンターに勤めるマッコールは仕事も真面目で、顧客や同僚からの評判も良く、困っている同僚には進んで手を貸す、非の打ちどころもない人物だった。彼は毎夜過ごす二十四時間経営の食堂で出会ったロシア人コールガールのテリーと話をするうちに打ち解けていくが、ある日、彼女を手荒に扱う雇い主を目にする。彼女の制止もあり、異を唱えることなく別れたマッコールだったが、後日、彼女が暴行を受けて入院したという知らせを聞き、病院に見舞いに行く。彼女の同僚から事情を聞いたマッコールは雇い主スラヴィのいる店に行き、穏やかに彼女を自由にするように頼むのだが、雇い主はマッコールだけでなく彼女をも馬鹿にした態度で提案を突っぱねる。そのままでは彼女は助からないと察したマッコールは、その場にいた男達を約三十秒で殺害し、痕跡も残さず立ち去る。

その翌日、何事もなく勤務を続けるマッコールだったが、ロシアから非合法的な商売を束ねていたボスのプーシキンはその事態を憂慮し、元スペツナズ（ロシアの特殊部隊）のニコライ・イチェンコに犯人の割り出しと問題の解決を命じるのだった。

この作品は「シークレット・ハンター」というアメリカのテレビドラマシリーズを映画化したものだそうで、その作品を知っている人なら主人公の正体は何者かは知った上で観るでしょうし、この作品のDVDの紹介などでも彼が何者かは書かれてしまっているので言うまでもなく明らかなのですが、映画の演出などを見ていると、なんとなくそういう情報を頭に入れないで観る方が、主人公の素性が明らかになるまでの展開がより興味深いものとして楽しめるのではないかと思います（知っていると全てが既知のこととして不思議さを感じにくくなってしまうので、人によっては少しまどろっこしく感じるかもしれません）。リメイク映画はあらかじめ主人公に関する情報のほとんどが明らかになってしまっているので、こういう部分で驚きを生み出すのが難しいだけにちょっと大変かもしれません。

でもその設定を知っていたとしても、ロシアンマフィアとの戦いを通して自分の存在意義を見出す男の物語として楽しめます。デンゼル・ワシントンは主人公の普段の朗らかさと「仕事」をしている時の冷徹さをきちんと演じ分けているだけでなく、セリフのない表情だけのカットでも感情がきっちり伝わってくる演技を見せてくれるので、アクションシーンのないドラマ部分でも緊張が途切れることはありません。

どのような危機に陥っても冷静さを失わない主人公マッコールと対を為す、悪役ニコライ・イチェンコの激しい獰猛さも迫力があって見事です。ちなみにイチェンコが上半身裸のシーンでは様々な刺青が体に彫られていることがわかるのですが、ロシアンマフィアなどの世界では、自分がどのような犯罪を行ったのか、どのような刑務所に入ったのか、という情報を入れ墨で体

彫る習慣があるそうなので、入れ墨の多さは彼の経歴の凄絶さを物語っているのだと思われます（ジョン・マルコビッチが出演している「ゴッド・オブ・バイオレンス」という映画にこのような話が登場します）。なので主人公がスラヴィらと戦う直前のシーンでも、男たちが手に持っている武器だけでなく、体に彫られた入れ墨を見て、どんなことをしてきたのか、誰をどんな風に傷つけてきたのかを読み取り、相手の動きを予測しているという意味合いも持っているのかもしれない。

抑制のきいた大人のドラマが楽しめるだけでなく、クライマックスの対決シーンも必見ですので、もしよろしければ、一度ご覧になってみて下さい。

ジョン・マルコビッチ主演のドラマ「クロスボーンズ」の一話目で、海戦を変える歴史的装置として海上時計が登場するのですが、はっきり言って、その時はまったく意味がわかりませんでした（ちなみに、このドラマではこの後、時計職人は殺され、海上時計はほとんど関係なくなります）。ですがこのドラマを観て、ようやく少しその理由が理解できました。

緯度（0度は赤道を通っている、いわゆる地図の横線）はある程度の知識があれば知ることができるのですが、経度の方は緯度によって距離が変わるため（度の数値は同じでも、その間の距離は北極や南極に近づけば近づくほど短くなるし、赤道の方に近づけば距離は長くなる）、「母港など、経度がわかっている場所」と「船上」の二つの時間がわからなければ、正確な経度を割り出し、位置を知ることができないのだそうです（こうして書いている今も、ちょっと難しいです。わかりやすく書けなくてすみません）。それが分からなかったために現在位置を見誤り、陸地を見つけられずに壊血病（ビタミン欠乏から起こる病気）が悪化して多数の死者を出したり、座礁して船が大破してしまうこともあったのだとか。

時間が分かれば経度が算出できるといっても、当時は振り子時計ばかり。この時計は船の揺れなどで時間がずれてしまうため、正確な時間を知ることはできませんでした。星や太陽の位置から経度を推測することもできなくはなかったのですが、正確な位置を割り出すのは非常に困難だし、いつも雲のない空ばかりだとは限らない。しかし、事故の被害は見過ごすことができない。そんなわけで、どの国も正確な経度を知る方法を見つけ出そうとし、イギリスでは、その手段を発見した者に現在の価値で数百万ドルの賞金を出すことにしました。

我こそはと様々な手段を披露する者がいるなか、その方法を生み出したのは無名の時計職人であったジョン・ハリソンでした。彼は海上でもほとんど誤差を生じない時計を作り出したのですが、その発明が正式に認められるまでには数十年もの時間を要したのです。

ドラマではジョン・ハリソンの生涯と、故障したまま放置されていた彼の時計を修理したルパート・T・グールド少佐の人生を交互に描いています。ジョン・ハリソンをマイケル・ガンボン（以前、紹介した「アメイジング・グレース」のフォックスや、新しいダズンズ・メン校長などを演じているイギリスの名優）、グールド少佐をジェレミー・アイアンズ（「仮面の男」のアラムス、「ロリータ」のハンバート・ハンバート、最近では「リスボンに誘われて」の主演など）が演じています。さらに前編では、ジョン・キャンベル役に「Sherlock」のモリアーティ役で一躍世界的に有名となったアンドリュー・スコットが登場しています。他にもイギリスのドラマが好きな人なら目にしたことのある俳優が脇を固めている、豪華な作品です。

前後編に分かれている本作は、いわゆるミニシリーズと呼ばれていた（現在はリミテッドシリーズと呼ばれています）テレビ映画のようなのですが、日本国内ではDVDも発売されておらず、CSのイマジカTVで字幕版が放送されたに留まっています（私はこれで観ました）。ですが、それではもったいないぐらいの良作の伝記ドラマなので、再放送されたり、どこかで見かけたりには（あるいは輸入盤で映画を観られる方には）ぜひチェックしていただきたい作品です（某動画サイトで英語のタイトルで検索すれば映像が見られるかもしれませんが、なにぶん、海外

の動画なので、ご視聴は自己責任でお願いします。ちなみに、日本国内で放送されていないベネディクト・カンバーバッチ主演のテレビ映画などもあったりするのですが、これを観ると当時の航海がいかにきつかったかがよくわかります）。

また、このドラマが面白かったので、原作はどうなのだろうと思い、本の方も読んでみたのですが（こちらは日本語訳されており、文庫で買えます）、まず驚いたのは、ドラマのほとんどのエピソードがちゃんと原作に沿っていたということです。冒頭の、勝手に進路を変えようとした熟練の水夫が絞首刑にされた後に船が座礁するエピソードもそうだし、後半は「（時間を稼ぐために、あるいは悪役の印象を強めるために）ちょっと盛ったんじゃない？」と思うぐらい、これでもかとライバル側の妨害が続くのですが、これが事実だったというのが衝撃でした。

そしてジョン・ハリソンの生涯と苦闘の歴史だけでなく、同時代の様々な人々のエピソードも知ることができます。1876年にすでに光の速度を測定していたローエ・レーメルや（その値は現在認められているものよりわずかに小さいだけ！）、振り子時計のアイデアを最初に思いついたのもガリレオ・ガリレイだったというエピソードから、ハレー彗星でおなじみのエドモンド・ハレーはロシアのピョートル一世がグリニッジ王立天文台を訪れた時、二人は小学生のようにじゃれあい、お互いの足を持って車輪のように転がって遊んだという微笑ましい逸話まで、ドラマを観た後でも損なわれることのない面白さで溢れています。興味のある方は、ぜひ一度、読んでみて下さい。

パガニーニ 愛と狂気のヴァイオリニスト（映画）

タルティーニという音楽家の作品に「悪魔のトリル」というヴァイオリンソナタがあります。これは夢の中で悪魔が演奏していた曲を目覚めてから書き留めたという逸話が残っている作品で、その逸話の面白さもあってか、「闇の末裔」という漫画にも登場していました。なかなか美しい曲なのですが、音源化されたものが少なくて手に入れるのがちょっと大変な作品でした（現在は某通販サイトで検索すれば簡単に見つかります）。もうひとり、様々なヴァイオリンの曲を残した音楽家に、ニコロ・パガニーニという人がいます。ヴァイオリンの演奏技術の高さから、悪魔と契約してその技術を手に入れたなどと囁かれた彼の作品「24のカプリース」は現在でも難度が高い曲として有名です。

この映画は彼の逸話を散りばめながら、彼の成功と破滅を描いています。自分の楽譜を異常とも思える厳しさで管理していた（当時は盗作が平気で行われていたため）、演奏中にヴァイオリンの弦が切れていって最後の一本になっても曲を演奏し続けた（wikiで見た情報によれば、自己演出の可能性もあったのだとか）などのエピソードは有名ですぐに確認できたのですが、物語の軸となる若き女性歌手との恋愛は調べてもちょっと見つからなかったの（彼の子供アキレスの母親との恋愛については見つかったのですが）創作の要素が強いのではないかと思います。個人的には彼の生涯を忠実に描いた伝記映画というよりは、パガニーニという人物を主役として創作した物語という色彩が強いのではないかと感じました。

この映画の中で最も魅力的な要素は作中で流れる音楽です。その美しさは映像以上に物語を語っていると言っても過言ではありません。特にヒロインのシャーロットが歌う「愛しい人よ」の旋律は美しく、この映画を観終わった時にシャーロットに抱く印象は人によって異なると思うのですが、たとえそれが好意的なものでなかったとしても、この歌の美しさが揺らぐことはないと思断言できるほどです。

また、作中でパガニーニが演奏している曲は、パガニーニ役のデヴィッド・ギャレット本人が演奏しています。純粋なクラシックから名曲を現代風にアレンジしたもの、世界的に有名な曲のヴァイオリンバージョンなど、様々な曲を弾きこなすヴァイオリニストとして活躍している彼は、（ファンの方はご立腹されるかもしれませんが）演技の部分はそれほど上手いとは言えないものの、ヴァイオリンを手に取り、音を奏で始めた瞬間、どんな俳優も容易には表現できない輝きを放つ存在へと変貌します。彼より上手く演技できる俳優はいても、彼のように演奏できる俳優はいない。そう考えると、この配役は必然だったのではないかと思います。

この映画ではパガニーニの栄光と破滅、シャーロットとの恋愛がメインとなっているのですが、（ここからは個人的な印象が強くなってしまおうのですが）私はこの映画の真のストーリーは「悪魔ウルバーニと契約したヴァイオリニストが最終的には魂を奪われる、パガニーニを主役にした『ファウスト』」だと思いながら観ていました。映画の冒頭から、そうとしか思えないような描写があったからです。

それは最初の演奏シーンの後、眠っているパガニーニの部屋にウルバーニがやってきて契約を交わすシーンです。ウルバーニはパガニーニが「入れ」と二度も言っても入ろうとせず、わざわざ

「三度言えば入ろう」と言い、彼に三度目の許可を出させてから入ってきます。この時点で、彼は悪魔かもしれないと思いました。なぜかと言うと、悪魔というと色々な場所に自由に現れては他人を誘惑させたり堕落させるようなイメージを持っていらっしゃる方もいると思いますが、昔話や民話に登場する悪魔は制約が多く、その中の代表的なもののひとつとして、他人の家に入る時にはその住民から許可を得なければ入れないというルールがあるからなのです。そして「彼の従者、奴隷として働く」と言いながら金銭の要求はせず、交換条件はと聞かれると、「もしあの世で会えたら、その時は恩を返してくれ（映画の字幕より）」と言い、金銭を介さない契約なのに、わざわざ契約書に署名までさせています。この時点で魂を代金とする契約が交わされたのではないかと解釈しました。

そしてそれは物語の後半でパガニーニがウルバーニに契約を解除すると伝えたシーンで裏付けられたと思いました。ウルバーニはここで別れ際、「また会おう」と言って去っていくのですが、耳で聞いた限りでは「Until we meet again」と言っているのです、正確には「また会う日まで」というニュアンスではないかと思っています。このセリフをいずれ落ちぶれたら自分の助けを求めにやってくるだろうという自負から発せられたものではなく、「あの世で再会しよう」と告げる悪魔の別れの言葉だと感じ、パガニーニの魂が死後に永劫に囚われる様子を妄想してしまったほどです。

ただ、少しだけこの考えには問題があります。パガニーニが逮捕されて牢にいる時の会話で、ウルバーニははっきりと、「私は悪魔ではない。悪魔に仕える従者だ」と言っているからです。ただ、パガニーニの子供の話など本人しか知らない情報を口にして、なぜ知っているかと問われた時に話をはぐらかす彼がこんなにはっきりと否定を口にするのは少し違和感を覚えました。そこで冒頭のシーンを再確認してみると、「もしあの世で～」の台詞は、あの世で会った時に私に対して同じことをしてくれ、と言っているようなのです。だからもしかしたら、これは悪魔流のペテンなのではないかと思いました。つまり、「（この世では私は君の従者であり、奴隷だ）だから悪魔ではない」、そして契約通り、「あの世では君が（悪魔である私の）従者であり、奴隷となるのだ」という風に。これなら彼は嘘をついていることにもならないと思うのですが、いかがでしょうか。

もちろん、この解釈が正解とは限らないのですが、こんな解釈をしてしまうのも、ウルバーニを演じるジャレッド・ハリスの演技のなせる業ではないかと思っています。多くの人は彼のことを「シャーロック・ホームズ シャドウ・ゲーム」のモリアーティ教授役で意識するようになったのではないかと思います（私もそのひとりです）、彼はケネス・ブラナー主演の「舞台よりすぐきな生活」では変質者を、「シャドウハンター」では裏切り者の教授を演じ、映画だけでなくテレビドラマ「マッドメン」など、様々な作品に出演し、作品ごとに喋り方から見た目までがらりと印象を変えて演じる俳優なのです。今作でも見事なまでに怪しさを醸し出して、私には彼が悪魔にしか見えませんでした。

ちなみに、エンディングのスタッフロールでシューベルトの「魔王」が流れたのも駄目押しではないかと思いました。「魔王」の歌詞は子供の魂が魔王に連れ去られるというものだし、その歌詞は「ファウスト」の作者ゲーテの書いた詩が用いられているからです（この間テレビで観た

話では、ゲーテの大ファンだったシューベルトが勝手にゲーテの詩に曲を書いたと紹介していました。なんだか昔のゆるさを感じさせる話ですね）。

と、だいぶ長くなってしまいましたが、こんな楽しみ方もできるということを知ってもらいたくて書いてみました。ストーリーを追うもよし、私のように様々な部分に思いを馳せるもよし、美しい音楽を楽しむために観るのもよしと、色々な楽しみ方ができる作品なので、もしよかったら、いちどご覧になってみてください。

2015.12.3

「宇宙大作戦」時代のスター・トレックや劇場版を観ていた世代にとって、ウィリアム・シャトナーとレナード・ニモイといえばカーク艦長とミスター・スポック以外にありえないと思われるかもしれませんが、実は私にはそういうイメージがほとんどありませんでした。

あまりSFに興味がないこともあって、過去作品をチェックしていなかったのも、「スター・トレック」といえばパトリック・スチュワート演じるピカード艦長やデータ少佐でしたし、ウィリアム・シャトナーは「ボストン・リーガル」のデニー・クレイン（麦人さんの吹き替えで「デニー・クレインだ!」と連呼してて、そのエキセントリックに引きつけられました）、レナード・ニモイは「スパイ大作戦」のパリス（怪しい白塗りで日本人に変装していたこともあったはず）というイメージしかなく、スター・トレックと繋がる記憶といえば、テイジンのCMにスポックの姿で出演していたことぐらい（当時は変な耳の人だと思ってました）。

なので、ベネディクト・カンバーバッチ繋がりで「スター・トレック イントゥ・ダークネス」を観ても、ヴァルカン神経掴みがわからなかったし（後でネットで調べて知りました）、過去作品の特集を観て初めて「カーンの逆襲」のリメイク的作品だと知りました。「ビッグバン・セオリー」にたびたび登場していた三次元チェスも、この本の写真を見てスター・トレックに登場していたものだったと知ったぐらいです（それまでは、銀河英雄伝説にもあったな、ぐらいにしか思っていませんでした）。

それでも、レナード・ニモイの知的な風貌は彼を気になる役者の一人に位置づけるのに十分だったので、彼の訃報を聞いた時は非常に残念でしたし、たまたまつけていたBBCのニュースでこの本が発売されたことを知って、すぐに読みたくなったのです。

この本は、ウィリアム・シャトナーが哀悼の意を込めてレナード・ニモイとの思い出や人物像について語った回想録です。レナード・ニモイは過去に二冊の自伝（一冊目は「私はスポックじゃない」、二冊めは「私はスポック」）を出しており、ウィリアム・シャトナーも（今回の共著者と共に）過去に自伝を書いているので、それらに目を通したことがある方には既出の情報もあるかもしれません。

ユダヤ人移民の子としてボストンに生まれた少年時代。下積み時代に俳優としてだけでなく、演技を教える教室も開いていたこと（「ゴッド・ファーザー」のモー・グリーン役の俳優アレックス・ロッコも彼の生徒だったとか）。昼にオーディションを受けて、夜はタクシー運転手として仕事をしていた時のこと（ジョン・F・ケネディを乗せた時のエピソードが書かれています）。台詞の少ない役や悪役として様々な作品に登場していた頃の話（この頃に「ナポレオン・ソロ シーズン1」で二人は初めて共演しています）。スター・トレックにまつわる様々なエピソードと、彼の俳優や映画監督としての仕事への姿勢（「スリーメン&ベビー」の監督をしていたのも初めて知りました）。ゴッホが主役の一人芝居を制作していたり、歌手としてCDを出していたり（アマゾンのデジタルミュージックストアで聞けます）、後半生は俳優としてよりも写真家として活動していたことなど（詩集も何冊か出していたそうです）。そして息子アダム・ニモイの人生とレナードとの関係についても書かれています。

撮影中にアルコール依存症に陥っていたことや制作者のジーン・ロッデンベリーと不仲になった時の話も書かれているのですが、スター・トレックに関する話でいちばん驚いたのは、ヴァルカン神経掴みとヴァルカン式挨拶を考えたのは制作者ではなく、レナード・ニモイ本人だったということです。テレビシリーズの中に善と悪のカークが登場する話があるそうで、本来は悪のカークを背後から銃床で殴りつけるアクションだったのですが、その動きはスポックの人物像にはそぐわないという理由から監督に話をもちかけ、相手役のシャトナーにも提案し、ヴァルカン神経掴みが誕生したのだとか。彼の性格俳優としての姿が窺えるエピソードではないでしょうか（ちなみにヴァルカン式挨拶は、彼と深いかわりを持つユダヤ教から着想を得たのだとか。ザッカリー・クイントはこの手の動きが苦手だったので、輪ゴムで指を留めて慣らしたそうです）。

またレナード・ニモイについての回想録なのですが、ウィリアム・シャトナー自身についても多くを語っており、それが二人の共通点や違い、時には軽い笑いを提供してくれています（レナード・ニモイがスター・トレックの劇場版3と4で監督を務めて成功したから、自分もできると思ってやってみたら大コケしたとか、スター・トレック撮影時の昼休憩での二人のおかしな意地の張り合いなど）。

スター・トレック好きや二人のファンはもちろん、当時の映像業界の裏側や俳優の知られざる苦悩についても知ることができるので、映画や映像に興味のある方なら誰でも楽しめる内容ではないかと思います。レナード・ニモイへの深い愛情が感じられる一冊なので、よろしければご覧になってみてください。

2016.03.20

パレードへようこそ（映画）

イギリスのサッチャー政権の政策について詳しく語れるほどの政治知識は持っていないのですが、炭鉱を閉鎖した政策は現在でもスコットランドやウェールズの人々には評判が良くないみたいです。今まで観た映画の中でもそのような描写が何度かありましたし、スコットランド出身の作家ヴァル・マクダーミドも当時の様子を批判的に描いた短編小説を書いていたはずです。

炭鉱の閉鎖に反対した炭鉱労働者たちはストライキを起こしますが、その動きは警察組織に半ば力づくで押さえつけられているし、労働者の家族は収入もなく苦しい生活を強いられています。その状況を知った同性愛者のひとりが「彼らは自分たちと同じように虐げられている存在だ。だから助けよう」と仲間たちに訴えて募金活動を始めます。そして集まったお金を寄付しようとするのですが、当時は同性愛者に対する偏見が現在よりも強かったこともあり、炭鉱労働者の団体は寄付を受け入れようとはしませんでした。そこで炭鉱町に直接寄付することを思い立ち、ウェールズにある小さな炭坑町オンルウィンに連絡し、承諾を得るのですが、それが彼らに賛同する人々と反対する人々の間に騒動を巻き起こし……、という映画です。

同性愛者が虐げられていた炭鉱労働者を助けようと奮起した、という出だしから突拍子もない感じがするのですが、これが実話に基づいた映画だということだから驚きです。この映画は驚くようなことばかりで、作中に登場するマーク・アシュトンがこんなアイディアを思いついたことも驚きなら、このようなことが現在ではなく1980年代に起こっていたということも驚きですし、この活動がきっかけとなって起こった炭鉱労働者たちの行動は奇跡と言っても差し支えないでしょう。

また、当時の同性愛者が受けていた差別や非難などを描きつつも、それを前面に押し出して主軸となっている実話を脇に置いてしまうほどの暗い物語にしてしまうこともなく、随所に笑いを織り交ぜつつ、コメディ映画としての質を保った映画を創り上げたバランスの良さも見事だと思います。主人公らが実際に遭遇した差別や軋轢はこんなものではなかった可能性もあるのですが、かといって映画のために軽くしすぎているわけでもないし、映画を楽しみつつも差別があったことを受け入れられる境界線ぎりぎりのラインで仕上がっているのは、脚本家や監督の腕が良かったからだと思います。

キャストも豪華で、「パイレーツ・オブ・カリビアン」のデイビー・ジョーンズ役で有名なビル・ナイ（BBCの指輪物語のラジオドラマではサム役を演じていました）、ハリー・ポッターシリーズの脇役で知られるイメルダ・スタウトン（ハリー・ポッターの映画はあまり観てないので、個人的には、昔、OkidokiというCSチャンネルで放送されていた「こちらホゲホゲ法律事務所（原題：Is it legal?）」に出演していた人、というイメージが強いです。ちなみに、舞台「スウィーニー・トッド」で主演女優賞も受賞していたはずですが）、以前にも何度か紹介しているアンドリュー・スコットなどが出演しています。他にも個性豊かな俳優陣が出演しており、個人的にはマーク・アシュトンを演じているベン・シュネッツァーやシアン・ジェームスを演じるジェシカ・ガニングなども印象に残る存在でした。

時には明るい下ネタを交えつつも笑わせてくれて（なので小さい子供には向かないかもしれま

せん)、最後にはしっかりと感動も与えてくれるいい映画なので、ぜひ一度は観ていただきたい映画です。よかったらご覧になってみてください。

2016.05.03

復讐を描いた作品、といったら、まず、何を思い出しますか？

古典好きな人であればギリシャ悲劇やシェークスピアを思い出すかもしれないし、テレビドラマ好きな人なら『半沢直樹』を挙げる人もいるかもしれませんが、私はやはり、アレクサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯』です。古い作品なので、ちょっとツッコミどころのある部分もありますが、それでも先を読まずにはいられなくなる魅力を持った小説で、その面白さは書かれてから百年以上経過しているのに、それほど失われてはいないと思います。好きすぎて英訳本も購入したほどです（フランス語は読めないから……と思ったからなのですが、今はいずれそっちも手に入れたいと思っています）。

その魅力は万国共通のようで、今までに何度か映画化されているし、韓国では『西風の狂詩曲』というゲームを生み出しているし、日本でもGONZOが『岩窟王』という名前でアニメ化しています。こちらは映像表現が独特の美しさや妖艶さを生み出している見事な映像作品なのですが、結末が原作と異なっていて、そこだけが残念でした。

という感じで、『モンテ・クリスト伯』は私の中で復讐を描いた第一位の作品だったのですが、つい最近、これに匹敵するドラマを見つけました。それがこの、『^{ろうやぼう}琅琊榜』です。中国国内でかなりの数の賞を獲っているこの作品は、個人的には日本やハリウッド、イギリスのドラマにも引けを取らない作品だと思います。

ちなみに、なぜ『モンテ・クリスト伯』の話から始めたかということ、同じく小説を読んだことがある人なら気づくと思うのですが、この作品の大まかなプロットや一部の登場人物の関係性が『モンテ・クリスト伯』を意識していると思われるからです（具体的に言うと、フェルナン・モンデゴとアルベール、パシャの娘エデなど）。といっても、その関係性を活かしつつも全く違う物語が展開されているし、人物の造型の深さはこちらの方が上かもしれません。

『モンテ・クリスト伯』ではエドモン・ダンテスが濡れ衣を着せられ、イフ城に捕らえられ、復讐の力を手に入れて舞い戻る様子から描かれていくのですが、『琅琊榜』では後継者の座を争っている皇太子と誉王が謀略を仕掛け合う所から始まり、物語の中に散りばめられた形で少しずつ何があったのかが明らかになっていく形になっています。なので少し唐突に感じる部分もあるかもしれませんが、登場人物のさりげない仕草や台詞に含まれた伏線が明らかになっていくミステリーのような面白さもあります。

主演は三人。主役の梅長蘇を演じるフー・ゴー（胡歌）は『射鵰英雄伝 新版』や『楊家将演義』などでも主役を演じている、中国のトップ俳優の一人です。2006年に交通事故に遭い、『射鵰英雄伝 新版』の撮影を一時中止にせざるを得ないほどの大怪我を負ったそうなのですが、見事、回復を果たし、より深みを増した演技を見せてくれています。^{げいおう}霓凰 役のリウ・タオ（劉涛）は『天龍八部』の阿朱役を演じていたことがあり、一時は芸能界を引退していたそうなのですが、その事実をwikiで知るまで気づかなかったほど、そのままの姿でした。靖王役のワン・カイ（王凱）が出演している他の作品は観たことがないのですが、他の二人に引けを取らない演技を見せています。主演三人は各賞で男優賞や女優賞を獲得しているのですが、その他の脇役も名

優揃いで、何人かは受賞もしているのですが、その事実を知らなくても見入ってしまうほどの演技を披露しています。

様々な思惑から仕掛けられる謀略の数々やアクションシーンが詰め込まれた一級のエンターテインメント作品で、中国ドラマに興味がある人にはもちろん、そうでない方にも一度は観ていただきたい作品です。現在はC Sでの放送のみで、D V Dなどもまだ発売されてはいないようですが、少し前までB S 1 1で放送されていてD V Dも発売された『古剣奇譚』と配給会社は同じようですし、オープニングも日本仕様になっていたのも、じきに発売されるはずですよ。よかったらご覧になってみてください。

2016.06.04

ウェアハウス 13 シーズン 1～4（ドラマ）

アメリカにはSyfy（サイファイ）チャンネルという局があって、そこでは色々なSFドラマが制作されているそうです。最近では、たしか「12モンキーズ」のドラマが制作され、CSのスターチャンネルで放送されていました。今回紹介するドラマはユニバーサルチャンネルというCSチャンネルで放送されていました。残念ながらチャンネルが終了してしまったのでシーズン3までしか観られなかったのですが、久しぶりに行ったビデオ店でシーズン4を見つけることができたので観てみたら、やはり面白かったので、ここで紹介することにしました。

この作品の世界では、様々な人物の強い想念などがきっかけとなって生まれた「^{アーティファクト}遺物」が存在しています。それらは遺物を生み出した存在に関わりのある特殊な力を発揮するのですが、邪な心を持つ者が利用すれば人々に危険をもたらしかねず、また副作用によっても様々な弊害が引き起こされてしまうため、それらの遺物を回収し、誰の手にも渡らないように保管する「倉庫」と秘密組織が生まれました。古代から世界各地にそのような倉庫が作られ、13番目の倉庫が作られたのがアメリカでした。このドラマのメインキャラであるピートとマイカはもともとシークレットサービスに所属していたのですが、任務中に遺物に関わったことがきっかけで、倉庫の一員として様々な事件に遭遇することになります。

このドラマの面白さは、まず、なんといっても想像豊かな「遺物」の数々にあります。エドガー・アラン・ポーのペンやルイス・キャロルの姿見、クトゥルフ神話を創造したH・P・ラヴクラフトの鍵、「パブロフの犬」でおなじみのパブロフのベルや、西部劇で有名なハットフィールド家とマッコイ家の銃、料理研究家のジュリア・チャイルドの前掛け、スターリンのアイマスクなど、有名人にちなんだ遺物が登場します。時に重大な危険をもたらし、時にはギャグのような効果を発揮する遺物によって物語が展開されるのですが、知っている人物が意外な形で遺物に関わっているという点にもわくわくしました。遺物に関わった人物について知らないとその効果が生まれた理由がぴんと来ないこともあるのですが（たとえば、親しかった故人の幻影が見える「フーディーニの財布」は、奇術師のフーディーニが亡くなった母親の魂を呼び出してもらうために降霊術に関心を持っていたという事実を参考にしている、というように）、気になった遺物と関わりのある人物を調べてみると、意外な発見ができるのではないかと思います。

もちろん、物語も面白いです。基本的には倉庫のメンバー達の漫才のような掛け合いで笑わせつつ、遺物が引き起こす事件を描いているのですが、そこからさらに、倉庫の歴史にまつわる物語や、それぞれの動機から倉庫に敵対する人物との戦いなどが描かれていきます。シーズン2からはある有名なSF作家が物語に関わってくるのですが、その展開には驚かされたし、設定も十分にあり得るかもと思わせてくれるものでした。

主演俳優の多くは、どちらかと言えば、脇役としてドラマに出演していることが多い人たちなのですが、個性的な登場人物を見事に演じていると思います。主役のピートとマイカのコンビも面白いのですが、個人的には、アーチャー役のソウル・ルビネックの愛嬌ある表情や役柄の面白さに惹かれています。

アメリカではすでに最終シーズンのシーズン5まで放送され、DVDにもなっているのですが

、日本ではまだシーズン４までしか発売されていません。シーズン４のラストはとても気になる部分で終わってしまっているのです、早く最終シーズンを発売してくれないものだろうかと心から願っている状況です。とはいえ、現在日本で観ることができるシーズン４まででも十分に面白いので、ＳＦや歴史に関心があったり、気軽に楽しめるエンターテインメント作品が好きな人は一度はチェックしてみていただければと思います。

2016.07.10

スライムの野望（ゲーム）

今回紹介するのは、3DSでダウンロード購入することができる作品です。あえて8ビット風のグラフィックや音楽を使って、ちょっと懐かしい感じがするけど面白いゲームを発売しているフライハイワークスの（このゲームの開発はアルタイルワークスです）「スライムの野望」は、その題名からコーエーの某戦略シミュレーションを思い出させてくれますが、人間に戦いを挑む主役は世界最弱の生物であるスライム、という意外な設定です。単に主役をスライムにしたらだけと思われる方もいるかもしれませんが、これが驚いたことに、本格的な戦略ゲームに仕上がっているのです。

彼らの武器は「人間の動きを乗っ取る」ことと、「種ごとに異なる能力」だけ。

その能力は、「人間を乗っ取れる確率が高め」「好きな場所にテレポートできる」「味方ユニットをテレポートさせる」「敵の武装を溶かす」など、色々あります。好きな場所にテレポートできるスライムは序盤から味方になるのですが、このスライムを使えば比較的楽かというところでもないです。早い時期にテレポート移動して憑依しても、周囲の敵ユニットから袋叩きに遭い、即消滅してしまうからです。

スライムが乗っ取れるユニットは一体だけなので、憑依できる数＝出撃数（憑依キャラが倒れればそれで消滅）ということになります。なので、数ある敵ユニットの中から憑依する対象を厳選しなければなりません。また、強力なユニットは乗っ取れる確率が低めなので、「乗っ取る確率が高い」能力を持ったスライムか、「武装を溶かす」などで確率を上げてからでなければなりません（テレポートできるスライムの乗っ取り能力は普通です）。しかし、スライムの防御力は非常に低いので、敵の行動を計算した上で動かないとすぐに倒されてしまいます。

ステージの内容に合わせて、出撃させるユニットを選択することも重要です。たとえば、ある強力な魔法少女が登場するステージがあるのですが、ここは中心部への道が存在しないため、空を飛んだりテレポートするユニットが必要となります。しかし、魔法少女の魔法は回数が決まっているのですが、とても強力で、憑依してもすぐに倒されてしまいます。そこで、「味方ユニットをテレポートさせる」スライムと、「憑依するとユニットの魔法防御力が上がる」スライム、「テレポートできる」スライムを出撃させ、機を見て一斉に憑依を行い、他の敵ユニットを片づけつつ、魔法防御力を上げるスライムを憑依させたユニットを回復ポイントに移動させて、魔法を使い果たさせる、という戦略が必要でした。

こう説明するとけっこうハードルの高い作品と思われるかもしれませんが、これはあくまで「難しい」を選んで戦った時の話で、各面には「かんたん」「ふつう」「むずかしい」の基本難易度とチャレンジLv. 1～5までのステージが存在し、好きな難易度で楽しむことができます。値段が500円ということもあって、気軽に手に取ることができるので、気になった方は遊んでみていただければと思います。

他にも、このようなダウンロード専用ゲームは、大作ソフトほどの開発費を必要としないこともあってか、値段がお手頃で、さくっと遊べるアクションゲームや、大ヒットは生みにくいけど固定ファンが多いパズルゲーム、設定が斬新なゲーム等が多く発売されているので、ぜひチェッ

クしてみてください。

2016.08.08

追記：

「ガリシア共和国」というステージまで進めば、攻撃されると分裂したり、憑依キャラが倒されてもスライムに戻る能力(どちらも1ステージで1度限り)を持ったスライムを仲間にすることができます。

「フェニックス」 能力：憑依時に倒されても何度でもスライムとして復活する。
ガリシア共和国・交易都市ビーゴのチャレンジで入手可能。

「Earth to echo」「ビッグ・ゲーム」（映画）

今年の夏は暑すぎて体の調子がおかしくなったり、色々な雑事で立てこんだりしていました。何を紹介しようかと悩んだまま日が過ぎていたのですが、紹介しようかちょっと悩んでいた作品の評価をアマゾンでチェックしたら、思っていたよりも良くなかったので、あえてそれを紹介してみようかと思います。

「Earth to echo」は、観ていて「E. T」や「スタンド・バイ・ミー」、「ニューヨーク東8番街の奇跡」などの映画を思い出しました。子供たちが冒険に出て、危機に立ち向かいながら成長していく、温かみの感じられる作品です。

高速道路建設のために立ち退きが決定していた区画に住む三人の少年は、離ればなれになってしまうことを案じていた。そんな時、一部の人の携帯に異常が発生していたことを知り、それを調べていくうちに、ある地点を差す地図であることを突き止める。別れる前の思い出にと、三人は親に、友達の家泊ると嘘をついて自転車で地図のポイントに向かったのだが、そこで見つけたのは正体不明の機械生物だった。少年たちは「Echo」と名付けた機械生物と意思疎通をして、自分の星に帰りたいがっているのだと察し、更新された地図を頼りに、Echoの願いを叶えようとするのだった。

物語の筋は前述した映画の枠を大きく飛び越えるものではないのですが、主人公の少年少女の性格設定が物語にちゃんと結びついているのがいいです。例えば、この映画は主にタックという少年が撮影しているカメラの映像で物語を展開させているのですが、彼がなんでも撮影しようとするのは、『学校だけでなく、家族からも自分の存在を気にかけてもらっていないという意識から、注目を集めようと普段から様々なものを撮影して動画サイトに掲載しているから』とか、現在は里子として暮らしているが、その境遇ゆえに孤独のつらさを知るウォルターはEchoに共感し、行動の結果が危険をもたらすかもしれないと分かっているけどEchoを助けようと突き進んでいく、という風に、それぞれの行動に違和感がないので、物語から心が離れることなく、楽しめました。

出演陣にあまり知っている顔はいなかったのですが、様々な場所で主人公らの邪魔をする「建設業者」の役で、潔癖症の探偵が活躍するドラマ「名探偵モンク」のディッシャー警部補を演じる、ジェイソン・グレイ＝スタンフォードが出演しています。

「ビッグ・ゲーム」は墜落するエアフォース・ワンから脱出したアメリカ合衆国大統領が、北欧の森を舞台に自分の命を狙う存在と戦うという、よくある設定の映画なのですが、随所に北欧流の味付けがなされています。例えば、まともに銃も扱えないヘタレのアメリカ合衆国大統領。こんな設定はアメリカの映画ではコメディでもない限り、絶対に採用されないと思います。

この映画はフィンランドで製作されたものなのですが、北欧は以前も少し話題にした、ノルウェーには本当にトロールが存在していて、それを狩ることを仕事にしているトロール・ハンターを追った「トロール・ハンター」という映画や、本当のサンタは子どもを襲う怪物で、氷

の中に封印されていたが目覚めてしまった真っ裸の爺サンタと戦う「レア・エクスポーツ」など、ハリウッド映画などとは少しテイストの異なる映画があって（ヨーロッパはヨーロッパで、また異なりますが）、その価値観やユーモアを楽しめるか否かで、映画に対する印象がずいぶん変わってきます。

この映画を「エアフォース・ワン」や「エンド・オブ・ホワイトハウス」のようなアクション映画と同じだと思って観ると、肩透かしをくらった感じを受けます。どちらかというと、まったく弓を上手く扱えないハンターの少年と、ヘタレのアメリカ合衆国大統領という、二人のおちこぼれが困難を通して成長する映画、として楽しんでもいただければと思います。

少年ハンターのオスカリを演じるオンニ・トンミラは「レア・エクスポーツ」にも登場していたそうなのですが、申し訳ないことにちょっと憶えていませんでした。大統領を演じるのはサミュエル・L・ジャクソン。シークレットサービスのモリス役は、ドラマ「ROME」では粗野なブッチ役を演じ、「デクスター」ではマフィアの幹部と、見事な演技分けをするレイ・スティーンソン。副大統領役はドラマ「エイリアス」で主人公の父親役を演じていたヴィクター・ガーバー、ハーバート役は気のいいおじいさんからシリアスな役まで多彩な役を演じている英国映画好きにはおなじみのジム・ブロードベントなど、かなり豪華な配役です。

クセの強い映画ではあるのですが、ツボに入れば楽しめると思うので、確かめるつもりで一度ご覧になってみていただければと思います。

2016.10.02

トランボ ハリウッドに最も嫌われた男（映画）

ブライアン・クラinston演じるトランボがバスルームの浴槽の中で湯につかりながら脚本を書いている。誕生日のお祝いパーティーにも加わりとうしないことに怒った娘が文句を言いに行くと、トランボは娘を怒鳴りつける。ゴールデングローブ賞の授賞式の際に流れた紹介映像だけで判断していた時は、ずいぶんとアクの強い性格の脚本家の話なのかと思っていたのですが、後で解説を読んで「赤狩り」をテーマにした映画だったと知ったというくらい、トランボについて知りませんでした。

全米図書賞を受賞した経歴も持つ作家で脚本家のダルトン・トランボは、共産党の思想への支持を表明していたために「赤狩り」の標的となり、仕事を奪われてしまいます。しかし偽名で脚本を書き続け、ついには『黒い牡牛』と『ローマの休日』で二度もアカデミー賞を受賞してしまった、そんな彼が実名復帰するまでを描いた映画です。

「赤狩り」というのは、（雑に解説すると）冷戦下でのアメリカで、ソ連に対する警戒感から、共産主義に関心を持った過去を持つ人々をロシアのスパイなのではないかと疑い、糾弾していった一連の事件のことです。ハリウッドの映画業界や舞台業界にもこの影響は広がり、疑われた人々は「アカ」である（と思われる）人物を密告しなければ村八分的な制裁を受けて仕事が貰えなくなりました。そのため、仕事を得るために他人を密告する人もいて、業界内にも様々な軋轢を生み出しました。マーロン・ブランドが映画監督のエリア・カザンともめたのも、「赤狩り」が影響していたという話も読んだことがあります。

私が好きな演技論の著者で、アメリカではとても有名な演技教師のステラ・アドラーという人がいるのですが、なぜこれだけの演技論を書くことができ、舞台俳優としても活躍していたはずなのに、そのキャリアを調べてもあまり見つからないのか疑問を抱いていました。舞台に重きを置いているから映画の出演記録がほとんどないということもあるのかもしれませんが、それでも演技を教えながら映画や舞台に出演することも不可能ではないだろうにと思っていたのですが、なんとなく「赤狩り」関係の本を読んでいた時に、もしかしたらこれが関係していたのではと思ったのです。過去に共産党の集会に参加したことがあったというだけで糾弾される理由になったのだから、スタニスラフスキー（現在、一般的に知られている演技論のほとんどに影響を与えている演技論を生み出した、ロシアの伝説的俳優です）と交流があったという事実は、より過酷な追及を受ける原因になったのではないのでしょうか。

多くの才能ある人々を苦境に陥れたハリウッドの汚点ともいえる出来事ということもあってか、「赤狩り」を描いた作品はいくつもあります。例えばアーサー・ミラーの戯曲「るつぼ」は、セーラムの魔女裁判を題材にして、赤狩りを描いたと言われています。また、ロバート・デ・ニーロが主演を務めた映画『真実の瞬間』も「赤狩り」によって仕事を奪われた主人公の物語です。たしかこの映画だったと思うのですが、映画の中で名前は登場しないものの、明らかにゲイリー・クーパー主演の映画『真昼の決闘』を撮影していると思われるスタジオのシーンがあり、そこで彼が仕事を得るために他人を密告したことを仄めかして描かれていたので驚いた覚えがあります。

「赤狩り」の圧力に屈しなかったトランボという人物の持つ豊かな才能やユーモアに触れることができるのがこの映画の面白さであることは間違いないと思いますが、私にとっては、その他の人々の別の一面を知ることができたのも興味深かったです。名優だとは思っていましたが、カート・ダグラスが「赤狩り」の風潮に屈しない芯の強い一面があったことは知りませんでしたし、俳優に手厳しい仕打ちを行う冷酷な監督というイメージしかなかったオットー・プレミンジャーがトランボの実名復帰に一役買っていたことも意外なエピソードでした。反対に残念だったのは、ジョン・ウェインが赤狩りの旗振り役を務めていたことです。マーロン・ブランドがアカデミー賞の授賞式でジョン・ウェインを怒らせるようなスピーチをしたという有名なエピソードがあって、ネイティブアメリカンの権利の問題からこのような発言を行ったと思っていたのですが、もしかしたら、この出来事も関係していたのかもしれません。

ちなみに、この映画ではマッカーサー議員やFBI長官のフーバーについてはそれほど細かく描かれてはいません。フーバーがどのようなことをしてきたのかについては、ティム・ワイナーの『Enemies（邦題：FBI秘録）』に詳しく書かれているので、興味を持たれた方は目を通してみてはいかがでしょうか。この本ではハリウッドの「赤狩り」についてはほとんど触れられていませんが、マッカーサー議員がどうなったかについても書かれています。

この映画は「赤狩り」を描きながらも、その根底には、現在も続いている、相容れない思想への迫害や弾圧に対する警鐘が描かれているように思えます。同じように、この映画を楽しんだ後にトランボが苦境に陥っていた時に脚本を書いた映画を観てみると、彼が映画に込めたメッセージをより深く感じ取ることができると思うので、興味を持たれた方はそちらもご覧になっていただければと思います。

2017.02.01

ずいぶんのご無沙汰してます。今も毎月映画は観ているし、ゲームの中でも幾つか紹介したいものはあるのですが、どう紹介しようかと悩んだり、他にも手をつけていることなどが増えてきたこともあって、なんだかんだで時間が過ぎていってしまいました。ただ、だからといって何も書かないでいるのもなんだかなあという気がしていました。

なので、ちょっと実験的に、軽い感じでその月に観た映画の中でおすすめのことを簡単に紹介してみることにしました。一応、一か月に十数本ぐらひはチェックするようにしているのですが、それでもまだ録画した映画が数十本ストックされている状況なので、紹介する映画はちょっと古い物からずいぶん古い物など、かなり時期に開きがあるのですが、最後まで観た上で紹介しているので、どうかご容赦いただければと思います。

「THE FORGER 天才贋作画家 最後のミッション」

刑務所に収監されている贋作絵師が、末期ガンの息子と残された時間を過ごすために、手を回して出所を早めてもらう。その代価として、モネの贋作を作るように迫られる。出所に手を貸した人物は麻薬を扱っていたため、麻薬捜査官が密かに調査していたが、捜査官が贋作絵師の存在に気づいたため、贋作絵師も関係者としてマークされてしまう。そのような状況の中で、余命の短い息子との関係を修復しようとする物語です。

原題はThe Forgerのみで（Forgerは「贋作絵師」のことらしいです）、サブタイトルを見ると華々しい犯罪映画を想像してしまいがちですが、犯罪映画としての要素はそれほど斬新でもないし、驚きを感じる部分は少ないです。どちらかといえば主人公の贋作絵師とその息子の関係を描いた映画で、親子の物語を楽しむ作品です。贋作絵師を演じるジョン・トラボルタや、その父親を演じるクリストファー・プラマーの演技が良くて、最後まで楽しめました。佳作ですが、個人的に好きなタイプの作品です。

「アイ・ウェイウェイは謝らない」

中国で活動する芸術家のアイ・ウェイウェイの活動を撮ったドキュメンタリー。彼が創る芸術、たとえば漢の時代の壺を割ったり、コカコーラのラベルを描いたりする前衛的な芸術の価値については観る人によって大きく分かれると思うのですが（個人的にはそれほど魅力は感じないです）、彼が国家に対して色々な活動をしている様子は、パフォーマンスとしての側面を含んでいるとしても、一見の価値があると思います。ドキュメンタリーのラストは少し衝撃的な形を迎えるのですが、それはかえって、彼と同じ状況に遭遇した人々がなぜそうなったのかを最もわかりやすい形で説明したものだと思います。中国のドラマや映画もよく観ているのですが、そこからは知ることができないもうひとつの中国の姿がよくわかる作品です。

「スポットライト」

アカデミー賞の作品賞と脚本賞を受賞しているので、あえてここで紹介する必要もない映画です。

少し関心があれば、カトリックの聖職者が第二次世界大戦時にナチス幹部の南米への逃走を手伝っていたり、子供への性的虐待に関与していたという話は耳にするので（私もそのような話を幾つか聞きかじっていたので）、この映画の紹介を見てもそのストーリーに目新しさは感じず、受賞を知った時もそれほど強い関心は持っていませんでした。だから一応という感じでチェックしていたのですが、冒頭の送別会の様子のユーモアのある会話や、その後に登場するリーヴ・シュライバーの落ち着いた演技などを観て、おやっと感じ、そこから引き込まれていきました。

ストーリーも説明する必要もないくらいなのですが、個人的に好感が持てたのは、不正に立ち向かって暴いた新聞記者の勝利、という単純な図式ではなく、かつて自社の新聞も事態を把握していながらもきちんと扱っていなかったという自戒が描かれていた点です。映画の紹介では前者を思い起こさせるような説明ばかりだったのですが、このような自戒を意識する、意識し続けることがメディアにとって最も大事なことなのではないでしょうか（彼らが社会正義だけを考えて行動しているわけでもなく、新聞記者のエゴを持っていることを感じさせる部分も描かれています）。

映画に引き込まれていたもので、最後に登場したリストを目にした時は自然に鳥肌が立っていました。ただ、聖職者による児童虐待やそれ以外の問題について、今でもちょくちょくニュースなどで耳にするので、必ずしも自浄されているとはいえないところが残念です。もちろん、このような問題はカトリックに限ったことではないのですが、神（あるいは神の名）を利用しているという点で、このような犯罪はその宗教コミュニティの中でより重く裁かれるべきではないかと思うのですが。

「神様メール」

実は神様はろくでなしで、家族にも横暴にふるまうので、その状況に我慢できなくなった神の娘が父親に反抗して人間の世界に降り、新たな新約聖書を作ろうとするという、ベルギーの映画です。『アメリ』のような、少し奇想天外で現実離れしたファンタジーのような映画で、冒頭の展開を素直に受け入れられるか否かで評価が大きく分かれると思いますが、そこさえ受け入れられればなかなか面白い作品です。

邦題では、この方がキャッチーなこともあってか、神の娘エアが送信してしまったメールのことが題名になっているのですが、物語はあくまで新・新約聖書を作っていく、つまり、使徒を探し、奇跡を起こしていく過程が主眼になっています。神の娘が使徒を見つけるたびに、最後の晩餐の絵に人物が追加されていく様子は個人的にはツボでした。

こんな悪いことがばかりが続いて、本当に神がいるのだとしたら、どうしてこんなことが起こるのか。という疑問を持ったことのある人も少なくないかと思うのですが、こんな神様だったとしたら、それでも不思議ではないなと観ながら感じてしまいました。

カトリーヌ・ドヌーブも使徒の一人として出演しており、夫に愛想を尽かした彼女はゴリラと

恋愛関係になります。そんな奇想天外さを楽しめる人にはぜひ観ていただきたい作品です。

今月は（先月も、だったかもしれませんが）各地で大雨の被害があって大変でしたね。幸い、そのような被害に直面することはなかったのですが、ちょっと昔の旅番組で九州や東北の様子を目にするたびに、ここも洪水などの被害に遭っているのだろうか、とか、この間地震に遭ったばかりなのに、と気がかりになってしまいました。暑さのせいで体もだるいのですが、皆さまもお気をつけ下さい。

「イーグル・ジャンプ」

子供の時にオリンピック選手になることを夢見て、半ば無謀にも思える行動を続けながらも、最後にはイギリスのスキージャンプの代表選手となってオリンピックに出場した、実在した選手の物語。最初はちょっと大丈夫かなと思わずにはいられないほどの無謀さなのだけれど、周囲に馬鹿にされ続けても目的に突き進んでいく主人公の姿に、だんだんと引きつけられていきました。金メダルを獲れたわけではないのだけれど、主人公の姿を見ていると、冒頭に紹介される「参加する事に意義がある」という言葉に込められたオリンピックの本質の大切さを改めて感じる事ができて、意識していないつもりでもメダルを獲る事を重要視している自分の感覚に気づきました（本当はあの場所に立っているだけでもすごいことなのに）。

主人公がスキージャンプに転向することを決意して教えを乞うコーチ役にヒュー・ジャックマン、オリンピックの実況解説者役にジム・ブロードベント、他にもクリストファー・ウォーケンなど、なかなか配役もいいのですが、一番の驚きは主人公を演じるタロン・エガートンでしょうか。あまりにも冴えない風貌に変化しすぎていて、彼が「キングスマン」の主演であることに気づくまで、30分ほどかかりました。そんな彼の変化も一見に値するかと思います。

「あなた、その川を渡らないで」

韓国の老夫婦の一年ちょっとなを撮影したドキュメンタリー。題名から脱北関係のことでも描かれているのかと勝手に思っていたけれど、観てみるとそんなことはなくて、淡々と二人の生活を記録した作品でした。最近幼稚園児でも好きな相手がいるくらい恋愛が当たり前になっているけれど、この夫婦ほど純粋に相手を想っている人はどれくらいいるのだろうかと考えてしまうぐらい、二人の姿が強く胸を打ちます。あと、途中で長男と長女が喧嘩している様子は、年老いた家族のいる家なら身に覚えがある内容ではあるのだけれど、涙を浮かべている老夫婦がすごくかわいそうでした。たまになくなってしまいました。

或る終焉（映画）

ストーリーの紹介をしようとする、とても短い内容になってしまう映画です。

エイズや、脳卒中、がんなどの重い病気にかかった患者を熱心に看護する看護師の物語。これだけです。途中、セクハラで患者の家族から訴えられ、勤めていた会社を解雇された所から、彼の過去や家族関係などが少しずつ明かされていくのですが、このセクハラ問題が何か大きな要素に発展していくことはありません。

カンヌ映画祭の脚本賞を受賞している映画で、評価は観る人によって大きく分かれる作品だと思います。

いつもはカンヌの受賞作とは相性が悪く、あまり面白いと思えないまま見終えてしまうこともしばしばなのですが、これは最後まで興味深く観られた作品でした。主演がティム・ロスだったから、ということもあったのかもしれませんが（彼の演技が好きで、出演している作品はなるべくチェックしているのです。といいながら、まだ観ていない映画も何本かあるのですが）。

この映画はストーリーの変化を楽しむのではなく、登場人物の行動の細部に注目しながら空白部分を想像していく作品なのではないかと思います。たとえば、主人公が周囲の人から何かを尋ねられたりした時に、なぜ患者の家族のふりをするのか。ふりをする事で何かを得たいからか。それとも、そうすることで隠したい何かがあるからなのか。もしくは、単に患者の為にしているということを伝える必要はないと思っているからなのか。他にもそんな細部はいくつかあって、走るカットがかなり多いのも、その細部の一つではないのかと個人的には疑っています。

原題の「Chronic」は慢性の病気であったり、常習的な、などの意味を持つ言葉だそうですが、これも単に主人公が看ている患者の病気を差すのか、それとも主人公がずっと続けていた何かを差しているのか、など、観終わった後も考えてしまう作品でした（でも、この解釈、アマゾンのDVDの紹介とは全然違うんですね…。私の見方がひねくれているんでしょうね、きっと）。

冒頭から本当に重病の人なのではないかと思ってしまう衝撃的な身体描写や、重い病気にかかった人とのやりとりが続く映画なので、家族に重い病気を抱えている人がいる方や、身内を亡くしてまだつらい方などは、心が落ち着くまでは観ない方がいい作品かもしれません。

一応、最後に私なりの結論を書いておきます。もちろん、違っている可能性が高いので、話半分くらいで読んでください。

以前、何かの本で「走るカットは何かから逃げていることを示唆している場合がある」というようなことを読んだことがあって、この映画の場合、ジムのルームランナーなどで走り続けるカットが何度も使われているので、それが当てはまるのではないかなと思いました。

では、主人公が走り続けて何から逃げようとしているのかというと、難病の息子を安楽死させ

たことによって生じた罪悪感ではないでしょうか。患者の家族のふりをするのは、患者のために知識を得ようとしていた場合もあるけれど、どちらかといえば、本当のことを言わないで済ませるために行っているように見えたのです。

後半、もはやガンが手遅れだと知ったマーサが「息子さんにしたのと同じように」と安楽死を頼み、一度は断りますが、患者のことを第一に考える主人公は最終的に承諾します。ですが、そのせいで罪悪感は一層大きくなってしまった。

最後、ランニング中に車に轢かれてしまうという衝撃的なラストは、逃れようとしていた罪悪感に押しつぶされてしまったことを隠喩しているように感じたのです。

以上が私の結論です。もしよろしければ、一度ご覧になって自分なりの結論を考えてみるのも面白いのではないのでしょうか。

さよならセプテンバー 全3巻（漫画）

オーサ・イエークストロムさんの漫画を初めて目にしたのは、朝日新聞の「Be」の「北欧女子オーサの日本探検」というコーナーでした。たしか、一年半から二年ぐらい前から掲載されているはずです（去年の4月からの記事は保存してあるので、おそらくその数か月前ぐらいだったかと思います）。

このコーナーでは毎回、イエークストロムさんが日本の様々なものを体験し、その内容に合わせた四コマ漫画を掲載しています。単に外国人の目から見た日本を描いているのではなく、四コマとしての構成がしっかりしていて、オチも面白かったので、すごいなあと感じながら楽しんでいました。ちょうどドラクエなどのゲームの四コマ漫画が流行していた時代に育ったので、色々な質の作品を読んできたつもりですが、その中でも面白かったものと比べても遜色ないほど面白かったので、素直に驚いたのです。

そしてイエークストロムさんがスウェーデンで活躍していた時に書いたのが、この「さよならセプテンバー」です。スウェーデンのマンガ専門学校を舞台に、主人公のアレックス、シェアハウスの同居人のジャンネとクリストファー、他人の本質を感じ取るサイキック的能力を持つリリアンたちの学生生活が描かれています。そして物語が進むにつれて、主人公アレックスの友人だったミリとの関係が生み出した心の闇とその過去への決別や、同級生たちの物語が描かれていきます。

北欧という部分をかなり強調した宣伝文句などを事前に目にしていたので、どれくらい違うものなのだろうかと構えて読み始めたのですが……、「……あれ？」という感じでした。アメリカのグラフィックノベルを少し読んでたり、海外ドラマをよく見ているので、海外の表現に少しは慣れているということもあるのかもしれませんが、それを差し引いても、ほとんど違和感がなかったのです。

たしかに、昔の作品ということもあって絵が少し荒い部分はあるし、擬音の表現がちょっと違うかなと思った箇所がひとつ（煙草が落ちる時の「ぺちゃ」）、少し聞き馴染みのない単語（「インキング[ペン入れのこと]」「パダワン」）、変わった表現（いきなり、ガラッと岩が降ってくる心情描写）はありますが、それを除けば、国籍によって理解が妨げられることのない、（未熟な要素はあるけど丁寧に描かれた）若者の成長と心の葛藤を描いた普遍的な物語でした。スウェーデンのマンガ専門学校の生徒がどのような勉強をしているのかもよくわかりますし、とても面白い作品でした。

個人的な要望としては、もう少しじっくりとページを使って、アレックスたちの漫画がどのように成長していったのかを描いて欲しかったし、友人たちがその後どのような生活を送っているのか見てみたかったし、3巻に登場する日本人ハーフのタツミ・コウジが自分の彼女とどういう決着をつけるのかも知りたかったです。

少女漫画や女性誌の漫画を読んでも人にとっては、違和感なく読める作品だと思います。ただ、もしかしたら「北欧女子オーサの日本の不思議」などを読んで、明るく澆刺とした印象を受けたままこの漫画を読む人の中には、その内容の印象の違いに驚いたり、拒絶反応を示してしまうこともあるかもしれません。ですが、そういうイメージは一度、脇に置いてから読んでいただければと思います。

ちなみに、作中に登場した「真実か責任か」（トゥルース・オア・デア。Dareには「あえて～をする」という意味がある）というゲームは、回した瓶の口の先にいる人物が、指定された事柄について真実を話すか、それを拒否する場合は指定された罰ゲームを受ける、ちょっと王様ゲーム的な感じの遊びです。イギリスかアメリカでこのゲームを題材としたホラー映画もあるくらい、メジャーな宴会ゲームです。

2017.9月に観た、その他のおすすめ映画

「マイ・ベスト・フレンド」 Miss You Already

一方は乳がん、一方は不妊に悩む親友の友情を描いた映画。主演はドリュー・バリモアとトニ・コレット。病気をしっかりと描きつつも、軽快さで暗くならず楽しめるように作られています。女性が親しみやすい映画だけれど、男性でも楽しめるし、観ておいた方がいい作品です。

ちなみに、この映画で初めてキット役のドミニク・クーパーがいい役者だと素直に思えました。今までにも何度か別の映画で見えていたのですが、いずれも自尊心が強い役のせいか、オレ様感のある表情ばかりしていたので、あまり好きではなかったのです。でも、この映画ではそういう印象を感じなかったのです。

「ミス・シェパードをお手本に」 The Lady in the Van

映画「カルテット！ 人生のオペラハウス」のエンディングで見た若い頃の写真の美しさにも驚いたけど、マギー・スミスは現在も、その頃の気品と美しさを失っていない女優だと思います。

「ダウントン・アビー」のヴァイオレット役の頑固さやユーモアを合わせ持った姿は、シリーズを通して最も楽しみな存在でした。役によって立ち振る舞いに変化し、その人生の背景を感じさせてくれる。そんな彼女がホームレスを演じるだなんて、かなりの衝撃でした。

これは劇作家アラン・ベネットと、彼の家の前にボロボロの車を止めて十五年間も暮らしていた女性、ミス・シェパードとの交流を描いた作品で、内容は「ほとんど」実話だそうです。少しテンポはゆっくりとしていて、コメディでもあり、介護の物語でもあり、神の悪戯で人生を狂わされた一人の女性の物語でもあります。個人的にはクライマックスはかなり衝撃的でした。

冒頭の過去のシーンを、メイクで皺を少し隠しただけで、後は動きで年代の違いを表現しているマギー・スミスの演技はもちろんですが、作家としての自分と日常生活を送っている自分の二役を演じているアレックス・ジェニングスの演技も自然すぎて、本当に二人いるのかと思うぐらいでした。他にもイギリス映画好きにはおなじみのロジャー・アラムやジム・ブロードベントなどが出演しています。

ちなみに、いちおう一言書き添えておくと、お食事中に観るのはおススメしません。ゴミの描写などもけっこうあるので。

余談ですが、去年か一昨年のゴールデン・グローブかエミー賞の授賞式で、いつも授賞式にこないんだから賞なんかあげなくてもいいじゃないかとからかっていた司会者には本気でイラッとしました。今でも許せない笑いのネタのひとつです。

「手紙は憶えている」 Remember

認知症を発症し、目覚めると妻が亡くなったことすら思い出せないゼブは、妻の喪に服すユダヤ教の儀式を終えた後、同じ施設に暮らすマックスから、以前から立てていた計画の話を聞く。それはゼブとマックスの妻の家族の命を奪ったアウシュヴィッツのブロック責任者を捜しだし、罪を償わせるというものだった。足が不自由なマックスは、責任者が「ルディ・コランダー」と

いう偽名を使ってアメリカで暮らしていること、同じ名前を持つ四人の居場所を調べ上げ、彼らを見つけ出すための手順を記した手紙をゼブへと託すのだった。

けっこう色々な映画祭でノミネートしたり、主演男優賞などを受賞している作品です。記憶喪失サスペンスというと、ガイ・ピアーズ主演の「メメント」という映画を思い出しますが、こちらは、認知症の老人が手紙を頼りに復讐相手を探し出すという、リアリティを失いやすそうな不安定な物語を、監督と脚本家とゼブを演じるクリストファー・プラマーの演技が見事に支えています。他にもブルーノ・ガンツや「Breaking Bad」のハンク役で有名になったディーン・ノリスなどが出演しています。個人的には「スパイ大作戦」の頃からマーティン・ランドーのファンなので、彼の演技が見られたのも嬉しかったです。

2017.10月に観たおすすめ映画

今月はあんまり映画が観られなかったので、おすすめ作品はちょっと少ないです。
ゲームもクリアしていないわけじゃないんですけど、ちょっとおススメできるほどではなかった
ので、
紹介は見送りにしました。
もちろん、面白い作品もあって、紹介したいとは思ってるんですけど、なにぶん、規模の大きな
作品ばかりなので、いまだ遊びきれていないのです。
いずれ紹介できればいいなと思うのですが.....。

では、今月のおすすめです。

「ハンズ・オブ・ラヴ 手のひらの勇気」

2015年にアメリカの最高裁が同性婚を認めた判決に影響を与えた実話を映画化した作品。
同性愛者の女性警察官ローレルは末期ガンになり、パートナーのステイシーに遺族年金を遺した
いと願うも、パートナー法を郡の公務員に適用させることに難色を示す委員会によって、要望は
否決されてしまう。ローレルと相棒の刑事はなんとかその決定を覆そうとし、やがてその動きは
大きな動きになっていくのだった。

ジュリアン・ムーア、エレン・ペイジ、マイケル・シャノンなど演技派ぞろいなので、安心して
観られる映画です。日本では同性のパートナーに財産を残すには養子縁組しかないという話を
読んだことがあります。現在はどのようなのでしょうか。性別という枠組みに捕らわれずに、平等と
いうことも意識せずに、ごく普通に生きられるような社会になって欲しいものですが。

「メカニック：ワールド・ミッション」

チャールズ・ブロンソン主演のアクション映画のリメイク第二弾。リメイクという制約が解かれ
たからか、今回の方がアクションも動きも良く、暗殺テクニックも意表を突くもので、面白かつ
たです。個人的には、ここ最近のジェイソン・ステイサム主演の作品の中では、いちばん好きな
作品でした。

Alena（漫画）

オーサ・イエークストロムさんの「北欧女子オーサが見つけた日本の不思議2」に登場する、友人のキムさんこと、Kim W. Anderssonさんが書いた漫画です。

スウェーデンでは賞を獲得して、実写映画化もされている作品で、最近ではブラジルでもイベントがあったとか。

親友のジョセフィンを失ったアレーナは、その一年後、周囲との関わりを避けるようになっていた。

そんなアレーナを気遣う男子生徒に好意を持っていたラクロス部のリーダー的存在の女子が主導となって、

事あるごとにアレーナに様々ないじめを行う。

一方、アレーナのそばには死んだ親友と同じ名前を持つ存在がいて、その存在が次第に、ラクロス部の女子や男子生徒に対して暴力をふるっていくのだった。

紹介を読んだ時は、主人公Alenaへのいじめと復讐がメインの物語だと思っていたのですが、根底には、拒絶してしまったり、受け入れられなかった愛情がきっかけとなって起こった悲劇が描かれた

作品です。

絵柄はアメコミ風なので、スウェーデンのマンガもそういう表現が一般的なのかと思いきや、日本の漫画に影響を受けた作品もあり、想像していたよりも多種多様ようです。

「魔法使いの嫁」や「血界戦線」などの作品もすでにヨーロッパや北欧でも知られているようだし、

国境が生み出す垣根は以前よりも確実に低くなっているのだなと感じました。

興味を持たれた方は、某サイトの洋書コーナーでチェックしてみてください。

北欧女子オーサが見つけた日本の不思議 3（漫画）

オーサ・イエークストロムさんの四冊目の四コマ漫画本となる

「北欧女子オーサが見つけた日本の不思議 3」では、
前作の「ニッポン再発見ローカル旅」と同じく、朝日新聞の「Be」に収録されていたマンガの続きや、
日本で見つけた様々な不思議、そして今回はスウェーデンの習慣や文化などについても
知ることができます。

また、過去作にも通じる点ですが、スウェーデン人としての感性で、
日本人が当たり前だと思っていることに疑問を呈したり、
日本の労働環境など、おかしいと感じるところにははっきりとおかしいと書きつつ、
スウェーデンと比べて日本の方がいいと思う所は素直に良さを認めて下さっています。
（スウェーデンのイマイチな点も隠さずに描いてくれている所も公平だと思います）

生まれ育った場所だからこそ、当たり前すぎて気づかない部分に、
違った視点から光を当てて下さっているので、改めて日本のいい所を再認識させてくれます。
一方で、日本人は日本の文化やしきたりなどを他の国の人に伝えることに
まだまだ慣れていない部分があるのかなという印象も受けました。
現在も、ニュースなどでそのような齟齬きたしている話を目にする機会があるくらいですし。

きちんと情報を伝えていれば起きなかったいざこざもあったはずだと思うので、
お互いが良い付き合いをしていくためにも、そこは日本人が改善しなければならない部分ではないかなと思います。

現在、新作を執筆中とのことなので、そちらも期待しつつ、楽しんでいただければと思います。

2017.11月に観たおすすめ映画

「カンパイ！ 世界が恋する日本酒」

日本酒に携わる日本人や外国人の声を集めたドキュメンタリー。

後半は東日本大震災で被害に遭った後、どのように活動していったかなどが語られています。

登場する人々みんなが日本酒に愛情と熱意を持っていて、語る言葉から

その気持ちが伝わってくる作品です。

「高慢と偏見とゾンビ」

ジェーン・オースティンの小説「高慢と偏見」に、なぜかゾンビ要素を加えてしまった作品。

ゾンビとの戦い以外は、ジェーン・オースティンの原作に比較的忠実なストーリー構成になっている、

重要な展開は物語に活かされています。

個人的には、ダーシーがエリザベスに求婚をするが断られてしまうシーンで、

いきなりアクションが始まる展開がウケました。

原作を敬遠していた人が、この作品をきっかけに読んでみる可能性もあるのではないのでしょうか。

出演陣もけっこう豪華な作品です。

「お父さんと伊藤さん」

二十歳ほど年上の伊藤さんと同居していた主人公のもとに、

いきなり父親がやってきて、奇妙な同居生活が始まるという物語。

リリー・フランキーや藤竜也さんの飄々とした演技が見ていて楽しい作品。

映画の中で明かされなかった謎が原作の小説では描かれているかが気になるところです。

2017.12月に観たおすすめ映画

2017.12月に観たおすすめ映画

「アイヒマンを追え！ ナチスがもっとも畏れた男」

ナチスドイツの戦犯を追いつけていたフリッツ・バウアーというドイツ人検事がイスラエルの特殊機関モサドによるアドルフ・アイヒマンの誘拐に協力していた、という事実を軸にして、フリッツ・バウアーの闘いを描いた映画。

モサドによるアイヒマンの誘拐は有名な話ですが、それにドイツ人検事が関わっていたという話は初耳でした。

フリッツ・バウアーはドイツでは有名な人物だからか、彼がどんな人物だったのかを知る描写が少なめだったり、個人的には、どのようにしてアウシュヴィッツ裁判を展開していったかまでを描いて欲しかった気もしますが、当時のドイツの状況なども知る事が出来るので、観ておいて損はない一本だと思います。

十二月はちょっと忙しくて、あまり映画を観る時間がありませんでした。

ずいぶんといいかげんな更新ではありますが、来年もお付き合いいただければ幸いです。
それでは、良いお年を。

ウィッチャー3 ワイルド・ハント **Goty version** (ゲーム)

本当は全てのミッションをクリアしてから書こうと思っていたのですが、100時間を越えても終わらないので、諦めて書くことにしました。現在の状況は、難易度デスマーチ二周目、ダウンロードコンテンツの「無情なる心」をクリアし、「血塗られた美酒」をプレイ中です。

ウィッチャーのヴィセミルと共に、恋人でもあった女魔術師イエネファアの足取りを追っていたゲラルトは、再会したイエネファアからシリがワイルドハントに追われて行方不明になっていることを知らされる。運命の絆でシリと繋がっているゲラルトは、彼女を救う為に、様々な場所に残された足取りを追っていく、というのがメインストーリーです。

シリがどこに向かい、何をしようとしていたのか、情報を得るために問題を解決したり、過去に因縁のある人物と再会を果たしていくことになります。さらに、様々な選択を迫られるサブクエストやウィッチャーへの依頼が数多く用意されています。

ストーリーの出だしはちょっと説明が少なくとまどう方もいるかもしれません。私は前作をクリア済みで、短編集と長編の一作目は読んでいたのですが、それでも、シリがニルフガード帝国の皇女であるという話は初耳で、正直、どうなっているのかわからず、オリジナルの設定かと戸惑ったぐらいでした。この事実が原作小説で明かされるのは、長編の五部作目「The Lady of The Lake」の後半なのです。ただ、物語を進めていくなかで、ゲラルトとシリがどのような経験をしたのかを聞けるクエストがちゃんと用意されているので、小説を読んでない方は、人物事典などを読みながら、少しずつ明かされていくゲラルト達の過去を楽しんでいただければと思います。

戦闘システムは前作より改善されて、アクションの要素が強くなっています。自分の戦い方に合わせて、様々なスキルを習得して身に付けていくことになります。スキルポイントの振り直しをするアイテムもありますので、いろいろ試していただければと思います。また、DLC「無情なる心」内のイベントをこなすことで、習得するのは大変ですが、さらに強力なスキルを得ることができます。戦闘の難易度は四種類あり、最も難しいデスマーチは一撃で倒されることも珍しくないのですが、物語を気楽に楽しみたい方は優しい難易度で、一歩間違えば死が待っているウィッチャー本来の世界を楽しみたい方はデスマーチをプレイしていただければと思います。

ちなみに、難易度「デスマーチ」を進めるポイントは、簡単なクエストをこなしてレベルを上げたら、まずはスキル「美食家」を取ることでしょうか。通常ならすぐに消えてしまう食べ物の回復効果時間を延長してくれるスキルで、回復アイテムの少ない初期から後半までカバーしてくれる優秀な性能を備えているので、この難易度では絶対に必要だと思います。

Goty、つまり、Game of the year版では、過去に発売されたダウンロードコンテンツの全てがディスクに収録されています。ダウンロードコンテンツも本編に負けず、一癖も二癖もある物語が描かれています。

「無情なる心」では、ゲラルトは言葉巧みに悪魔と契約を結ばされてしまったために、いまだ悪魔が契約を果たせずにいる不死の男の願いを叶える手伝いをさせられます。オクセンフルトの女医として登場するシャニは、戦争中に次々と増える負傷者をドワーフの医者と協力して治療する姿が小説で描かれていた人物で、登場シーンはそれほど多くないけれど、記憶に残る登場人物でした。

「血塗られた美酒」では連続殺人事件の犯人を追ううちに、トゥサン国内を揺るがす陰謀に巻き込まれることになります。こちらではシリを助けるためにヴィレジフォルツという魔術師と戦った際に命を落とした（はずだった）上級吸血鬼のレジスが登場します。小説の中でも魅力的な人物で（吸血鬼が吸血行為で仲間を増やすという迷信について解説したり、ゲーム内でも登場したマンドレイク酒を振る舞うなど）、彼の死にショックを受けていた身としては、この再登場は嬉しい驚きでした。

日本語版で残念なことは、ポーランド語が収録されていないことです。「ウィッチャー2」は海外版を買ったのですが、こちらにはポーランド語が収録されていたので、「ウィッチャー3」もポーランド語で遊べると思っていたのですが、国内版は日本語と英語しか収録されていなかったもので、少しがっかりしました。

あと、バグなど問題も少しだけ。時々、湿地帯の溝や構造物の隙間にはまって出られなくなったりすることがあるので、注意が必要なのと、なかなか処理が大変なのか、私がプレイしている時は何度か強制終了してしまうことがありました（クエストの台詞の分岐管理や風景の美しさを考えると仕方ないのかなとも思いますが）。この問題とも関わってきますが、個人的な印象では（私が遊んでいたのはP S 4版ですが）他のゲームに比べるとC P Uなどへ負担が大きいのか、すぐに本体の熱が上がるので、十分な放熱対策を用意しておくか、遊ぶ時間を定めておくことが大事ではないかと思います。

原作の小説についても少し触れておきます。

ゲーム中でもシンデレラなどの昔話をちょっとシニカルな感じでアレンジしていることからわかるかと思いますが、特に短編集「Last Wish」では昔話を同じようなテイストでパロディにした要素が濃いような気がします。「ウィッチャー2」を遊んだ後で読みましたが、乏しい英語力での読書だったということもあって、それほど特筆するような作品とは感じなかったというのが正直な印象です（意地悪なジンとのやりとりを描いた「三つの願い」については、ゲーム内の書籍で要約を読むことができます）。でも、この短編集ではシリをウィッチャーにする運命を定めることになる物語が描かれていますし、実はニルフガード皇帝が関わっていた物語もここに描かれていたということなので、再読しなければと思っています。

もう一作の短篇集「Sword of Destiny」では、グウェントカードに登場する三人組スリー・ジャックドー（正式な名前は難しすぎて思い出せません）や、シリとゲラルトの運命の絆を描いた物語を読む事が出来ます。

長編ではシリが持つ力を狙う者達の陰謀や、シリが苦難に遭遇するなかで自分の力を自覚し、

使いこなしていく姿が描かれています。ゲラルトはグウェントのカードで登場している、エルフと共に暮らす弓の使い手ミルヴァや、自分はニルフガード人ではないと言い張るニルフガードの騎士カヒル、上級吸血鬼のレジス、お調子者の詩人のダンデライオンらと共に、シリを探す旅を続けます。シリは力に目覚めた後、別世界に行く能力を使いこなそうとして、様々な世界を移動するなかで、ガラハッド（アーサー王の物語に登場する騎士の一人）と出会ったり、ゲーム内でも問題となっているカトリオナ病を知らない内にウィッチャーの世界に持ち込んでしまいます。

ちなみに、ゲーム内で活躍する印術ですが、小説内に登場する機会はかなり少ないです。短編集では何度か使っていますが、長編ではほとんど描写がなくなっています。

今までは長編の一作目「エルフの血脈」のみが翻訳されていた状態だったのですが、「ウィッチャー3」の人気の影響か、新しく長編が翻訳されていて、私が見た時は二作目まで翻訳されていたので、興味のある方は読んでみてはいかがでしょうか。また、今年の四月頃に最新作の「Season of Storms」の英語版が発売される予定なので、興味を持たれた方はこちらもチェックしてみてください。

「バッド・バディ！ 私とカレの暗殺デート」

二股をかけられて彼氏と別れた傷心のマーサが出会った理想の男性は凄腕の殺し屋だった、という設定のアクションラブコメディ。

様々な役柄を見事に演じ分けるサム・ロックウェルと、「ピッチ・パーフェクト」などで歌唱力があることも証明しているアナ・ケンドリックを主役にして、二人の恋愛を軸に、ユーモラスなアクションとちょっと風変わりな殺し屋たちの関係が描かれています。彼氏や危険な状況に感化されて殺し屋としての素質に目覚めていく、アナ・ケンドリックの可愛くてちょっとクレイジーな演技も見所です。個人的にはかなりおすすめです。ティム・ロスも脇役で出演しています。

第二次世界大戦後のデンマークではナチスドイツが埋めた地雷を撤去するためにドイツ少年兵らが働かされていたという事実を基にした映画「ヒトラーの忘れもの」や、イングリッド・バーグマンの手記や映像を基に彼女の生涯を描いたドキュメンタリー「イングリッド・バーグマン ～愛に生きた女優～」なども観たのですが、こちらは好みが分かれるかなという印象だったので、詳しくは紹介しませんでした。でも、気になった方は、よかったらチェックしてみてください。

北欧女子オーサが見つけた日本の不思議4（漫画）

待ち望んでいた新作がついに発売されたので、さっそく手に入れて読んでいます。

ここでも何度も紹介しているので、目を通して下さった方はすでにご存じでしょうし、この間、NHKの「バンバン ジャパン！」にも出演されたのでご覧になった方もいらっしゃるかと思いますが、スウェーデン人漫画家のオーサ・イエークストロムさんが様々な場所や日常の中で発見した不思議について綴ったエッセイ漫画です。さらに、この新刊を含め、近年の作品では、スウェーデンの文化や習慣について描かれた章も増えてきたので、テレビ番組や観光ガイドだけでは知る事のできないスウェーデンの一面を知ることができます。

第一章は朝日新聞「Be」の体験取材と千葉市の観光ガイドに掲載された漫画、第二章は飯スタントを担当されている親友の陽子さんとのスウェーデン帰省編、第三章はインターネットのボルボ・ライフ・ジャーナルに掲載された「ニッポン発見紀行」、第四章はブログに掲載されている日常を描いた漫画（今回は突然の引っ越し関連のエピソードが豊富）、という構成になっています。

いつものように自分が当たり前に目にしていることや行っていることに対して、スウェーデン人としての視点からの新しい見方を知って楽しむ一方で、私は千葉に行ったことがなくて、千葉市についてもほとんど何も知らなかったもので、第一章の千葉市についての漫画を読んだ時は驚く事ばかりでした（もしかすると、すでに、何気なく当たり前に日本で暮らしている日本人よりも、日本について詳しくなっているのかもしれない）。

また、どこかに掲載された漫画の一部をご覧になった方も、単行本化する際に漫画が増えていたり、新しいミニ情報や追記の一コマが書かれているので、まだ読んだ事のない方と同じように（あるいは、新しい情報が増えていることを楽しみつつ）読む事ができます。本の事は知っているけれど、まだ読んだことがないという方は、ブログやボルボ・ライフ・ジャーナルなどに掲載されている漫画を読んでみて、面白いと思ったら、単行本も手に取っていただければと思います。

それから、スウェーデンについてさらに知りたい方は、「北欧女子オーサのニッポン再発見ロ一カル旅」などに登場している友人のソフィアさんがスウェーデンの情報を日本語で発信しているので、こちらチェックしてみてください。またちょっと違ったスウェーデンの一面を知る事が出来ますよ。

<https://twitter.com/wagasueden>

「幸せなひとりぼっち」

半年前に生きがいだった妻ソーニャをがんで亡くし、リストラもされた、融通の利かない性格のオーヴェが自殺を試みようとするが、その性格ゆえに、引っ越してきた隣人のルール違反が見過ごせず、注意するために延期することに。その後も自殺を試みるも、上手くいかないなかで、隣人や周囲の人々と半ば仕方なく交流していくうちに、少しずつ彼の周囲に変化が訪れていく、ヒューマンストーリー。

最初は付き合いにくそうな嫌な人に見えるオーヴェですが、彼の過去が明かされていくうちに、その不器用さや頑固さも含めて魅力的に見えてきます。ラストもいい終わり方をしている、おすすめの映画です。ちなみに、ベストセラーの小説が原作で、人口約1千万のスウェーデンで約130万人を動員した映画だそうです。

Deus ex : Mankind Divided (ゲーム)

前作で引き起こされた、身体の一部をサイボーグ化した人々（オーグ）の集団暴走事件が原因で、多くのオーグは隔離され、差別を受ける存在となっています。そんな世界で、アダム・ジェンセンはタスクフォース29の一員として、ドバイでのミッション中に襲撃を仕掛けてきた謎の部隊の存在、また、プラハの駅で爆破テロを行った犯人を調べていくことになります。プラハ各地や、オーグ達が収容されたゴーレムシティなど、各地を巡り、時に偶発的に遭遇する人々を悩ませる事件を解決しながら、世界を操ろうとする陰謀の影を追っていくことになります。

今作はメインとなる事件の犯人を突き止めるところまでは物語が進むものの、世界を操ろうとする陰謀は次作へと続いていくため、アマゾンの評価などでも書かれているように、プレイヤーによっては中途半端な所で物語が終わってしまった、という印象を受けるようです。最近は「アサシン・クリード」や「ドラゴンエイジ」シリーズなど、壮大な物語を描こうとするゲームの物語は、このようなストーリー展開が多いような気がします。壮大な物語は続きが楽しみではありますが、途中で製作が頓挫してしまわないか、あるいは自分が元気うちに物語が完結するのか、という点は気になってしまうところですね。

プレイスタイルは難易度「Deus ex マスター」、完全ノンリーサルでした。タレットやロボットをハッキングさせて敵を同士討ちさせることもできますが、イベントの会話を見る限りでは、姿を見られず、殺害しないで進んでいく方が、交渉がいい方向に進めやすかったり、状況が不利にならずにイベントが進んでいるような印象を受けたので、個人的にはノンリーサルの方がおすすめです。

一周をクリアした時間はきっちりとは計算していませんが、20～30時間前後、という感じだったかと思います。だいたいのサブミッションをクリアした上で時間なので、必要なメインミッションのみを進めてクリアしていたら、時間はさらに短くなっていたでしょう。

このゲームはストーリーの進み具合によってニュースの放送内容や町中の市民の台詞が変わっていくし、各所にあるEブックやロックされた端末から読める断片的な情報から、その家の住人に何が起こったのか、または人々の関係性なども読み取ることができるので、そのような細部を楽しめる人向けのゲームであるかと思います。

いつどこで戦闘スキルが必要になるかわからなかったため、説得に用いるソーシャルエンハンサー、ハッキング機能（遠隔ハッキングを含む）、ジャンプ能力、アイテムなどを視認するスキャン機能、レーダー機能を解除した後はスキルポイントを節約しながら進めていたのですが、今作では特に戦闘に苦労するような展開はなかったため（ラスボス戦も含めて）、ラスボス戦時にステルス機能を使うためにポイントを消費しても、9ポイントほど余っていました。ショップで販売しているスキルポイントを忘れずに購入し、端末をハッキングした時に得られる経験値などを集めつつ、目的を定めてスキルを割り振れば、一周目では全ての機能を解除できないものの、ポイントで困ることは少ないかと思います。

個人的には、メインストーリーを進めるなかで、どちらかを選ぶしかない展開というものがあり、そのどちらを選んでも少し苦い思いをすることになるのですが、この点は好みではありませんでした。避けられない悲劇というものがあるにしても、どちらを選んでも何かしらの悲劇が起こるというのはなんだかなあど憂鬱に感じてしまうので。特にこの作品の場合、タスクフォース29の他のメンバー、特に偉そうなことばかり言ってるマクレディは仕事してないのかと思いましたし。一度クリアしたらニューゲーム+や最強難易度が解放されるようになっていますが、二周目を遊んでもらう前提で考えているなら、二周目ではどちらも達成して悲劇を避ける、という選択肢が用意されていてもよかったのではないかという気がします。

次作で物語の続きが描かれる時に、今作での選択の結果が引き継がれるのか、気になるところです。先に挙げた「ドラゴンエイジ」シリーズや「マスエフェクト」シリーズでは選択の結果が反映されていたので、できればこの作品もそうであってほしいのですが。

「潜入者」

麻薬カルテルを潰すために、資金洗浄を請け負う人物に成りすまして潜入捜査を行ったロバート・メイザーの実話を映画化した作品。

「Breaking Bad」のウォルター役のブライアン・克蘭ストンを始め、実力派俳優が出演しているので、麻薬組織への潜入捜査という素材自体はそれほど珍しくはありませんが、最後まで緊張感が続く良質のサスペンス映画に仕上がっています。物語のクライマックス近くで主人公らが捜査対象者に抱く感情も上手く描かれていて、その結果、ちょっと深みのある結末に仕上がっていたと思います。（たしか、マフィアへの潜入捜査を行ったジョセフ・ピストーネという人の自伝にも、同じような感情を抱いたというエピソードが書かれていたはずです）

「あなたが眠っている間に」（原題）

予知夢というファンタジー要素の入った、韓国の現代を舞台にしたドラマ。

交通事故の犯人として冤罪を着せられたことがきっかけで自殺してしまう、弟が殺人犯として逮捕される、などの予知夢が見せる悲劇からどう逃れるのかというサスペンスミステリー要素だけでなく、予知夢を見る主役三人の恋愛ドラマも楽しめます。予知夢という要素に対する登場人物の反応がとても自然に描かれていたり、物語が進むにつれて三人の繋がりがわかってくるなど、全体を通して脚本の完成度が高く、最後まで観る人を引きつけて離さない作品です。

ちなみに（原題）となっているのは、C Sの衛星劇場放送時にそのように書かれていたため、DVD化された際には少し題名が変化しているかもしれません。

「The Last Wish」 Andrzej Sapkowski

何度か紹介しているのでご存知の方もいらっしゃるでしょうが、以前紹介した、ウィッチャーシリーズの短編集です。「ウィッチャー3」をだいたい遊び終えたし、以前よりも英語を読む力もついているように思えたので、再読してみることにしました。

「ウィッチャー3」の紹介の中では、あんまり面白いとは感じなかったと書いていたのですが...、それは作品が面白くないからではなく、自分の英語力が足りていなかったからだということに気づかされました。改めて読むと、この世界でウィッチャーがどのような扱いを受けているかが長編よりも詳しく描かれているし、単なる勧善懲悪では語ることはできない皮肉などを含んだ物語、そのような状況に対して皮肉交じりのユーモアで切り返すゲラルトの台詞、イエネファーに対するゲラルトの想いなど、味わいのある要素を幾つも見出すことができます。

また、この短編集の中では、ゲラルトが印術をよく使っているという印象があります（長編の後半ではほとんど印術は使わないので）。ゲームに登場するアードやアクスィーのサインだけではなく、小説の中にしか登場しないヘリオトロープのサイン（効果はゲームのグエンのサインに近い）も登場します。

では、簡単に物語の概要を。

「The Voice of Reason」

フォルテスト王の依頼をこなした際、重傷を負ったゲラルトがメリテレの神殿で治療を受けている。沈黙の誓いを立てたアイオラへのゲラルトの独白や、ゲラルトの存在を疎ましく思う騎士らが領地から立ち去るように求めたことから生じる諍い、ダンデライオンの訪問などが、各物語の間を繋ぐように描かれている物語。最終章では、諍いが生じた騎士との戦いと、アイオラが視たゲラルトの未来（？）が描かれる。

「The Witcher」

フォルテスト王の依頼を受けたゲラルトは、夜になるとストリガ（幽鬼）へと変貌する娘の呪いを解こうとする。娘が幽鬼へと変貌する呪いは、フォルテスト王とその妻の近親的な関係が生み出したものではないかと噂されていたが、実は...、という物語。

「A Grain of Truth」

道の途中で珍しい色の薔薇をつけた女性と男の死体を発見したゲラルトは、その後、醜い怪物が主として暮らしている館にたどり着く。怪物はかつて自分は人間だったが、呪いをかけられ、このような状態になったのだと語る。そしてゲラルトは館の主と、彼のもとを訪れた女性の話を聞くことになるのだった。

「The Lesser Evil」

冬の生活費を得るため、途中で狩ったキキモラを運んでブラヴィケンの村にやってきたゲラルトは、過去の依頼で関わった魔術師と出会う。その魔術師は黒太陽の呪いを受けた女性に命を狙われており、魔術師はゲラルトに女性を殺して欲しいと言う。一方、町に現れた女性は魔術師のせいで王女の身分を剥奪され、辛酸を舐めることになったのだと語り、魔術師を殺して欲しいと告げる。後に、この諍いが村人に災いをもたらすことに気づいたゲラルトは、ある選択を迫られるのだった。

「A Question of Price」

シントラの女王カランサから、娘パヴェッタの婚約の宴に招かれたゲラルト。カランサがゲラルトを呼んだ目的は明かされぬまま、宴は開かれる。婚約者候補として訪れた、若きクラフ・アン・クライトらスケリッジの族長やドルイドが集うなか、謎の騎士アケロンが登場し、カランサの夫の命を救った見返りとして、パヴェッタを得る約束をしていたのだと語る。やがて宴は混乱の場へと変わり、その最中、パヴェッタの持つ太古の力が暴走する。後に、シリとゲラルトの運命に繋がる物語。

「The Edge of the World」

仕事がないゲラルトは、ダンデライオンとともに南へ向かう。途中、悪魔に悩まされているという男に出会い、その存在に興味を持ったゲラルトは、その依頼を受けることにする（ウィッチャーの世界では、悪魔は物語の中の存在だと思われる）。身を潜めて悪魔の正体を見定め、対峙したゲラルトは後に捕らえられることになるのだが、そこで見たものは...、という物語。

「The Last Wish」

釣りの最中に見つけたポットに封印されたジンによって重傷を負わされたダンデライオンを助けるため、ゲラルトは町へと急ぐも、規則により、詰め所に待機させられる。そこで出会ったエルフに経緯を語ると、魔法の力で負った傷を治すためには医者ではなく、魔術師の助けが必要だと言われる。ゲラルトはそのエルフから教えられた、町に滞在しているヴェンガーバーグのイエネファーのもとへと向かい、助けを求める。ダンデライオンが治療を受けた後、ゲラルトはイエネファーに魔術をかけられ、気を失い、気づいた時には地下牢に入れられていた。ゲラルトとイエネファーの出会いを描いた表題作。

ゲームからウィッチャーの物語を知った方や、ダークファンタジー好きの方には、一度は目を通して見ていただきたい作品です。もしよかったらご覧になってみて下さい。

2018.04に観たおすすめ映画

「アイム・ホーム」

主人公の弁護士が、妻との不和から自宅のガレージの二階で夜を過ごし、そこから家の中を覗いているうちに、そのままガレージで密かに家族の様子を覗き見る生活が続けるようになる、という物語です。短編小説が原作みたいです。

最初は妻が誰かと浮気しているのではないかと疑ったり、自分の不在が生み出す混乱を楽しみつつ過ごしていた主人公が、やがて家族への純粋な愛情に目覚めていく、ちょっとユーモラスな語り口の風変わりな作品です。

主演はブライアン・クラNSTONなので、彼の演技が好きな人はもちろん、そうでない人にも一度は観てもらいたい映画です。

購入可能時期が延期になって、待ちぼうけだったのですが、この間、ようやくウィッチャーシリーズの最新作「Season of Storms」が手に入ったので、読んでいるところです。

「ウィッチャー3：ワイルドハント」のサブクエストに登場する、ある人物との会話の中に出てきた、魔術師コーラルが登場する作品で、「エルフの血脈」シリーズとは関係のない、独立した長編のようです。来月には内容などを紹介できればと思っています。

それでは、映画の紹介です。

「ジーサンズ はじめての強盗」

年金の支払いが行われなくなったため、家のローンの支払いが遅れ、銀行に相談するも、冷たい対応を受けている時、主人公のジョーはたまたま銀行強盗に出くわします。その後、鉄工所の事業統合によって自分たちの年金が凍結されたことを知らされたジョーは、銀行強盗の姿を思いだし、自分も銀行強盗をしようと決意し、同じく年金が凍結された親友のウィリーとアルバートを誘います。

そして、訓練のつもりで手始めに行ったスーパーの万引きでは見事に捕まっていますが、それでもジョーは諦めず、娘の元夫からその道に詳しい人物を紹介してもらい、訓練を受けて、計画を実現させようとします。

マイケル・ケイン、モーガン・フリーマン、アラン・アーキンなどの名優が愉快的な老人っぷりを発揮している、気軽に楽しめるクライムコメディです。どうやらリメイク映画らしいのですが、現在のアメリカでも、年金やローンなど、老後の生活をめぐる様々な問題があるからこそ生まれた作品なのかなと思います。クリストファー・ロイドのちょっととぼけた、ピントのずれた老人の演技もとても楽しい作品です。

「いつも心はジャイアント」

畸形を持って生まれ、施設で暮らしながらも、ペタンクに一生懸命に取り組む主人公リカルドの物語です。彼の姿を通して、スウェーデン国内にも存在する障害者への差別や、一方で障害に関わりなく愛情を注ぐ人物の姿など、スウェーデンの現在を描いています。

現実のシーンはドキュメンタリーフィルムのような撮り方で表現しつつ、時折、リカルドの心の内に存在する幻想的な心象風景を交えたり、リカルドを西部劇のヒーローと重ねる表現（リカルドの部屋にもポスターが飾られていることから、リカルド自身が自己投影していると思われる）を使って、決して明るいとは言えない部分も描きながらも、ユーモアを交え、暗くなり過ぎないように描いています。

ペタンクの決勝戦で、あるハプニングが起きるのですが、その解決方法はスウェーデンっぽい感じがして面白かったです。

ちなみにペタンクとは、（素人知識なので間違っているかもしれませんが）金属の球を投げて決められたポイントの近くに球を置けたチームに得点が入るという、カーリングにちょっと似ているゲームです。

たしか、「ジーサンズ」の中でも、ペタンクをしているシーンがあったので、たまたまなのですが、共通点のある映画紹介になっていると言えるかもしれません。

2018.05.29

「Season of Storms」 Andrzej Sapkowski

ポーランドの作家、アンドレイ・サプコウスキーさんのウィッチャーシリーズの最新作です。ウィキの情報によれば、エルフの血脈シリーズの最終作「The Lady of the Lake」が書かれてから、約十三年後の2013年に出版されたものだそうです。

物語はゲラルトが「ldr」という魔物と戦うシーンから始まります。生物を殺害する衝動だけを持っているこの魔物は、気配を感じた人々の命を狙っており、ゲラルトの奮闘もむなしく、全員を助けることはできませんでした。なんとかldrを倒したものの、犠牲者を出してしまったことに苦い思いを抱いていたゲラルトに、依頼人は魔物退治の依頼料の水増しに協力するように持ちかけてきます。

その後、ケラックの町に到着したゲラルトは、ほどなくして依頼料をだまし取った公金横領の罪で捕らえられてしまいます。無罪を主張するも、聞き入れられず、ゲラルトの所持金では支払うことのできない高額な保釈金が決定され、拘留されますが、その後、何者かが保釈金を支払ったため、ゲラルトは牢から出ることができました。しかし、剣を取り戻すために詰め所に向かうと、町に入る際に警備兵の所に預けておいた剣は何者かに盗まれていました。

警備兵らとの乱闘の後、ダンデライオンから、ゲラルトを公金横領の罪で捕らえるようにBelohun王に進言したのも、保釈金を払ったのも、王の顧問も務める魔術師コーラルの仕業だと聞き、彼女に会いに行きます。（彼女の目的は、魔術師たちが研究のために集まっているリスベルグという場所にゲラルトが訪れるように仕向けることだったことが、後に明らかになります）コーラルとのやりとりの後、彼女の魔術によって剣の在り処のヒントを得たゲラルトは、ダンデライオンと共に目的地へと向かうことになります。

このように、ゲラルトは保釈中の身分となり、なおかつ、愛用している二本の剣（魔物相手に使う銀の剣と、人間相手に使う鋼鉄の剣）を失った状態で、リスベルグの周辺で起こっている大量殺人事件や、ケラックの王位継承をめぐる争いに巻き込まれたり、エルフの娘をさらって自分の子供にする魔物アグアラなどと対峙することになります。

ゲラルトはあくまで金のために依頼を受けて魔物退治などを引き受ける存在なので、自分で何らかの大きな目的を持って行動することは少なく、どちらかといえば、依頼人のアプローチに対して、相手の本当の意図を探りながら行動したり、自分の身に降りかかる火の粉を払うような行動をとることが多いです。今作においても、何らかの目標に向かって突き進むというよりは、自分よりも力を持つ強大な存在に翻弄されながらも、自分の価値観を貫こうとしている姿が描かれています。

物語は全体的にシリアスな傾向ですが、ゲラルトの皮肉めいた言動であったり、ドワーフのアッダリオと一緒にノヴィグラドへ向かう道中では、ウィッチャーといえども、アッダリオの頑強さと足の速さには敵わず、へろへろになっている様子が描かれていたり、ユーモアを感じる部分もちらほら見られます。

今作でのイエネファーは、直接、ゲラルトと関わりを持つことはないものの、陰からサポートし、重要な役割を果たしています。また、イエネファーがコーラルのもとを訪れ、ゲラルトについて話すシーンでは、イエネファーがどれだけ深くゲラルトのことを理解しているかが描かれています。

また、エルフの血脈シリーズの後半に登場するNimueも登場しており、メインストーリーの世界から127年後の世界で語られている伝承が、次の章の導入部となっていたりします。ゲラルトの物語は、その行動を描いている小説ではあるのですが、同時に、その物語は「127年後の世界に残っているゲラルトの伝説の中の、様々なバージョンの内の一つでしかない」という、客観的というか、どこか醒めた描かれ方がされているのが興味深いです。

物語の最後で、Nimueは魔物に襲われるのですが、それを助けたのは、二本の剣を背中に担ぎ、印術を使う、白髪の男でした。Nimueは彼がゲラルトだと思い、自分の気持ちを伝えますが、白髪の男は、ゲラルトは百年前にリンゴの木のそばで死んだのだ（「The Lady of the Lake」のラスト、あるいはゲーム「ウィッチャー3」のイベントで語られます）と語ります。そして、男が印術を使った後、Nimueは目覚め、自分が体験した出来事が夢か現かわからぬまま、物語は幕を閉じます。

物語の後半に登場する「全ては幻だ」というセリフや、今回の作品のクライマックスを読んでいると、なんとなく日本文学の「もののあはれ」という感覚にも似たものが描かれているような気がして、ポーランド人と日本人の感覚には似た所があるのかもしれないなと思いました。ゲラルトのキャラクターも、西部劇の流れ者のようでもあるのですが、作中で語られるゲラルトの剣の詳しい情報（記憶が間違っていなければ、エルフの血脈シリーズの中で読んだドワーフの剣の鍛造技術が、日本刀の作り方に似ていたはずです）などを読んでいるせいか、どちらかということ、日本の時代劇に登場する素浪人のように見えてしまいました。

ポーランドでは「灰とダイヤモンド」「地下水道」などの映画で有名なアンジェイ・ワイダ監督の働きかけで、日本美術の博物館が設立され、現在はそこで日本語学校が開かれたり、茶道教室が開催されているそうです。そのおかげもあって、親日家の方が多いそうです（女流棋士のカロリーナ・ステチェンスカさんもポーランド出身の方です）。

このことについて書かれた新聞記事によれば、共産政権時代に上映が許されていた数少ない西側の映画が「侍映画」だったそうで、もしかしたら、作者のサブコウスキーさんも侍の登場する映画を観た経験があって、何か影響を受けていたのかもしれませんが。

2018.06.29

「ヒトラーへの285枚の葉書」

ナチスドイツがフランスを占領した頃、戦争で息子で亡くした夫婦は、絵葉書にアドルフ・ヒトラーや戦争に抗議する文章を書き、町中に置くという抗議行動を行うようになる。その動きは警察の目にも止まり、彼らを逮捕しようと刑事はやっきになるのだが...

という、今まで、たぶんほとんど知られていない（私もこの映画の紹介を見るまで知りませんでした）、実在したヘンデル夫妻というドイツ市民によるヒトラーへの抗議行動を基に描かれた小説を、映画化した作品だそうです。映画「ワルキューレ」などで描かれていたような、軍人によるヒトラー暗殺計画ではなく、集団でもなく、個人による抗議行動が存在したことが驚きでした。

映画では一つの答えが描かれていますが、実在のヘンデル夫妻はどのような意思で抗議行動をとったのか、夫妻はその行動によって何を為そうとしていたのか（それとも、そこまでは考えていなかったのか）、という点も気になりました。

「あなたの旅立ち、綴ります」

何事も自分で決めずにはいられない広告社の元社長ハリエット・ローラーは、死ぬ前に素晴らしい内容の自分の訃報を書いてもらおうと思い立ち、地方紙の訃報ライターをしているアン・シャーマンのもとを訪れる。上司からの命令もあり、取材を行ったアンだが、ハリエットの評判はどこでも散々で、書く材料は見つかりそうになかった。すると、今度は様々な訃報を分析したハリエットが、素晴らしい訃報に欠かせない要素を見出し、それを得るためにアンと共に行動することを提案する。その過程の中でハリエットの過去が明らかになっていったり、アンなどの人生を変えていく、という映画です。

齢を経ても、おちゃめな女性からキャリアウーマンまで様々な人物を見事に演じ分けるシャーリー・マクレーンの魅力が、本作でも発揮されています。

今月は地震に豪雨、それに加えて連日の猛暑や台風と、散々な一ヶ月ですね。

幸い大きな被害には見舞われませんでしたでしたが、関西に住んでいる知人がいるので、地震の報せを聞いた時や、その後の豪雨の報せには心配していました。今、日本に上陸している台風の被害も報道されていますが、台風の通過地域や、地震や豪雨の被災地への影響が少しでも少ないことを願うばかりです。

地震や豪雨で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々の生活が一日でも早く良くなることや、現在も行方不明の方々が見つかって、ご家族の元に戻れるよう、切に願っております。

「新感染 ファイナル・エクスプレス」

韓国で2016年のナンバーワンヒットを記録したゾンビ映画だそうです。

ファンドマネージャーのソグと娘のスアンは、妻のいる釜山に向かうためにKTXという韓国的高速鉄道に乘りますが（この鉄道は有名らしく、他の映画の舞台にもなったりしています）、車内に体調のおかしい乗客が現れます。心配して駆け寄った乗務員が突然咬みつかれ、その後、同じようにおかしくなり、他の乗客を襲い始め、列車内はパニック状態に陥ります。

増え続けるゾンビからの退避、乗客たちの人間ドラマ、疑心暗鬼が生み出す人間の残酷さなど、ゾンビ映画ではお約束の展開が盛り込まれています。ゾンビの動きや演出なども、ハリウッドのゾンビ映画に匹敵する（作品によっては凌駕していると言ってもいいです）作品です。

韓国の俳優には疎いので、私はドラマ「トッケビ」などに主演しているソグ役のコン・ユさんしか存じ上げませんが、韓国映画やドラマに詳しい人なら誰もが知っているような有名な俳優が多く出演している、豪華作品のようです。スアン役の子役の演技も上手いです。

それから、まだ観ていないので、面白いかどうかはわかりませんが、9月から公開される「ブレス しあわせの呼吸」という映画が気になっています。実話ベースの映画で、ポリオにかかって体が麻痺してしまった人物が主役だそうです。

「ハクソー・リッジ」のアンドリュー・ガーフィールドや、「ダウントン・アビー」のヒュー・ボネヴィルなど、出演者が豪華なのですが、いちばん興味を持ったのは、監督がアンディ・サーキスさんだったからです。「ロード・オブ・ザ・リング」のゴラムのモーションキャプチャーでの演技や、その後も「猿の惑星 三部作」の主役のモーションキャプチャーを務めるなどしている彼が、監督としてどんな演出をしているのか、気になるところです。こちらも、もし興味がありましたら、ご覧になっていただければと思います。

「ブレンダンとケルズの秘密」「ソング・オブ・ザ・シー 海のうた」

アカデミー賞長編アニメ映画賞にノミネートされた、トム・ムーア監督の作品です。どちらもアイルランドが好きな人は必ず心惹かれる作品ですし、そうでない方も映像の美しさに心惹かれるかと思います。

「ブレンダンとケルズの秘密」はバイキングの襲撃に悩まされていた中世のアイルランドが舞台で、アイルランドで有名な聖書『ケルズの書』を軸に、ケルズの書に魅せられた少年が神話や民話に属する世界に足を踏み入れる冒険が描かれています。

「ソング・オブ・ザ・シー 海のうた」は現代が舞台で、人間の父親とシルキーの母親の間に生まれた兄妹の物語です。シルキーの性質を強く受け継いでいるために危機に陥る妹を、人間の血が濃い兄が助ける冒険が描かれています。

ちなみにシルキーは、うろ覚えの知識ですが、普段はアザラシに姿を変えているけれど、毛皮を脱ぐと美しい人間の姿をしているという妖精だったはずです。時々、毛皮を乾かす習慣があり、その美しい姿に惹かれた男が毛皮を隠し、女性のシルキーと結婚するのですが、子供が生まれた後、隠しておいた毛皮を見つけられてしまったため、シルキーは毛皮を着て海に戻ってしまうという、日本の「天女の羽衣」の昔話と似た形式のお話があります。

「DCスーパーヒーローズ vs 鷹の爪団」

なぜか、鷹の爪とジャスティス・リーグがコラボした、ギャグアニメ映画です。最初はいがみ合っている鷹の爪団とジャスティスリーグの面々が協力して、ジョーカーたちの企みを打ち砕く物語になっています。自称、低予算で作られているとのことで、画面右には残り予算のバーが表示されていたり、時折、島根についてのかなり自虐的なネタが盛り込まれていたり（たとえば、日本で唯一、大正時代と比べて人口が減っている県など、事実なのかはわかりませんが）と、かなりゆるいテイストです。個人的には、ワンダーウーマンの今風メイクや、バットマンの過去を変えようとするくだりが面白かったです。

ジョーカー役にはTeam NACSの安田顕さんが、バットマン役には山田孝之さんが声優として出演しています。

「オレの獲物はビンラディン」

便利屋として暮らしている愛国心の強いゲイリーは、米軍がオサマ・ビンラディンを捕まえないことに憤っていたが、ある時、神の啓示を受け、日本刀を手に、単身、パキスタンにビンラディンを捕まえに行くという、実話を基にした映画です。これが実話ということに驚きます。

これが映画としてはおすすめできる作品かということ、正直、物語は微妙ですし、好みが分かれる作品だと思います。

ですが、主役のゲイリーを演じているニコラス・ケイジがとにかく楽しそうな感じで、その全

力の演技が見ていて楽しかったので、おすすめしてみることにしました。ちなみに、最後にはテレビの取材を受けているゲイリー本人の姿も見ることができます。

一見、ただの変わっている人ですが、ここまで何かを信じ切って生きられるのは、幸せな事なのかもしれない、とも思いました。

Dishonored2（ゲーム）

前作の女王暗殺事件から十数年後、前女王ジェサミンの娘エミリー・カルドウィンが女王となり、コルヴォ・アッターノは王室護衛官としてエミリーを補佐していた。しかし、施政は順調とはいえず、町ではクラウンキラーと名乗る殺人鬼が、エミリー・カルドウィンに反対を表明する人物を殺害していたため、クラウンキラーはエミリーの手の者ではないかと疑いがかけられていた。

城では前女王の追悼式典が行われるが、その最中、サーコノス公爵とジェサミンの姉を名乗るデリラが現れ、クーデターを起こされ、城を占拠されてしまう。自室に拘束されたエミリー（またはコルヴォ）は城から脱出し、ドレッドフル・フォール号の船長ミーガン・フォスターの協力を得て、カルナカへと向かい、デリラ達の企みを打ち破ろうとするのだった。

プレイヤーはコルヴォかエミリーのどちらか一方を操作して、デリラの協力者を排除しながら、彼女の目的などを探り、王国を取り戻していく、という内容のFPSゲームです。

このシリーズでは、事件解決までにどのような行動を選ぶかで、カオスという世界の乱れを示す値が変化する特徴があります。敵ユニットを気絶させ、重要ターゲットは殺さない方法で排除すると、カオスを低い状態で維持させることができ、ユニットを殺害したり、重要ターゲットを殺害していくと、カオスは高まっていくことになります。その値によって、チャプターごとに挿入される動画のナレーションが変化したり、世界の様相が変化します（ブラッドフライという人を襲う虫の巣が増えていたり、低カオスでは友好的な二人だったモブキャラが、高カオスではいびきあっている、など）。

前作では非殺傷を貫こうとしても、それがかなり難しいバグのような仕様があったのですが（とある敵キャラを非殺傷にしても殺傷したとカウントされる可能性が高かった）、今回はそのようなこともなく（麻酔で眠らせたキャラが高所から転落して死亡判定になる、などはありませんが）、殺害／発見された数をミッション中に確認できるようになっているため、気づかずにノーキルに失敗してしまう可能性は少なくなりました。

第二章開始直後に始まるイベントで、アウトサイダーの印を受け取らない選択をすると、超常能力は一切使えない状態でプレイすることになります。超常能力はもちろん、身体能力の強化も使えず、ボーンチャームの合成技術も使えないため、制約が多いです。第四章のジンドッシュに気づかれずに無力化する実績は取得できなくなりますし、おそらく、肖像画をコンプリートする実績も取得できなくなるはずです。

一見、デメリットのみのように思えますが、このプレイの場合、ルーン1つにつき200のお金が入るようになるため、闇取引の店でアイテムを買ったりアップグレードするための資金に余裕が生まれる、というメリットが生まれます。超常能力を使わないでクリアするという実績／トロフィーもあるため（おそらく、アウトサイダーの一部の台詞も変化していると思われます）、興味のある方はチャレンジしていただければと思います。

機械兵は前と後ろ両方に視界の判定が入っている厄介なユニットですが、少し離れた場所から、機械兵の背後から頭部に向けてクロスボウを放つと、一撃で頭部を破壊できるため（クロスボウのアップグレード「硬化ボルト」が必要かもしれませんが）、大きな音を出さなければ、発見されず、攻撃されることもなくなります（ノーキルを目指す場合、機械兵が敵キャラを誤って殺害する可能性には注意しておいた方がいいかもしれません）。

また、後半に登場する魔女はクロスボウで攻撃しても倒せず、逆に居場所を気づかれてしまう可能性が高いですが、麻酔ボルトであれば何の問題もなく無力化できます。

ゲーム内に登場する金庫の番号は、きっちりと決まっているものもあれば、ジンドッシュの鍵のように、（おそらく）周ごとに変更するものもあります。なので、一周目でメモしておいた番号を二周目で使うことはできない場所もありますが、同じ周で事前に情報を入手してメモしてから、そこにたどり着く前のデータをロードして使用することは可能です。一部の進行などが味気なくなるという欠点がありますが、たとえば、研究所の重要ターゲットを無力化するためのアイテムを作り出すために必要な金庫の番号を入手した後に、ある敵が登場するのですが、その前のデータをロードして金庫を開けてアイテムを作ってから向かうことで、敵と遭遇せずにイベントを終了させることができます（ジンドッシュの鍵のクイズの実績も、同じような方法が使えます）。ノーアラートを目指す場合にも便利です。

個人的には重要ターゲットに対して選択した行動が世界にどのような変化を与えたのか、細かく知りたかったのですが、エンディングではそこまで詳しく描かれていなかったのも、少し残念でした（エンディングの画像の中に登場しないなど、細かい変化はあるようです）。ですが、ステルス系FPSゲームとしての楽しさは十二分に感じることができました。おそらく、前作よりも難易度は低めに作られているはずで、超常能力を使える状態ならクリアはそれほど難しくないと思います。また、能力を制限している状態でも先に進むための経路は考えられているので、地道に探索しながら活路を探っていく楽しみを味わっていただければと思います。ちなみに、ベリーハードだと隠れている場所から覗いている状態でも発見されてしまうのですが、難易度カスタムだと個別設定で覗き状態で発見されないようにもできるみたいなので、好みで選んでいただければと思います。

（難易度ベリーハード、アウトサイダーの印は受け取らず、ノーキル・ノーアラートでクリア）

2018.10.31

「The Complete Love Hurts」 Kim.W.Andersson（コミック）

こちらはスウェーデンのコミック作家、キム・W・アンダーソンさんの短編コミック「Love Hurts」シリーズが収録された一冊です。以前、アマゾンのサイトではvol.1～3が発売されていたのを見かけたことがあるので、おそらく、このコンプリート版はそれらをまとめたものだと思います。

タイトルが示しているように、この作品では、色んな形の愛情や、愛する気持ちが引き起こす騒動、身勝手な想いに対する手痛いしっぺ返しなど、恋愛や愛情にまつわる様々な物語が描かれています。収録数は34本（ナンバリングタイトルが32、個別のタイトルがついたものが2つ）あり、現代、歴史もの、西部劇、ファンタジーからSF、日本や中国など、シチュエーションも多岐にわたっています。最後の作者のサインによれば、少なくとも2007～2013年の作品が収録されているようです（初期の作品はもう少し前に描かれているかもしれません）。以前「Alena」という作品も紹介したのですが、テーマ的には同じコンセプトではないかと思います。

絵柄はアメコミの影響が強いように思います。この作品はブラックユーモアや残酷な描写が多めなので、そのような表現が苦手な方には向かないかもしれませんが、毒気や皮肉を含んだ物語が好きな人の好みには合うでしょうし、そうでない方も、前述しているように色々なタイプの物語が描かれているので、好みの作品も見つかるのではないかと思います。

個人的には、「人魚に恋した男（No.6）」「身勝手な王子に見初められた女性の悲劇と復讐（Anastasia）」「好きな人を喪った女性が心霊術師のもとを訪れる（No.14）」「亡くなった子供を蘇らせる夫婦（No.24）」「女性の目の前に現れた完璧な男性との一日（No.27）」などの物語が好みでした。

ちなみに、もし、興味はあるけど、買って読んでみようと思うかということ、ちょっと迷う...、という方は、このようなイベントはいかがでしょうか。

今月の19日から30日まで、東京のスウェーデン大使館で、以前、作品を紹介した「北欧女子」シリーズの作者オーサ・イエークストロムさんとの共同展「スウェーデンの漫画を世界へー オーサ・イエークストロム X キム・アンダーソン」が開催されるそうです。

私はまだ読んでいないのですが、キム・W・アンダーソンさんは他にも「A s t r i d」というSFコミックも書いています。（ちなみに、共同展のパンフレットに掲載されている絵は「A s t r i d」の表紙です）

入場無料とのことですし、どんな作品を描かれているのかわかるような展示になっているかと思うので、興味を持たれた方は、お気軽に足を運んでみてはいかがでしょうか。期間中にはミニイベントもあるかもしれないそうなので（まだ大使館のHPでは詳細は書かれていないみたいですが）、詳細はスウェーデン大使館の公式サイトからご確認ください。

<https://www.swedenabroad.se/ja/embassies/japan-tokyo/current/news/taking-swedish-comics-abroad/>

2018.11月に観たおすすめ映画

「猫がおしえてくれたこと」

イスタンブールの7匹の野良猫と、その猫と関わりのある人のインタビューで綴ったドキュメンタリー映画。

それぞれの猫に魅力があって（扉を開けてくれとお願いする時にちょっと変わった仕草をする猫。レストランで七面鳥をもらって食べる猫は、決して店の中には入らないで、窓からおねだりする。などなど）、猫を見守る人々の視線も穏やかで、見ていて心が和む一作です。

紹介する作品が一本はちょっと少ないですね。来月はもう少し紹介したいところです。

あと、もしかしたら、ゲームで紹介できるものがあるかもしれません

（まだ最後まで進めてないのですが、面白かったら紹介させていただきたいと思っています）。

来月もよろしくお願いします。

「アサシンクリード・オデッセイ」 （ゲーム）

古代ギリシャの都市国家スパルタの軍人の子として平和な生活を送っていた主人公とその家族は、巫女の託宣により、突如、まだ生後まもない自分の弟（妹）を犠牲にすることを強いられる。主人公はその運命に抵抗したことで、崖から落とされるも、なんとか一命を取り留めた後、ケファロニア島に流れ着き、傭兵として成長していた。自分を助けてくれたマルコスとケファロニア島を牛耳る盗賊キュプロクスの争いに巻き込まれていくうちに、主人公は自分の過去と向き合い、さらにギリシャ全土を舞台とした陰謀を展開する秘密組織との戦いに身を投じていくことになるのだった。

前作のオリジンズはまだプレイしていないので、現代編のストーリーが分かっていない部分もあるのですが、どうやら、それ以前にもちらほらと登場していた古代の神のような存在にまつわる遺物を探している、という流れのようです。今回はスパルタの英雄レオニダスの槍に残されたDNAから、古代ギリシャで傭兵家業をしていた主人公の人生を追体験し、都市国家スパルタとアテナイの戦争が行われている時代を旅することになります。

主人公は男女の選択が行えますが、物語への影響はほとんどありません。最初に女性のカサンドラを選んでいたので、男性のアレクシオスを選ぶと違う物語が展開されるかと思っていたのですが、男女が入れ替わるだけで、同じ物語が展開されるので、自分の好みで選んでいただければと思います。

ストーリー内でも様々な選択肢が登場し、どれを選ぶかによって、物語に大きな影響を及ぼすこともあります。その違いを全て確認したわけではありませんが、なかにはだいぶ後半になってからその影響が表れるものや、エンディングにも変化が生じる場合があるようです（ちなみに、一部のキャラが最後まで生存していると、メインストーリーのクリア後に船の副官として選ぶことができるようになります）。

作品の舞台となる古代ギリシャのマップの広さは、ロードス島などの一部の地域は省かれているものの、ほぼ、現在のギリシャ共和国の大きさと同じだと考えても差し支えないかと思います。各地には様々なロケーション（野营地、町、遺跡など）が存在し、さらに石板による謎かけ（ステータス補助の彫刻を得られる）もあるため、その全てを探索しようとするなら、100時間を超えるプレイを楽しむことができます。

時には探索済みの場所でも、ミッションのためにもう一度行かなければならなかったりするの少し面倒ですが、古代ギリシャを再現した街並みの様子や、各地点に存在する神殿や遺跡、時には謎かけの答えを探す過程で見つかる巨大な彫刻の雄大さや美しさは、一見の価値ありだと思います。

難易度イージーの場合は地域ごとに設定されたレベルに変化はありませんが、ナイトメアの場合は、主人公が地域のレベルを超す成長をした場合、そのレベルに合わせて地域のレベルも上昇するようになっています。（ウィッチャー3に敵が主人公のレベル依存になる設定がありましたが、それと同じ感じです）。敵が同じ強さになるため、特別な獣や神話の存在との戦い、海戦などは難易度がかなり上昇しますが、一方でレベルが上がりやすいというメリットもあります（常に敵が強く、どの地域の依頼のレベルも高い状態が維持されるため、取得経験値が多くなっています）。武具などもレベルに応じて高い性能のものが手に入るのので、レベルを上げてからレジェンドランクの武具を持つ敵を倒すことで、アップグレードの手間を省くこともできます。

戦闘はウォリアー、ハンター、アサシンの三種類のスキルを駆使して戦うことになります。強化については、自分のプレイスタイルに合わせて行っていただければと思いますが、難易度が高い場合、特に序盤は敵に正面から挑むと簡単にやられてしまうので、アサシンアタック主体で進めた方が無難かもしれません。

また、物語の後半ではストーリーの流れで戦争イベントに参加することが多くなるため、高難易度でプレイしている場合や、戦闘が苦手な人は、好みに応じてカスタマイズした防具を何種類か用意しておくといいかもしれません。たとえば、ふだんの隠密行動用の防具と、戦争イベントなどのウォリアー能力を駆使する時のための防具、という風に。

秘密組織との戦いでは、その正体を示す鍵となる証拠を入手し、その存在を明らかにすることで居場所を特定し、倒していくという流れになっていますが、物語に密接に関わる人物は、メインストーリーを進めることで正体が明らかになります。物語に関わる人物の場合、選ぶ選択肢によって見つけられなくなる、というようなことはなさそうなので、その点は安心していただければと思います。

ちなみに、とある人物の情報を見つけるためのヒントとして、「アカイアの漁り屋の浜の洞窟で情報が失われた」という文章があるのですが、これはどうやら間違っているようです。英語でプレイしてみてわかったのですが、英語では「洞窟」ではなく、「入り江」となっているのです。おそらく、「Cove（入り江）」を「Cave（洞窟）」と勘違いして訳してしまったために起こったミスではないかと思います。実際に入り江を探索すると情報を入手することができるのですが、こちらはロケーションのクリア条件に記された宝箱の中ではなく、マップに倒れている死者から拾えるものなので、ちょっと大変ですが、注意して探してみてください。

バグはいくつか見られます。何らかの形で読み込みが重くなるのが原因か、動作が遅くなるもの。時には目標がおかしな位置に登場したりすることもあります（私が経験したのは、石化の島で女性を救う為に敵を倒す時に、その敵を示すポイントがまったく別の場所に登場し、目標と思われる敵を倒しても達成されない。また、メインミッションに関わる人物に同行するはずが、馬が存在せず、その人物が移動しない。というものでした）。動作が遅くなる問題の場合は、可能ならばメニュー画面を出してクイックセーブをしてロード、それができない場所の場合は、直前のオートセーブをロードするのがいちばん安心な再開方法だと思います。ミッションに関わる

問題は、一度ゲームを終了しての再ロードや、そのイベントの直前のデータをロードしてやりなおすことで進めることができました。

バグはないに越したことはありませんが、「Fallout」や「エルダースクロールシリーズ」を始めとして、広大なオープンワールドの情報管理の大変さを考えれば、致命的なミスでない限りは、それに対応したプレイを心がけるのもやむを得ない部分もあるかもしれないという気がします。

2018.12月時点で、「最初の刃の遺産」という、おそらく有料のコンテンツが提供されているのですが（私は未プレイです）、その他にも、無料アップデートによって、ミッションの追加、レベルキャップの開放、アビリティポイント使用による戦闘パラメータの上昇などが追加されています（こちらはパッチファイル取得時に自動で追加されています）。まだ取得することはできないトロフィーも幾つか表示されていて、まだまだ追加される要素がありそうなので、今後の更新にも期待したいところです。

拙い文章と内容のレビューですが、今年も読んでいただき、ありがとうございました。
相変わらず気まぐれなチョイスですが、来年も書いていければと思っております。
それでは、良いお年を。

2018.12.31

「Watch dogs2」（ゲーム）

アメリカを舞台にした、大手OS会社ブルーム社に戦いを挑むハッカーが主役のゲームです。前作の舞台はシカゴでしたが、今作はサンフランシスコが舞台になっています。

オープニングミッションとして、主人公マーカス・ホロウェイはブルーム社に侵入し、自分の犯罪歴の削除を行い、バックドア（次からプログラムに簡単に侵入できる裏口）を設置して脱出を試みます。その様子を見ていたハッカー集団デッドセックのメンバーに認められ、マーカスもデッドセックの一員として活動していくことになります。

始めてすぐに感じるのは、現代的な要素をずいぶん取り入れている点、でしょうか。デッドセックのアジトでは3Dプリンターを使ってラジコンカーやドローン、様々な銃器まで作成することができますし、スキルポイントを得るための経験値の役割を果たしているのはフォロワー数です。メインやサブミッションに登場する敵対勢力のプログラムやサービスの裏側に隠された企みも、すでに現実世界で懸念されていたり、今後起こりうると考えられるような内容がいくつも登場します。

主人公たちは真実を世界に公表することを目的とするハッカー集団なので、カルト宗教の嘘を暴いたり、デッドセックに汚名を着せる人物を懲らしめたり、大手企業のプログラムの本当の目的などを探り、その企みを潰していきます。ミッションの最後には真実を公表する動画が流れるのですが、この映像の演出もユニークで面白いです。

ミッションに臨むプレイスタイルは好みに応じて、マーカスを突撃させることもできますし、ラジコンカーやドローンを駆使してのステルスプレイも可能です（一部端末はマーカス、もしくはラジコンカーでなければアクセスできないものもあります）。

ただ、難易度が高いと銃撃戦になった場合にすぐに倒されてしまう感じだったので、ステルスプレイの方が進みやすいような気がします（難易度が高いことによる特典などは特になさそうです）。ラジコンカーやドローンを使って爆弾などを設置したり、警察やギャングを利用してターゲットを倒すスキルを駆使するとかなり楽に進めるので、銃器関係のスキルはほとんど必要ないかも、という印象を受けました。

ちなみに、ラジコンカーとドローンはギャングや警備会社の人間に気づかれると、石を投げつけられたり、銃で撃たれたりして、壊されてしまいますが、時間が経てば再び使用することができます。

不慣れだったこともあってオープニングミッションでは何度か失敗したものの、その他のミッションでは苦勞するものは少なめでした。一番大変だったのは、サブミッション「#911」のアルカトラズ刑務所の屋上から始まるラストミッションで、これは難易度を下げようか悩むぐ

らい、難しかったです。後にクリアすることができましたが、自分の実力というよりは、運が良かったから、というのが理由です。（その他にも、ストーリーに影響するミッションではありませんが、デッドセックイベントのウイルスをアップロードしたり、ハッカーのデータを盗むイベントは、アップ／ダウンロード中に敵勢力が襲い掛かってくることが多いために、成功率は低かったのです）

個人的には、前作に比べると主人公の動機が弱くなっていて、前作の物語が好きだった者としては、最初は「前作よりもイマイチかも...」と思ったりもしたのですが、敵役となるブルーム社のCEOが登場するあたりから面白くなっていきました。

前作もそうですが、ドラマ「パーソン・オブ・インタレスト」のようなジャンルが好きな人はこのゲームも楽しめると思うので、気になった方は試してみてくださいと思います。

（難易度リアルスティックでクリア）

2019.1.28

「Sherlock Holmes : The Devil's Daughter」 （ゲーム・ネタバレあり、です）

シャーロック・ホームズを操作して事件を推理していくアドベンチャーゲームは、かなり昔からあったような気がします。ずいぶん昔の記憶なので曖昧ですが、たしか私の知る限りでは、PCエンジンの頃から、彼を主役にした推理ゲームがあったはずです。画面中央の四角い箱のような画面の中に実写の映像が流れて、登場人物が証言している様子を見た覚えがあります。当時は難解だったからか、自由度が高かったからか、全然進め方が分からなかったのですが（笑）。

この作品はFrogwaresという会社が開発したホームズシリーズで、パソコン版から数えると六作品目、家庭用ゲーム機でも発売されるようになってから三作品目ぐらいになるかと思います。初期の作品ではクトゥルフ神話の要素が含まれている作品や、ルパンとの対決、切り裂きジャックの正体を探る作品があり、プレイ動画を拝見して自分でも遊んでみたいと思ったのですが、海外のPC作品を日本のPCで遊ぶ方法がわからなくて、諦めていました。（ちなみに、同じ会社の作品で「Dracula Origin」という作品があり、たまたま手に入れることができたので、やってみようと思ったのですが、ソフトをインストールしようとしたら失敗した上に、ちょっと面倒なことになった、怖い思い出があります）

ですが、「The Testament of Sherlock Holmes」からはPlaystation 3でも発売されたおかげで遊べるようになり、自分でも推理を楽しめるようになりました。

このシリーズのストーリーにはオリジナル要素が多く含まれていて、今回の作品では、「The Testament of Sherlock Holmes」に登場したモリアーティの忘れ形見であるキャサリンが再登場し、物語に大きく関わってきます。

今作では五つの事件があり（小さい推理も含めると六つになります）、オープニングはホームズが犯人に命を狙われて逃げる様子から始まります。それぞれの事件の概要はこんな感じです。

「Prey Tell」

依頼が無くて退屈しきっていたホームズのもとに、失踪した父親を探して欲しいと子供がやってくる。父親の足跡を探っていくうちに、父親が「特別な仕事」をもちかけられていたことを知る。その仕事を持ちかけた人物を突き止め、ウィギンズにも協力してもらって調査を続けると、慈善活動で有名なある貴族の存在が明らかになるのだった。

「A Study in Green」

貴族らが集まるクラブで催されたローンボーリング大会の決勝に進んでいたホームズ。その大会の景品になっていたのは、金属製のマヤの暦だった。決勝戦が終わり、翌日に表彰式が行われる予定だったのだが、翌朝、会場の広場で、男が槍で殺されていた。クラブの責任者は、会場内に設置されていたマヤの王の像が逃げていく姿を見たと言証。実際に、像は会場から消えていた。被害者はマヤの暦に記されていた象形文字の解読をしており、彼の資料を参考に文章を解読すると、そこには今回の事件と符合する、呪いについての文章が書かれていた。

（ローンボーリングは、地上で行うカーリング、あるいはペタンクやボッチャに似たスポーツのようです）

「Infamy」

舞台でホームズ役を演じるため、役の研究のためにアメリカから俳優のオーソン・ワイルドがやってきた。彼はホームズ宅に居座り、ホームズの真似を始め、依頼人が持ってきた手紙を見て勝手な推理を始めたりする始末だった。その夜、何の前触れもなく、ホームズ宅に爆弾が投げ込まれる。なんとか解除に成功したホームズは犯人捜しを始めるのだが、そこにオーソンが首を突っ込み、何かと引っ掻き回してくる。様々な騒動を引き起こすオーソンを助けながら調査を続けるうちに、ホームズが過去にスコットランドヤードに協力して逮捕したギャングの存在が浮かび上がってくるのだった。

「Chain Reaction」

帰宅途中のホームズとワトソンは、大事故の現場に遭遇する。まだ息のある被害者らに救命措置を施した後、警官に協力を申し出て、大事故の原因となった出来事を推理してたどっていくホームズ。すると、事件のきっかけとなった出来事が、イングランド銀行の強盗事件と結びついていたことを突き止める。現場は事故直後に封鎖を依頼していたため、ホームズは容疑者と思しき人物を特定し、それぞれに事情聴取を行うのだった。

「Fever Dreams」

物語が始まった直後から、ホームズ宅の階下に引っ越してきたアリス・ド・ブービエ。彼女を観察して、何やら怪しい雰囲気を感じ取っていたホームズは、それぞれの事件の調査を進めながら、彼女の身辺を探るうちに、彼女の過去や、ホームズに対して恨みを抱いていることを発見していく。一方、アリスは、寄宿学校の事情でホームズ宅に戻ってきていた娘のキャサリンに近づき、親しくなっていく。危機感を抱いていたホームズは彼女に近づかないようにキャサリンに言うものの、キャサリンは聞き入れようとしなかった。

そしてとうとう、アリスが着々と進めていた計画の最終段階を実行する。ホームズは失踪したキャサリンの行方を追い、キャサリンの運命を懸けて、アリスと対峙するのだった。

最後の事件の「Fever Dreams」の、急にホラーのような演出になる展開には少し面食らいましたが、この事件の突拍子もなく見える展開は、実際の場所を調査しているというよりは、ホームズが自ら構築した仮想の世界の中で推論を組み立てているのだと考えれば、理解できる流れでした（ベネディクト・カンバーバッチ版の「Sherlock」の第三シーズンのマグネセンのマインド・パレスを思い出していただければわかりやすいかと思います）。

実際、今作の「A study in Green」の中では、マヤの遺跡の模型を見て、ホームズが推論によって構築した遺跡の内部を探索して真実を発見するという調査の流れがあり、これは「Fever Dreams」の展開の伏線の役目も果たしていたのではないかと思います。

このゲームでは様々な証拠を集め、そこから推論の手がかりを見つけ出し、二つの事柄を結び付けていくことで事件の鍵となる要素を浮かび上がらせ、推理していくことになるのですが、その推理の流れによって、様々な結論が浮上します。真犯人を指摘する結論である場合もあれば、無罪の人間を犯人だと断定する結論もあります。時には呪いが事件の真相だと断じることがもできます。

そして、指摘する犯人に対して、「あくまでも法による処罰を望む」選択と「情状酌量の余地を見出して、見逃す」選択の、二種類を選ぶことができます。これがたしか、前作「Crime and Punishment」から始まったモラルチョイスです。その選択によって、それぞれのムービーが流れ、事件は終了となります。

ホームズが冤罪を生むこともあれば、あくまで処罰を望む事によって悲劇的な要素が残る結末となる場合もありますし、時には犯人を見逃すことが最善だと思われる結末もあります。選んだ選択によって、次の事件の時に手紙が届いていて、ある時にはホームズを責める内容であったり、お礼を告げる手紙だったり、様々な反応がかえってきます。

多少は英語に慣れた、ということもあるのかもしれませんが、初期のPC版の作品に比べると、謎解きは推理しやすいものになってきているような気がします（プレイ動画で見た過去作品の推理は、とても難解だと思ったので）。とはいえ、全ての謎解きやパズルが簡単だったかというと、そうでもありませんでした。「A Study in Green」のマヤの象形文字を読み解く問題は、まだ英語力が未熟ということもあり、解くことはできませんでしたし、「Chain Reaction」の大事故の原因を探る推理は、けっこう手間取りました。

ちなみに、どうしても解けない問題があったとしても、ちゃんとスキップ機能があるので、物語は最後まで楽しむことができます（ただし、トロフィーに関わるパズルの場合、トロフィーは獲得できなくなります）。

また、時間内に特定の場所をクリックするQTE要素や、リズムゲームのようなボタン押しミニゲームもあります。個人的には、「Infamy」の酒場での乱闘を乗り切るところや、信心深い女性の信頼を得るためにウィギンズらと協力して悪魔祓いをするイベントは特に面白いと思ったので、ぜひ見ていただきたい部分です。

私は北米版をプレイしましたが、今作は日本語版も発売されていたはずですし、プレイ動画などもあるはずなので、気になった方はチェックしてみてくださいと思います。

2019.02.28

先月に引き続き、名探偵の話題です。

先月紹介したシャーロック・ホームズの推理ゲームの他にも、セガサターンで発売されたワークジャムの「クロス探偵物語」や、プレイステーションやセガサターンで発売された「金田一少年の事件簿」シリーズ、日本一ソフトウェアから発売された（開発は、たしかFog soft）「雨格子の館」から始まるルロイの館三部作など、推理ゲームは好きでそれなりに遊んでいるのですが、推理小説の方がどうかというと、新本格ブームの時に一時期熱中して読んでいましたが、その熱が冷めてからは、それほど熱心に読んでいるというわけではないのです。

アガサ・クリスティの作品も、翻訳されたものを少し読んでみたことはあるのですが、ちょっと合わないなと感じたので、読み通してはいません。というわけで、私が持っているエルキュール・ポワロやジェーン・マープルのイメージは、小説から得た物ではなく、デビッド・スーシェとジョーン・ヒクソンが演じていたドラマから得たもののなのです。

当時、日本語吹き替えで「名探偵ポワロ」を見ていましたが、熊倉一雄さんの声と、デビッド・スーシェ演じるポワロの人物像には、物語にそれほど熱心に見入っていたわけではない私も好印象を感じ、その姿を見るためだけにチャンネルを変えていました。

その頃はデビッド・スーシェという名前をはっきり記憶していたわけではなく、ポワロの人、という感じで彼の事を記憶していたのですが、その印象を裏切るきっかけになったのが、ハリウッド映画の「エグゼクティブ・デシジョン」でした。

この映画でテロリスト役を演じていた彼は、ポワロ役の時とは表情や雰囲気は全く違っており、姿を一目見た瞬間に、その演技力に驚かすにはいられませんでした（ちなみに、「名探偵ポワロ」の字幕版を観たことのある方はご存知かと思いますが、ポワロを演じている時の声は、吹き替えの熊倉一雄さんの声のように高い声で、なおかつ独特のアクセントで話しています。しかし、地声は別人かと思うくらい、低めの渋い声です）。

その彼が、ポワロシリーズの製作総指揮の一人であったジョフリー・ワンゼルと協力して、ポワロと共に歩んだ四半世紀について記したのが、この本です。

アガサ・クリスティの本を読んだことがなかった彼が、どのようにしてポワロの人物像や演技プランを練り上げていったか（彼がポワロ役を演じるために作り上げたリストの全貌を読めないのが残念でした）。ポワロを演じる前に、アガサ・クリスティの娘夫婦とランチをした時に交わした会話。実はピーター・ユスティノフ版の「Thirteen at Dinner」にはジャップ警部役として出演しており、その時にピーター・ユスティノフから「君もポワロを演じたらいいよ」と言われていたこと。英国王室から昼食会に招かれた時に教わったマンゴーの食べ方をドラマの中に盛り込んだことなど、様々なエピソードが書かれています。

本の中で紹介されている作品については、それぞれの撮影秘話だけでなく、物語の概要や、作品の原作が書かれた時の背景についても説明されています。また、彼の舞台役者としての仕事に

ついても触れられているので、彼の性格俳優としての一面も知ることができます。役者デビッド・スーシェに興味があった私には、嬉しい部分でした。

テレビドラマや映画では、たびたび、ある作品で一世風靡した俳優が、その後も、その作品の役のイメージがつきまとい続けることを疎ましく感じ、払拭しようとするストーリーを見かけることがありますし、現実でも、そのように感じているのではないかと思われる俳優を見かけることもあります。

ですが、彼の文章からは、ポワロに対してそのような印象を持っている気配は少しも感じませんでした。ポワロを単なるドラマの役のひとつとしてではなく、自分の一部として扱い、「カーテン」で永遠の別れを告げなければならなかったことに深いショックを感じていたことが描かれています。

また、ポワロがきっかけで劇場に足を運んでくれる人々が増えたことにも素直に喜びを表していますし、撮影の休み時間に収録場所の町を歩いていた際に、彼を「ポワロを演じているデビッド・スーシェ」としてではなく、「エルキュール・ポワロ」として話しかけてきた人々とのやりとりの様子も微笑ましく、彼の人間性が十二分に表れているエピソードだと感じました。

途中、ポワロシリーズは大きな転機を迎えながらも、最終作「カーテン」まで映像化されました。ポワロを演じきったデビッド・スーシェさんに、そして、その全ての作品で吹き替えを務めた故・熊倉一雄さんの両名に敬意を表したいと思います。

2019.03.30

短いお別れ

本当はもう少し早く書こうと思っていたのですが、パソコンが故障するというアクシデントが起きてしまったので、遅くなってしまいました。

トップページでも紹介されているので、すでにご存じかと思いますが、この度、パブーの電子書籍製作のサービスが終了することになりました。というわけで、それに伴い、気まぐれレビューを書くのも最後にすることにしました。

拙い文章のレビューでしたが、少しでも読書や映画鑑賞のきっかけになる部分があったのであれば、幸いです。また、少しでも目を通してくださった方々に、心からお礼を申し上げます。

本当に今までありがとうございました。皆様がこれからも良い作品に出会う機会に恵まれますように。